
高梁川愛哀情物語（たかはしがわあいじょうものがたり）

サイシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たかはしがわあいじょうものがたり
高梁川愛哀情物語

【Nコード】

N4698E

【作者名】

サイシ

【あらすじ】

今日も、心の中で多くの涙を流した、あなた、まだ、流す涙が残っているなら、この物語に、優しい愛哀と情の涙を流して上げてください。プログもよろし<http://takahashigawa.blog105.fc2.com>

第1話 家路雲（前書き）

日も、心の中で多くの涙を流した、あなた、まだ、流す涙が残っているなら、この物語に、優しい愛哀と情の 涙を流して上げてください。

第1話 家路雲

八月一日。

JR山陰線京都二条駅より歩いて十分ほど先のマンションから一人の青年が出てきた。

青年は急ぎ足で、淡い夕日に照らされた駐車場へ向かう。

駐車場には、十数台の車が駐車されていた。

その中にブルーのカバーを掛けられた車が一台あり、

青年はその車に歩み寄ると慎重にカバーを外した。

カバーの下から現れた車は、購入して間もない新車なのか、

黒光りする車体には傷は無論のこと、一点の汚れもない。

青年は、車体に傷を付けないよう細心の注意をはらいながら整備点検を始める。

その横顔に夕日が射し、頬がピンク色に染まった。

突然、携帯電話が鳴る。

作業している青年の手が一瞬とまったが、すぐ、片手で作業を続けながらも一方の手で携帯電話を持ち、

「榎山です」

高揚した声で答えた。

「元気そうね、佑二」

「なんだ、お母さんか」

第2話

祐二は、待っていた友人からの電話でなかったため、面倒臭そうに言うと、母親は気にせず、

「今、どこに居るの？」

今まで、聞いたことがないような優しい声で尋ねた。

「駐車場」

警戒心をいだいた祐二は言葉少なに答えた。

「じゃあ、先月半ばに引越した賃貸マンションの？」

「そうだよ」

「じゃあ、仕事を終え、会社から帰ってきているのね、ご苦労様」

母親は、人間が仕事するのは当然のことだと考えているため、ご苦労さまなどと、わが子たちに言ったことがないから、

(また、見合いの話だ)

祐二がうんざりした顔をする。

祐二が見合いと断定する理由は、父親の洋が極端な早婚多産主義だったからだ。

理由を糾すと、洋は急に悲しげな顔をして、結婚が遅れたら多くの子供を生めないからだと答えた。

子供達は、洋が晩婚の夫婦から生まれた一人っ子だったため、淋しい思いをしたせいだと納得したが、洋には誰にも話せない辛い過去があったのだ。

辛い過去とは、洋が大学在学中のある日、若い女性を数人の若者が襲い、車で拉致しようとしている所へ遭遇した。

洋は、咄嗟に助けなければと思い、助けに行こうとしたが、急に身体が硬直して動けなくなった。

原因は何時も両親が言ってる言葉「洋は一人っ子。もし、お前に死なれたら私たちは生きる希望がなくなる。絶対に危ないことはないでおくれ」が頭に浮かんだからだ。

硬直した時間は一瞬だったが、犯人が女性を車に押し込むには充分だった。

拉致車が消えていった道を茫然と見つめる洋の脳裏に、拉致された女性の恐怖に満ちた顔が映った。

その瞬間、女性が殺されると直感し、自分の犯した罪に気づいたのだ。

洋は、藁をも掴むおもいで、犯人達に対し、女性を無事に返してくださいと、地に伏せて頼んだ。しかし、願いは虚しく、二日後、女性は無惨にも死体で発見されたのだ。

その残虐な行為を知った洋は、

「一人っ子でなかったら、助けに行けたのに！」

と、血を吐くように叫び、自分を激しく責める。

「僕に人を愛する強い心があれば、一人っ子の所為にせず、例えば、殺されると分かっているも助けに行けた。人を人が助けずして誰が助けるというのか。僕のような人間が居るから凶悪犯罪が増加するんだ」

洋は、被害女性に対する償いから、人助けが出来るように、多くの子供を産み育てると誓った。

だが、三人の子供しか恵まれなかった。また、子供の数が多くても、人を愛する心と体が弱くでは意味がないと考え柔道や空手を習わし、早婚、多産を推奨していた。

第3話

その影響を受けたのかどうかは不明だが、祐二の兄、保は家業の園芸農園を継ぎ、三十歳にして三人の子の親となり、また、妹の美保は二人の子の親となっていた。

しかし、祐二には、恋人の噂さえない。そこで、父親は策を弄し、祐二を見合場に引っ張りだしていたが、祐二は子供の時に立てた目標があり、結婚する気が全く無かった。

母親が言っつ。

「ねえ、今、東の空には美しい虹が架かっているわ。この虹は、もしかすると、祐二の上に架かっている虹かも？」

母親が居る島根県松江市春日町から、京都に二条までの距離は、東へ三百キロ以上もあり、見える訳がないと思いつながらも、祐二は空を見上げた。

「家路雲」

と祐二が懐かしそうに呟いた。

「何か言っつた？」

母親が聞き直したが祐二は答えず、茜色に染まった美しい夕焼け雲を見ていた。

日本人の大人の中で、夕焼けの美しさに目を奪われ、沈む夕日を見ながら物思いに更けられるほど、心に余裕を持っている人が、今、何人いるだろう、

また、遊び好きな子供たちも塾通いと室内でのゲーム機遊びでは、夕焼け雲を見ながら家路につくものは少ない。

それに比べ、祐二は親から勉強を強いられなかったために、毎日のように外で友達と遊んでいた。

しかし、遊びに熱中するあまり、暗くなっても帰ってこないことが度々あったため、心配した両親は、夕焼け雲が現れたら絶対に帰ってこいと厳命した。

しかし、そこは子供のころ、夕焼け雲を見忘れて遊んでいると、いつも本とノートを持ち、何か書いている近所のおじさんが、祐二の所へ近寄ってきて

「いえじへのくもがあらわれたよ」

と言つて、西の空を指差した。差された方を祐二が見ると、ばら色に染まった美しい夕焼け雲が浮かんでいた。

祐二は、おじさんが、夕焼け雲を、いえじへのくもと言っているんだと気付いたが、文字が知りたくて尋ねた。

すると、おじさんがノートに「家路への雲」と書いて見せた。文字を見た祐二は、おじさんが、家に帰れ、帰りなさい等の命令的な言葉を使いたくないため、間接的な言い方をしたんだと思った。

初めて聞く「家路への雲」が、子供の祐二には、聞き慣れた夕焼け雲より、遥かに新鮮で、魅力的な言葉に聞こえた。

その時から、家路への雲は、祐二にとって、暖かい父母が居る家へ帰る合図、そして、友との淋しい別れの合図になった。

しかし、都会生活は祐二に、空を見る余裕すら与えなかったために、何時の間にか、家路への雲が家路雲に簡略化され、夕焼け雲を、夕焼け雲と意識した時だけ、その美しさに目を奪われるが、家路雲と意識すれば故郷が目に見えなくなるのだ

第4話

久しぶりに家路雲を見た祐二の脳裏に、夕焼け雲から仄かに照らされた帰り道と、その遙か向こうに、霞んで見える故郷の家が現れた。

そして、仲良しだった章治が遊びたりないとかばかり、家路雲を恨めしげに眺めながら、歩いて帰って行く姿に、思わず追い掛けようとする祐二。

「あら、虹の上を飛行機が金色の飛行雲を描きながら飛び越えていった。虹は人が追い掛けても、追いかけても、追いかけた距離だけ逃げるといわね。私が今から虹を追いかけると、何時の間にか島根県を飛び出し、祐二が居る京都に到着するわね。そうだ、私が手紙を書き、その手紙を紙飛行機に折り、虹に向けて飛ばすのよ。虹は人から逃れても飛行機からは逃れないから、手紙は虹の橋を渡って、すぐ祐二の元に着くわね」

と、母親の意味不明な話により、祐二は現実の世界へ引き戻された。

祐二は、自分が抱いていたこれまでの母親像とまったく違う今日の母親の言動に、ますます見合いの件だと確信した。

同時に、浴衣姿の父親が偉そうな顔をして家の縁側に座り、母親は見合い話を切り出すチャンスを伺っている様子が祐二の目に浮かぶ。そこで、無言の抵抗をしようと考えた。

しかし、黙って聞いていると、無駄話を延々と聞かされ、最後は暗闇の中で整備点検をするような羽目に陥ると気付き、

「見合いの話ならお断りだよ」

機先を制した。すると、母親が、

「馬鹿ね、違うわよ」

あっさり否定した。

「ええ、それ本当？」

祐二は、信じられない。

「見合いは父さんの役目よ」

母親が言った。

「じゃあ、用は何？」

母親は少し、間をおいて答えた。

「祐二と話がしたかったから」

「悪いけど、今、忙しいから後にして」

「忙しいって、駐車場で何してるの？」

「車の整備点検」

「なぜ、車の整備点検するの？」

話題を引き伸ばそうとするかのように尋ねてくる。

昼間より涼しいとはいえ、八月のこと、冷房もない駐車場での作業はまだまだ暑い。

「帰省して、買った新車を母さんや父さん、そして、幼友達に見せるために整備点検をしているんだよ。帰ることは、数日前、母さんに連絡したよ」

「そうだったわね」

母親に歓迎の弁はなく、心は何処かよそにあるようだ。

第5話

「用があるなら早く言つてよ」

帰省を歓迎されないと受け取った祐二は、怒ったような口調で言った。

しばらく黙っていた母親が恐る恐る口を開いた。

「ねえ、車に乗って帰省するのは止めてくれない？バスは別だけどすぐ用件を言えない訳がわかった。しかし、祐二が絶対に聞きたくない言葉であり、聞けない要求だった。

一瞬、祐二は啞然としたが、まさか本気と思えず、軽い気持ちで言った。

「そんなこと出来ないよ」

断られた母親は、

「どうしても駄目なの？」

と、哀しげな声で聞いてくる。

本気だと分かった祐二が、声を荒げて言う。

「無理をいうなら電話を切るよ」

母の要求は、祐二にとって、例え冗談でも承服できない要求だったからだ。

子供の頃の祐二は、警察官に成る夢を持っていた。しかし、中学一年生の夏休み前に、その夢を壊す出来事が起こったのだ。

事情を知った親友の章治が、祐二を慰めるつもりなのか、古浦海水浴へ泳ぎに行かないかと、電話で誘ってきた。

落ち込んでいた祐二は、一つ返事で行くと伝え、章治の家へ行ったとき、向かいの家の前に真っ赤なスポーツカーが停まり、中から青年が出てきた。

青年は白と赤が好きなのか、白いTシャツに白いジーパン、首に真っ赤なネックチーフを巻き、颯爽と家に入っていた。

その様子を見て祐二は、格好いいなあ、と、青年の憧れを抱いた。

そこで、章治が家から出てくると、青年のことを尋ねた。話によると、彼は東京の大学を卒業し、大阪の会社に就職したがすぐ退職し、少ない資金でITの会社を設立し、社会に貢献していると。

そのため、彼は家族だけでなく、町内の人たちからも、誇りに思われる存在になっているとのことだった。

「よし、僕も都会へ行き、会社を設立する。乗って帰る車は赤色ではなく、黒塗りの高級車にする」

と、祐二が言うと、章治が。

「僕も親に同じことを言うと、ばか、志はいいが、まず、一人前になることを考えると言われ、それもそうだと思い、まず、自分で新車を買いかえるようになってから、会社設立を考えることにしたんだ」

祐二は東京の大学を卒業すると、すぐ京都の商社に就職した。そして、事業を起こすための資金を作ろうと考え、恋や遊びを封じ、友達や同僚との付き合いを出来るだけ控え、結果、車を現金で買える金が貯まった。

第6話

そこで、二十五歳になる誕生日、即ち、一週間前に新車を買ったのだ。

車は高級車ではないが、大げさにいえば、今日までの人生、それも、全てを犠牲にして貯めた金で買った車なのだ。

明日、第一の目的が果たせる。そして、明後日からは次の目標に向かつて進むんだと、充実感に浸っていた矢先、それも一番に喜んで欲しい母親が壊そうとしているのだ。

また、故郷に住む多くの友達にも、新車に乗って帰るといつてある。今更、乗って帰れないなどと、恥ずかしくて言えない。

祐二は目の前が真っ暗になった。そんな祐二の心を気づかないのが母親が言う。

「祐二が車で帰ってきたと思う気持ちは分かるけど、母さんを助けると思って、黙って、聞き届けて」

「そんなこと、絶対に聞けないよ！」

最後の抵抗を試みようとして、大声で言った。

すると、母親が今にも泣きそうな声でいう。

「どうして母さんを苦しめるのよ！」

祐二は訳を聞くのも忘れ、母親を非難する。

「母さんが無理を言うからだ。だってそうだろう。父さんや母さんが買ってくれた中古の車なら帰ってきてもいい、それなのに、僕が初めて新車を買って、乗って帰ると言う、止めると言う、そんなことを聞けるわけがないよ。そうだ、僕が買った車で帰るのが母さんは嫌なんだ」

「違うわ、それには大きな訳があるのよ」

「訳？」

母親が声を潜めて言う。

「章治さんがね」

「彼がどうかした？」

「死んだのよ」

言つと、悲しみを堪え切れず母親は泣き出した。

「ええー、いつ死んだの！」

家路雲は、親しい友と永遠の別れを祐二に知らせるためだけなのか、それとも、他にも理由があるのだろうか。

驚きと悲しみに言葉を失った祐二に、母親は悲しみを抑えて説明する。

「二日前、名古屋から車で帰る途中、鳥取と島根の県境で交通事故に遭つたのよ。それも酷い事故だったそうよ。だから、母さんは、祐二のことが心配で心配で、眠れない日が続いていたけど、今日、葬儀に参列して、一層、祐二のことが心配になってきたわ」

「なぜ、早く知らせてくれなかつたんだ」

「知つたら祐二が動転し、仕事に手が付かず、事故を起こすかもしれないと思うと話せなかつた。だから、明日、祐二が帰省した時に話すのが一番よいと思つたからよ。」

第7話

「大丈夫だから、遠回しな話をせず、すぐ、言ってくればよかったのに」

「そういわれてもね」

と、苦しそうに言った。

幻とはいえ、章治の顔をみて、過ぎし日々の楽しかった出来事を思いだし、その余韻に浸っていた矢先の悲報、祐二は、ただ、章治の冥福を祈るしかなかった。

母親は祐二の気配から、章治の冥福を祈っていると感じ取り、しばらくの間、無言を続けていたが、頃合いをみて、また話はじめた。「新聞やテレビの報道で、大きな事故が発生したと聞いて間もなく、似たような事故が次々と起こるでしょう。その上、不吉な夢を見ていたの。夢はね、祐二が車で帰省していると、急に真っ黒い闇が現れたかと思うと、一気に祐二を飲み込んだのよ。夢と笑うかもしれないけど、祐二が事故に遭うのではないかと思うと、母さんは恐くてしかたがないのよ。祐二が章治さんのように私の近くで死ぬなんて、考えただけで耐えられないもわ」

章治の死が、母親に大きなショックを与えていることは分かった。だが、話せば分かると思い、祐二が諭すように、

「今の車社会で、そんな事を気にしていたら生きていけないよ。夢を真に受けるなんて母さんには似合わないよ。とにかく安全運転に徹して帰るから安心して」

「駄目、章治さんだって、運転は慎重よ。そのことは母さんもよく知っているわ。それでも、事故に巻き込まれたのよ。これほどいつでも祐二が車を運転して帰ると言うなら、母さんは、今から胸が張り裂けるような苦しみを受けるわ。そして、死んでしまうかもしれないのよ。それでもまだ帰るといふの。今日まで、次男のお前は、兄と妹の陰に隠れ、したい放題にしているのを母さんは許して来た

んだから、一度くらい、母さんのお願いを聞き届けて！」

と、感情をあらわにして言ったあと泣きだした。

大概の親は、わが子が長年の目標に掲げた夢を、明日、果たそうとしていることを知ったなら、如何なることがあっても邪魔はしないだろう。

だが、祐二の母親は壊そうとしている。それも絶対に有無を言わさないとはかりに。

祐二は、母親の不当な要求に対し、断固戦おうとしたが、物心がついてから今まで、一度も、こんなに取り乱した母親を見たことがなかったため、自分が母親を苛めているような嫌な気分になってきた。

母親が言ったように、両親は兄や妹の方に気を取られ、祐二にまでも手が回らない。そのため、ある程度は放任していたのだ。だからといって、悪いことまで放任した訳ではない。叱るべき時は、特別、厳しく叱った。

第8話

だが、いくら叱られても、祐二には、両親の愛が何時も空気のようにあったため、意識する必要がなく、物心が付いたときから、何時も兄弟や友達に目や意識を向けていればよかった。その為、親に愛されているか、いないか等と考えたことがない。

しかし、母がどれほど自分を愛し、無事を願っているかを知らされた今、その愛に、どう応えればよいのかを考えずにはいられなかった。

最初の目標は、会社を設立し、軌道に乗ったら本社を故郷へ移し、高級車に乗って帰ることだった。

だが、買った車はどこにでもある普通の車だ。否、どんな高級車であつても、母を苦しませてまで乗って帰る価値があるかと自問自答したとき、母の涙を価値判断する愚かさ気付いた。

「母さんのいうとおりするよ」

祐二が穏やかに言う

「本当？」

母親は、祐二の急変が信じられないらしい。

「嘘は言わないから、安心したらいいよ」

「ありがとう」

母親が涙声で礼を言った。

「じゃあ電話を切るよ」

「切らないで」

母親が急いで制した。

「まだ、他に何かあるの？」

「母さんは祐二に謝りたいの」

「そんなこといいよ」

「いえ、言うわ。母さんは祐二が故郷へ新車に乗って帰るために、どんなに頑張っていたか知っていたわ。なのに、それを無にしてし

まった。許してね。こんな母さんを嫌いになただろうね」

「嫌いになる？そんなことないよ。母さんの許しがでるまで、電車で帰るよ」

祐二が明るく言うつと。

「許してくれるのね。有難う。電車は大賛成よ、無事に帰ってきてね。そうだ、祐二が松江駅に着いても迎えに行けないからバスに乗って帰ってね。バス以外は駄目よ」

と、母親は何度も念を押してから電話を切った。

母親の無茶な要求に屈したものの、祐二は精神的に、父母との距離が急に縮まったような気がし、絶対、父母には嘆きをかけてはいけないという気持ちが沸き上がった。

しかし、生まれてから初めて経験する悲しい友の死と、自分の目が挫折したことで、虚しさにとつと襲われ、何も考えられなくなった。放心状態になった祐二は天を仰ぐ。

空は祐二の心のように、何時にか暗い夕闇に覆われていた。

暗さは祐二を一層、孤独へ追い込む。それでも、祐二の手は車体を磨いていた。

やがて、祐二は気付いた、このまま、自分の心を闇の世界へ沈めたら、氣力を失い、明日、故郷の父母や友、そして、遊んだ海、山などの自然に惨めな姿を晒すことになるつと。

第9話 お伽話

作業を終え自室へ戻った祐二だが気分が滅入る一方だった。

そこで祐二は、気分転換を計るために、映画を見に行こうと考えた。しかし、どんな映画でも、必ず、悲しい場面がある。

今の祐二には、悲しいことや苦しいことなど、そして、人が流す涙さえも避けて通りたい心境なのだ。

人が絶対に涙を流さない所は何処だ、と考えたとき、食事する場所だと気付いた。

食事処なら、マンションから十分ほ歩いた先に山陰電車の二条駅があり、駅付近には様々な食堂がある。

祐二は、整備点検作業により汚れた衣服を着替えるとマンションを出た。

十分後、二条駅前にきた祐二は、回転寿司の看板を見て、しばらくの間、店の前で立ち止まったが、忙しそうなので入店を諦めた。

祐二が求める食事処は、心が暗くならないような、明るい照明と食事時間に神経を使わない店が良いのだ。

祐二の目に、ファミリールレストランが見えた。ここなら、明るく、少しぐらい長居をしても営業の邪魔にはならないと考え入った。

「ハンバーガーとコーヒー」
と、注文した。

何時もの祐二なら、こんな軽い夕食は絶対に辛抱できないのだが、今日は全然空腹感が湧いてこないのだ。

食事を終えた祐二は、すぐ帰ろうと思ったが、よく、考えてみると、だれも居ない部屋に戻るの、折角、気分転換を計った意味が無くなるように思えた。

そこで、しばらくの間、ここに居させて貰おうと、何気なく入り口に目を向けると、祖母らしき上品な老女が、ピンクのフリルが付いたワンピースを着た、曾孫らしく五歳くらいの可愛い少女に手を

引かれ入ってきた。

祖母は店内を見渡していたが、祐二の隣に二つの空席があるのを見付け、少女に、その席で待っているようにいうと、自分は飲食物を注文し、出来上がると、それを持って少女を祐二と挟む形で座る席の前に立ち、

「お待ちどうぞさま」

と言つて、二つ持ってきたアイスクリームの一つを少女に渡した。

「おいしそう」

少女は一口食べると、

「冷たいから美味しい」

満足そうに言った。

「そんなに美味しいかい」

第10話

祖母も口にする。

少女が祖母に可愛い声で言う。

「おばあちゃん、昨夜、聞けなかったお伽話をきかせて」

「お伽話？」

祖母は、頬に手をやり考え込んでいたが、思いだせないらしく、少女に尋ねた。

「ええと、なんだったかね？」

少女は、もう忘れたのというような顔をして言った。

「タカハシ川のお伽話よ」

（たかはし川？）

と、何処にでもあるような川の名を聞いたはずなのに、なぜか知らないが、祐二の心に美しく響いた。

「そうだったわね。ごめんね、忙しかったから、すっかり忘れたわ」
少女が尋ねる。

「その川は、鴨川より大きい？」

祖母は両手を大きく広げて言った。

「大きくて、とても綺麗だったわ」

「ほんと」

黒い瞳が全部みえるぐらい目を開けた少女は感心していたが、また、尋ねた。

「その川は、どこにあるの？」

祖母は、遥か遠くを見るように、

「岡山県よ」

と、答えた。

県名を聞いた祐二は、

（あの高梁川だ）

内心で納得したのと同時に、暗い処へ閉じこめていたものが急に

明るい世界へ飛びだしてきたように、一人の女性と、その周りで楽しげに遊ぶ子供たちの姿が浮かんできた。

「岡山県で、京都から遠いの？」

子供は知識欲の固まりだ。この少女も初めて見聞きするもの全てに興味を持つ。

「おばあちゃんには、正確な距離を知らないけど、新幹線に乗ると、約一時間半くらいの所にあるわ」

「ふう」

少女は、分からないらしく、ふう、と言って、アイスクリームをたべる。

高梁川は、岡山県と鳥取県の県境、中国山地に源を発し、新見市、高梁市、総社市、倉敷市から瀬戸内海へ流れ出る岡山県の代表的な川である。

少女が急に思いついたのか、

「わたしが行きたい。どうすれば行けるの？」

第11話

少女の問いに。

「新幹線に乗って岡山へ行き、伯備線に乗ればいいのよ」と、丁寧に教えた。

伯備線は、瀬戸内海側のJR山陽線岡山駅と日本海側のJR山陰線を結ぶ路線で、区間は岡山駅から白耆大山駅までであるが、特急電車は、岡山から出雲間を往復している。

また、伯備線の大きな特徴は、線路の大部分が、高梁川や日野川等に沿って敷かれていたため、いつも車窓から美しい渓谷や清らかな水の流れを間近に見られることだ。

「そうだ、私が高梁川へ行った時は小学生だったわ。由美が小学生になったら一緒に行こうね」

老女が高梁川へ行ったのは、老女が小学生のときだった。だから、老女が見た高梁川は、今から七十年前の高梁川である。

「うれしい、約束よ」

少女が目を輝かせ、小指をだし祖母と指を絡めた。

「ハイハイ、忘れないわ」

「早くお伽話を聞かせて」

少女が急かすと。

「じゃあ、お行儀よく聞いてね」

祖母が話始めた。

「昔々」

と、話ながら祐二を見た。祐二は驚いて目礼した。

幼子にお伽話を聞かせるのは老女に優さるものはいないだろう。

なぜなら、幼子には、老女が大昔の人間に見え、お伽話が現実の話のように聞こえてくるのだ。

ここに、お伽話を現実の話のように受け取った若者がいた。それは、心に大きな悲しみを負った祐二である。

今の祐二は、その悲しみに苛まれ心は空虚だった。その空虚な心に、老女の姿とお伽話が入り、一時的に祐二を子供に帰らせたのだ。絵本から抜け出したような老女と幼女、そして、話し方が上手だったために、祐二は何の抵抗もなくお伽話の中に入れていった。

お伽話が佳境に近づくにつれ、祐二の脳裏に高梁川の河原で見た景色が蘇り、その場所が祖母が語るお伽話の河原と同じ所のように思えてきた。

すると、二年前の夏のことのはつきりと思い出した。

あれは二年前の夏の早朝、祐二が自分の車にお土産を積み、故郷へ帰省するため、車を発車しようとした時、車の故障に気付いたのだ。

整備点検を怠った我が不注意に愛想を尽かしながら、修理をはじめたが、とても直せる程度の単純な故障ではなかった。

第12話

一瞬、祐二は帰省を諦めかけようとしたが、幼なじみの友達に、帰るから会ってくれないかと、無理に頼んだ経緯があるのだ。

祐二は、飛行場の無い京都から島根県へ一番早く帰れる便を探して結果、山陽新幹線と伯備線を利用すればよいと分かった。

急いで新幹線京都から岡山駅へ行き、伯備線の岡山駅で特急電車やくも号に乗った。

電車は、備中高梁駅手前にある高倉山の麓へ到達、線路はそこから二股に別れ、電車は高梁川沿いの線路に入った。この路線には短いトンネルがあった。

電車がトンネルを出たとき、左側の車窓から光が射し込んできた。祐二は、何気なく目を車外に向けると、思わず目を見張るような美しい景色が広がっていたのだ。

高梁川が三色に分割されたかのように、手前には清く住んだ水が流れ、向こう岸は、青々とした草木に覆われ、真ん中には、白く輝く河原が広がっていた。

河原には、色も鮮やかな一本のパラソルが立てられ、その中で、一人の女性が写生し、その周りを囲むように、数人の子供たちが楽しそうに遊んでいた。

祐二は、女性の顔を見たい衝撃に駆られ、目を凝らした瞬間、女性の姿は障害物に阻まれ、見えなくなってしまった。

景色や女性を見た時間が瞬間と表現するほど短時間だったために、景色は窓枠に嵌め込まれた絵画、否、お伽の国を見たような気がした。

二日後、偶然にも同じ時刻の電車に乗る機会があったため、もしやと見ると、女性はパラソルの外に立ち、子供たちと一緒に、やくも号に向かって、手を振っていた。

女性の長い黒髪が大きく靡いているところを見ると、どうやら、

風が強くて写生が出来ないため、子供たちと遊んでいると推察した。祐二は、景色には目もくれず、女性の顔を凝視した。だが、顔は日陰に遮られ、ぼやけた輪郭しか見えなかったが、髪をヘアーバンドで止めているだけは鮮やかに見えた。

女性の顔を見ることが出来ず、祐二は未練から、女性の姿や顔の輪郭の残像を追いかけていると、女性の顔が、もやっと、浮かんできた。だが、それ以上鮮明にはならない。

そして、なぜか、甘酸っぱいものが祐二の胸を締め付ける。

急に逢いたくなつた祐二は、次の駅で電車を降り、彼女が居る河原へ行こうとして、それを制止する強い意志が働いた。

「お前には目的がある。今、恋や遊びをする余裕はあるのか」と自らを叱っていたのだ。

その日のことを思い出し、失った過去を惜しむと同時に、現代の二年間は光速を連想さすほどの速さで開発が進むため、女性が居た川も、緑の草木で覆われた堤防が、無表情な堅いコンクリートの堤防に変わり、お伽の国の体をなしていないかもと危惧した。

その心配は心配として祐二は、ふと感じた。あの河原へ行けば、この悲しみと、失った過去が取り戻せる、そして、女性が何者であるかの疑念も晴れると。

第13話

お伽話を聞く少女は、アイスクリームを食べるのも忘れて聞いている。そのため、アイスクリームがテーブルの上に落ちた。

「あら、アイスクリームが落ちたわよ」

と祖母は話を中断し、ティッシュで拭き取った。

「もったいないことしたわ」

と少女は言いながら食べる。

やがて、祖母が、

「はい、お伽話は、これでお仕舞い」

と、いうと、少女が物足りなさそうに尋ねる。

「ねえ大蛇さんは何処へ行ったの？」

「大蛇は瀬戸内海に到達すると、龍に変身して竜巻をおこし、その竜巻に乗って、高梁川の上流の山に帰ったそうよ」

「そうなの、じゃあ、困った時にお願いしたら、また現われるのね」

「そうよ、でも、よい子にしていないと現われないわ」

「わたし、よいこになるわ」

「お利口ね」と、言って、少女の頭を撫で、

祖母は少女の顔に自分の顔を合わせ、尋ねる。

「面白かった？」

問いに、少女は興奮した面持ちで。

「うん、とても」

「そう良かったわ。でも最後に覚えていて欲しいことがあるの」

「なにかしら」

と少女は怪訝な顔をする。

「お伽話はね、人の不幸を幸福に変えるもの、もし、由美が不幸な境遇になったら、お伽話を思い出してね」

少女が、はい。と素直に返事すると祖母が話す。

「不幸を不幸と感じる心に偽りはないと思うけど、必ずしもお伽話

より不幸でないかもしれないわ。だから、自分が不幸と思った時は、今の自分より不幸なお伽話を思い出すことで、自分が不幸と思っていることが、急に取るに足らないもののように思えて、元気を取り戻せるわ。でも、心の置き所を間違えば、幸せは絶対にやってこないわよ」

祐二は、祖母がこんな難しい話を聞かしているのは、幼い子供だけでなく、萎れた祐二を、間接的に元気づけているように感じた。

（ありがとうございます）

祐二は祖母に、声には出さないが、心をこめて礼を述べた。

第14話

祖母に生き方を教わった祐二は、章治の不幸を嘆くのは当然ながら、我が身のこと、この世の不幸を一身に背負ったように、嘆いた自分を恥ずかしく思った。

祖母は祐二がお伽話を熱心に聞いていたのを知っていたのか、祐二に軽く会釈をし、少女の手を取り店を出ていった。

後を追いつけるように、祐二は祖母と孫娘の後に続いて店を出た。店外に出た祐二の姿は、レストランへ来るまでの、あの肩を落とした物悲しさが消え、顔は以前より明るくなっていた。

薄明かりの道を、祖母と孫娘が手を繋いで帰って行くのを見送っている祐二の目に、薄明りに照らされた建物の白い壁が夕焼け雲のように映っていた。

見送る祐二を別離の寂しさが包む。

やがて、自室があるマンションの前へ帰ってきた祐二は、何となく空を見上げるが星は見えず、都会特有の中途半端な暗い空だった。しかし、祐二の目に映ったのは、明るい太陽に照らされた高梁川と女性と子供たちの楽しげな姿だった。

逃げ場もない程の悲しみと、失意の淵を漂っていた祐二に、救いの手を差し伸べたのはお伽話であった。

祐二は高梁川へ思いを寄せていると不意に、今回の帰省日が頭をよぎり、二年前の月日と同じ八月二日から四日。

そして、電車でお伽の国の横を通り過ぎる時刻は、以前と同じ午前中である。

この偶然を、女性と自分の間に、ただならぬ因縁があることに気付いた。

祐二は、胸の中を熱いものが駆け巡り、もやっとしか見えない女性の顔を思い浮かべ、「愛してる」と、呟いたとき、もやっとした女性の顔が、本のページをめくるように消え、長くて黒い髪を藍色

のヘアバンドで留めた美しい女性の顔が現れた。

あまりにも顔がはつきりと見えたので、祐二は急に恥ずかしさを覚え。

「高梁川を」と言っていた。

「無作法を許してください」と、詫びたが、女性はそれに答えず、何かを訴えているかのような表情をしていた。

祐二が尋ねる。

(僕は貴女を一度も見た記憶がない。でも、貴女の顔が浮かぶので。何処で逢って、何を訴えたいか教えてください)

女性は何も答えてくれないが、分かったことが一つあった。それは、祐二にとって、女性が自分の命より大切だと言ったことだった。

祐二が希望に満ちた声で小さく叫んだ。

「行こう、お伽の国へ」

第15話約束やぶり

翌朝、原町の自宅マンションを出た祐二は、二条駅へ向かっていった。

「キヤー」

突然、前方から女性の恐怖に満ちた悲鳴が聞こえた。

祐二は、咄嗟に二個のバックを道端に置き、悲鳴が聞こえた方へ走る。そして、全神経を集中し、道の両側に建つビルや民家を見、内部に聞耳を立て、露地が現れると、露地の中程まで行き、居ないと判断すると、元の道路へ駆け戻る。

そんなことを繰り返しているうちに、何時の間にか、悲鳴が届かないほど先にある道の曲がり角まできていた。

遠くへ来すぎたことに気付いた祐二は、適当な所まで早足で戻り、それ以後はどんな些細な物音でも聞き漏らさないよう、息を殺して後戻りした。

道を半分ぐらい引き返した時、走っていても聞こえないような、小さな悲鳴が連続で聞こえてきた。

聞耳を立て、悲鳴の出所を探すと、庭を樹木の垣根で囲った一軒の庭の中だった。

垣根には所々に小さな隙間があり、庭の一部が見えた。庭には緑の芝生が植えられ、芝生にはカップが切られ、その近くにゴルフのパターが投げ捨てられていた。

カップから少し離れた所に、中学生らしき少女が、恐いものを見るように顔を横に背け、横目で箒の先の小さな黒い固まりを見ながら突き突きし、突くたびに小さな悲鳴を上げていた。

突かれているのは特大のゴキブリだった。

その様子を見た祐二は、少女がゴルフボールをカップに打ち込み、そのボールをとるために、カップに手を入れ、ゴルフボールを掴むのと同時に大嫌いなゴキブリを掴んだために悲鳴を上げたと考え戻

り始めた。

だが、悲鳴を上げた女性が他に居るんじゃないかという疑念が湧いてきた。その疑念が段々と大きくなり、後戻りが出来なくなってしまうた。

そこで、祐二は疑念を晴らすために、少女に尋ねるのが早道と考え尋ねることにした。

しかし、事件に深く関われば、予定した時刻の電車に乗り遅れた場合、お伽の国の女性に逢えなくなる恐れがあるのだ。

祐二は迷った。

迷った挙げ句、祐二は時計を見る。まだ、時間の余裕が少し有ったため、少女に尋ねようとして、庭の中を見たが居ない。

慌てた祐二は、無意識に垣根の隙間深く顔を入れ、庭全体を見渡すと、少女は庭の隅でゴキブリ相手に同じ動作を繰り返していた。

どうやら、大嫌いなゴキブリを自分の目の届かない庭の隅へ追いやろうとしているように見えた。

第16話

祐二が声を掛けようとした時、突かれていたゴキブリが逆襲するかのように、羽を広げると、少女の白い足に飛びついた。

「きゃっ」

少女は、これ以上の恐怖を表せないほどの悲鳴をあげ、家に駆け込んでいった。

悲鳴を聞いた祐二は、最初に聞いた悲鳴と同一だと分かったため、少女に尋ねる必要はないと、その場を立ち去ろうとした時。

「母さん庭を覗いていている人が居るよ。女の人が悲鳴を上げたからストーカーだよ」と突然、後方で男児の甲高い声がした。

驚いた祐二が振り向くと、十メートルほど後方に五、六歳ぐらいの男児が、祐二を指差していた。

「違うよ!」と、祐二が大声で言った。

「譲二、早くこっちへ来なさい!」と、母親らしい女が恐そうに男児に言った。

「待つてください、僕はストーカーではありません」

言いながら、祐二が母子に近寄っていくと。

「来ないでください!」と拒絶する。

「どうか訳を聞いてください」

祐二が理由を説明をしようとしたが、母親は、恐怖感を顔や身体全体に表し、祐二の言い訳を聞こうともせず、子供の手を引き、露地へ駆け足で逃げ込んでいった。

祐二は誤解を晴らすため、母子を追い掛けようとしたが、その様子を他人が見たら、一層の誤解を受けると考えて止めた。

祐二は、道に置いていた荷物を取りに戻り、両手で荷物を持ち上げた時、ブレーキ音と同時に車が横で停まった。

祐二は、母子の通報によって警官が来たのかと緊張した。

「お早う」と、穏やかな声で挨拶された。

驚いて相手の顔を見ると、同じマンションに住む佐藤という中年の男性だった。

「お早うございます」

祐二が挨拶を返すと、佐藤が尋ねる。

「大きな声が聞こえてきました。あの声は？」

「あれは僕です」と頂垂れると。

「何があつたんですか？」と追求してくる。

第17話

「僕が誤解を受けるようなことをしたのです」

「どんな誤解を？」

祐二が真相を話すか迷っている。

「訳を話してくれますか」と興味津々で尋ねてくる。

佐藤の態度が、何となく興味本位に写ったため、話すことをためらったが、よく考えてみると、誤解をはらす絶好の機会だと気付き、「聞いてくれますか」と祐二は一部始終を話した。

「そうですか。善いことをしていても悪いことをしているように見られる。嫌な世の中になりましたね」と佐藤が同情してくれた。

「はい、誰にも誤解を話すことが出来ず、心が重かつたんです。けれど、貴方に聞いていただいて、心が晴れました。感謝します」

「それは良かった。ところで、その様子から、出張ですか？」

「いえ、帰省です」

「どちらへ？」

「島根県です」

「出雲大社が有名ですね」

「はい」

「所で帰省する乗り物は？」と佐藤は話好きなのか、次々と質問する。

「電車です」

「じゃあ、二条駅かあら余部鉄橋を渡る山陰本線ですね」

「いえ、新幹線を利用しようと思っています」

「ということは、二条駅から京都駅へ行くんですか。じゃあ、私は所用で京都駅近くへ行くので送りますよ」

との申し出に対して、祐二は母親に、バス以外の車には絶対に乗らないでと言われていたので、一度は断ろうとしたが、場合によっては、ストーカー冤罪を晴らしてくれるかもしれない大切な証人の

好意を断るのも失礼と考え、

「お願いします」と、言つて、祐二が車に乗つた。

「電車は時間がかかるでしょうね」

「はい」

「私は何時も思っているんですよ。もし、京都に飛行場があったら便利だろうとね。そして、今より観光客が何倍も増えるだろうと」

第18話

「同感ですね」

「折りあれば、京都市に、飛行場建設の計画があるのかないのか尋ねてみようと思っっているんですよ」

「おそらく計画はないでしょう、なぜなら、京都は遺跡が一杯ですから」

「なるほどね」と話している間に京都駅に着いた。

「思い荷物を持っていたので助かりました。どうも有難う」

祐二が丁寧にお礼を言った。

「どういたしまして、どうか良い旅をしてください」と言って、佐藤は車を発車させた。

祐二が乗車券売り場へ着いた時、会社の上司に出会った。

祐二が母親との約束を破り、佐藤の車に乗ったことで、祐二の運命が暗転することになる。

だが、神ならぬ身の祐二には知る由もなかった。

「お早うございます」

祐二が挨拶すると、

「今から帰省かね？」

「はい」

「乗車券を買った？」

「まだです」と、何気なく答えた。

「それは良かった。私は東京へ行くのだが、コーヒーが飲みたくなつた。少しの間、付き合ってくれないか」と、嬉しそうな顔をして言った。

上司に誘われ、祐二は、思わず、しまった、と思つたが、上司との関係を考えて、断れないため、

「いいですよ」と渋々同意した。

「じゃあ、少しの間、付き合ってくれるか」

上司は嬉しそうに、祐二を喫茶店へ連れて行った。

喫茶店に入るなり上司は、飲み物の注文もそこにゴルフの腕前を誇らしげに話した。

どうやら、祐二を喫茶店に誘ったのは、ゴルフの自慢話を聞かせるためだったのだ。

ゴルフの経験がない祐二だが、話し相手をするぐらいの知識はもっていたため、上司を失望させずにすんだ。

上司は少しの間と言っていたが、少しどころが予想以上の長話を聞かされた結果、予定していた乗車時間より一時間も遅れて博多行き、のぞみ号に乗った。

その時刻、山陽新幹線岡山駅のプラットホームに、気分が萎えるような蒸し暑い空気が立ち込めてきた。

第19話

乗車待ちする多くの人々は、その不快さから逃れたいと思いつながら、今更、冷房が効いた待合室へ降りて行くのが面倒と思うのか、時々、時計を見ては、動きの遅い針と我慢比べをしていた。

そして、電車が到着するたびに、乗車待ちをしていた人たちの顔に活気が宿る。

やがて、祐二が乗った博多行き、のそみ号が速度を徐々に落としながら入ってきた。

すると、あたかも、のぞみ号を後押しするように一陣の生暖かい風が吹いてきて、ゴミ箱の上へ無造作に投げ捨てられていた新聞紙を一気にホームに吹き落とし、ページを勢いよくめくっていたが、すぐ、その力を失い、紙面を広げたまま止まった。

紙面には、四国の水瓶、早明浦ダムの湧水と、側溝に落ちた犬をレスキュー隊員が助けだした写真が、紙面上部を二分する大きさで掲載されていた。

下欄には現在の社会不安が一目で推察できるように、極道非道な殺人事件や倫理の欠けらもない犯罪事件が数多く記され、その中には、一ヶ月前に誘拐された少女の顔写真と情報を求める記事が小さく載っていた。

被害者の少女が着ている制服や白い衿からみて、今年の春、小学校へ入学した時に写したものと分かる。

少女は、野辺に咲く花のように、清純無垢な笑みを浮かべ、「わたし、今日から小学生よ」と、誇らしげに語りかけてきそつだ。

祐二が乗っている車両は、新聞紙の横をゆっくり進み、そして、停車した。

ドアが開いた。乗客たちは整然と降りるが、降りた途端、その堪え難い蒸し暑さに気付き、駆け足で出口へ向かう。だが、最後に下車した祐二の足だけが重い。

原因は、岡山駅到着時間が予定していた時間より一時間以上も遅れたことにより、お伽話の国女性に会える確率がほぼ無くなったと考えたからだ。

それを証明するのは容易だった。何故なら、真夏の太陽は、地上を灼熱地獄に落とし入れ、路を歩く人の姿を完全に消し去っていた。この暑さはこれから一段と増し、とても、若い女性が写生する環境ではないのだ。

その祐二の目に、散乱した新聞紙が目に入った。

「可哀想に」と小さな声で呟き、新聞紙を拾い上げた。

昨日までの祐二なら、新聞を買うのは稀で、いつもは、社や喫茶店に置かれた新聞を読み、読む紙面は主に経済主体で、事件関係の記事はほとんど読んでいなかった。と、いうよりか、諸事に気が奪われては、目的を果たせなくなると考えたからだ。

しかし、紙面の記事は、祐二が見聞きしてことより遙かに悪い社会情勢だったため、祐二の顔が一層暗くなる。

新聞紙を屑箱に入れ、駅を出た祐二は、米子駅経由、出雲行き、特急電車やくも号に乗り換えるため、伯備線岡山駅のホームに向かった。

第20話八雲

伯備線へ向かう祐二の前を、白いジーパンとライトブルーのサマーセーターを着た三十歳位の美しい女性が、小学校低学年の少女と幼稚園児らしき男児と一緒に歩いていた。

どうやら親子連れらしく、女性はリュックサックを背負い、二個の荷物を重そうに両手に持ち、子供たちにも、大きなリュックサックを背負わせていた。

女性の顔は汗にまみれていた。その様子から、何となく危険を感じていた祐二は、母親の持っている荷物の一個でも持ってあげたいと思った。

しかし、子供連れの女性は用心深いと誰かが話していたことを思い出し、余計なことを言っていると、警戒されるだけと考え、関わらないことにした。

そんな時、母親の背負ったバックが横にずれた。それを直そうと母親が背中を動かした途端、手に持っていた荷物とのバランスが崩れ、歩道に、つんのめるように倒れかかる。

「危ない！」

祐二は思わず声を出したが遅く、母親は倒れた。

とっさに、祐二は助け起こしに行こうとしたが、自分が持っている荷物が邪魔をして、急には動けずにいた。

すると、前を歩いていた中学生らしき少年が素早く駆け寄り、母親の背負っている荷物を肩から外し、母親の両手を持つと引き上げるように助け起こした。

その間、子供たちは、どうして良いか分からず、突っ立っていた。がよく見ると、男の子が泣きべそを掻き姉に縋り付いていた。

助け起こされた母親は、よほど驚いたのか、顔を蒼白にさせ、足が小刻みに震えていた。だが、必死に態勢を整えると、震える声で少年に礼を言った。

「有難うございました」

「いえ」

少年は、女性の顔を見て、一瞬、色白の顔を真っ赤に染めたが、すぐ女性の身を案じ、はにかんだ様子で尋ねた。

「怪我、ないですか？」

「ええ、大丈夫よ」

それを聞いて安心した少年は、母親が持っていたバックのうち、一個を手に持ち、行き先を尋ねた。

「米子です」と母親が答えた。

少年は小さく首肯き、母親が持っていた、もう一個の荷物をも受け取ると歩きだした。

二人の子供たちは、少年を尊敬の眼差しで見ながら、少年のすぐ後ろを歩いて行く。

祐二も、少年や親子のあとを追い掛けるようについていった。

少年は親子を伯備線、やくも号乗り場に案内すると。

第21話

「指定席券を見せてください」

母親が座席券を少年に見せると、少年は、母子を乗車位置へ連れて行った。

しばらくすると、やくも号がプラットホームに入って来た。

少年は、母親の荷物を持ち、車両中間よりやや後部の座席へ母子を導いた。

「有難うございました」と、母親が少年に礼を言った。

少年は、また恥ずかしそうな顔をし、黙ってお辞儀すると、電車を降り、別のプラットホームへ行った。

その後ろを母親と子供たちが感謝の眼差しで見送っていた。

ホームにいた祐二からは、少年と母親の言葉は聞こえてないが、大体のことが読みとれ、祐二の胸が感動に熱くなった。

全てを見終わった祐二が座席券を見ると、座席は母子より、三席後方だった。

乗車した祐二は、荷物を置くと思際の席に着いた。

そして、惹かれるように、あの母子に目を向けた。

すると、母親似の黒い瞳が印象的な少女が席を立ち、後方に愛らしい笑顔向け母や弟と楽しげに話をしていた。

母子の様子を見ながら祐二の脳裏に過ぎし日が蘇る。夏休みがくると必ず、子供を連れ何組かの家族が都会から帰ってきた。その時、祐二の目を引くのは子供たちではなく、都会風に洗練された美しい母親たちの姿だった。

祐二は、急に自分が自分でないような気がしてきた。それもその筈、昨今迄の祐二は、諸事に目を向けたり、関わることは、目的達成の最大の敵と考えていたからだ。

突然目の眩むような稲妻が走ったかと思うと、雷鳴と共に激しい雨が降ってきた。

祐二はその激しさに驚き、無意識に身を避けようと身体を横に向けた。すると、自分の肘が人体らしきものにゴツンと当たった。「すみません」

祐二は急いで謝ってから横をみると、何時の間に座ったのか、隣の席には、頭髮が薄くなつた六十歳くらいのセールスマン風の男が座っていた。

男も今の雷と豪雨に肝を潰したのか、興奮した声で言った。

「謝らなくてもいいよ。光と音の凄さに、私も飛び上がるほど驚いたんだから」

電車が駅を出るとすぐ、滝のような豪雨が電車を襲い、激しい雨音を立てる。

そして、十秒ごとに、稲妻が走り、豪雨で薄暗く曇つた景色を、一瞬、白日の下に曝すと、今後は身も縮む程の轟音を鳴り響かす。その度に、子供や女性たちは悲鳴を上げる。

同時に、身体を椅子に伏せ、誰ともなく助けを乞うていた。

祐二は、あの母子が、恐い思いをしているかもしれないと思い、親子の席を見て驚く。

席では、母と娘が恐そうに抱き合っていたが、男の子は雷を恐がらず、母や姉は僕は守るんだと、肩を怒らせ、突っ立っているのだ。

第22話

（あの泣き虫だった子が、いつの間にか弱い者を助ける強い男の子になっている。男はそうでなければならぬ。小さな勇者よ、頑張れ）

声無き声援を迷った。

その内、乗客たちは稲妻や轟音に慣れてきたのか、方々から話し声が聞こえだした。

やがて、電車は倉敷駅に着いた。

祐二が心配げに、横の男に尋ねる。

「この豪雨は一日中降り続けるでしょくか？」

「いや、にわか雨だから間もなく止むだろ」

聞いた祐二は安堵した。だが、すぐ。質問の仕方が間違っていることに気付いた。

「高梁市方面は降らないでしょうか？」

尋ね直すと、男は、祐二の上へ身を乗り出し、電車の窓の曇りをティッシュで丹念に拭き、屋根と屋根の間に隙間から空を見上げ。

「雲が南西から北東に向かっていているようだ。雷雲は雨を降らす範囲が小さい上、北東に向かっていているから、ここから北西に位置する高梁市は、今後、降る心配は無いね」と、男は分かりやすく説明した。

「良かった」

祐二がほっとしたようにいうと、男は尋ねた。

「雨が降ると都合が悪いことでもあるかな？」

お伽の国へ行くとも言えないため、世間並のことを言う。

「いえ、雨が降ると景色が見えないから退屈します」

「なるほど」

納得した男は、バックから、祐二が屑箱にいれたのと同社の新聞を取り出して言った。

「この豪雨が、早明浦ダムに降ればいいのにね」

「すみません」

祐二が謝ると。

「ええ？」と、男は訳が分からず、祐二の顔を見た。

祐二が釈明する。

「雨が降らず、水不足のせいで、殺人事件さえ起こっているのに、雨の旅は退屈だ、などと、自分が勝手なことを言ったことです」

「君は、もしかすると、私が贅沢をいうなど、新聞を見せたと思っているんだな。もしそう受け取ったのであれば申し訳ないことをした」

「じゃあ、他のことで？」

「そうだよ、見せたのはね、毎年のように渴水しているのに、対策を立てず、同じ水不足を繰り返し、人々を難渋させる行政の怠慢を批判したかったんだよ」

「そうでしたか。でも。難渋している人たちのことを考えると、やっぱり軽卒でした」

素直に非を認めて謝る祐二を見て、男は我が子以上の親しみを感じ始めた。

第23話

「そうだね、私もこれから気を付けるよ」と、男は言ってから尋ねる。

「帰省かね」

「はい」

「私の名は岡本、仕事で出雲へ行くんだが、君の故郷は高梁市かね」「島根県生まれの檉山祐二です」と言って、祐二が名刺を渡すと、

岡山は、一瞬、おや、というような顔をしたが、

「京都の京極商事は、確か下京区西大路通りに面した所にあつたね。私も同業だよ」

と言つて、岡本も名刺に祐二を渡した。名刺には、岡本正樹とあり、会社の所在地は、大阪の梅田となつていた。

「島根県か、いい所だ」と、遠くを見ながら呟いたのち、自分の故郷を思い出したのか寂しそうに言う。

「いいなあ。帰れば、優しい親、同級生、美しい自然が待っているんだね、私にも故郷があつた。しかし、今は帰っても誰も居ないんだ。過疎化によつてね」

言いながら岡本は目を潤ませていた。

「悲しい話ですね」

岡本は、うん、と頷いた後、尋ねた。

「君の両親は、健在かね」

「ええ」

岡本は、なぜか母子が気になるのか、

「あの母子にも、お祖父さんお祖母さん、そして、美しい自然が両手を広げて迎えてくれている。そして田舎は安心して子供が遊べる。きっと楽しい夏休みとなるだろう」

と、言った美しい言葉の裏には、そうあつて欲しいと言つ願いが込められていた。

祐二が岡本の次の言葉を持っていると、

「いい身体をしているね」と、急に話を変えられた。

「いえ、まあ」

祐二が恐縮していうと、岡本は目を細めて尋ねた。

「仕事に満足しているかね」

「むろんです」

その満足げな答えに岡本は、笑顔で言った。

「じゅあ、自分の理想の職に付けたんだ」

「ええ、でも子供の時は違っていました」

興味深げに岡本が尋ねる。

「ほう、それは何かね？」

第24話

「父親に痛い目に遇わないと、人の苦しみや痛みが分からない。そして、手加減も、といわれ、空手と柔道を習わされました。その関係で警察に成りたいと思ったんです」

「しかし商社員になった。なぜ？」

「生意気にも、会社を設立したいと考えたからです」

祐二がはずかしそうに言う。

「結果を尋ねるのは早いかな？」

「はい、未だ核さえ見え、です」

「頑張れと言いたいが君は正直で優し過ぎる。商社より警察官向きだと思う」

「正直や優しさには異論が有りますが、時々、僕もそう思ったことがあります。しかし、僕が中学一年生の時、級友の一人が他校の生徒数人に袋叩きにされているのを見て、止めに入ったのですが、反撃されたので、手加減ができません投げ飛ばしました、後日、投げた生徒の保護者が警察へ行き、僕に骨を折られたと被害届けをだしたのでです。罪には問われなかつたんですが、それが切っ掛けで警察官になる夢を捨てたんです」

「なるほど。私も、何度か人生の岐路に立った。そして、その度に自分の意志で道を開いたと、その時は思っていたが、今、思うと、何だか運命に操られていたような気がしてならないんだよ」

「運命、ですか」

「そう、榎山君と私が同席していることも運命と思うんだが、どう思う？」

電車の中で会ったからといって、運命と論じるは、あまりにも胆略的だと考え。

「そうは思いません」と、強く否定的に答えたが、岡本は気にせず言った。

「じゃあ、樫山くんは今日まで運命を感じたことがなかったのかな？」

「ええ、一度も」

「私の年齢になると、自分の人生を振り返る回数が一段と増し、あの時こうしていれば等と考える度に、運命の存在を強く感じるんだよ。しかし、若者は未来に希望を抱いているから、過去を振り返る暇がないんだな」

祐二は。運命と言う言葉が急に新鮮に聞こえ、興味が湧いてきた。「運命についての話を聞かせてください」

「自分が抗しきれない運命は別として、自分の二者択一により決まる運命がある。人間の一生の間には、無数の二者択一が行われ、その一つ一つを繋ぎあわせたものが、運命であり人生だと私は考えている。しかし、最初の選択を誤っても何度かのチャンスがあるが、段々と選択が難しくなる。だから、どんな小さな二者択一でも疎かにできないのだ」

「二者択一ですか」

「そうだが。だが、二つから一つを自由に選べるように思えるが、選ぶ本人にとって、それしか選べないようになっていくんだ」

第25話

祐二は今日の自分の行動を振り返ってみると、自分の意志により、物事のすべてを自由に選んだと思っていたが、岡本が言ったように、すべて、外力の作用を受けての選択だったことに気がついた。

「言われてみれば、すべて。二者択一の連続でした」

「そうだろう。今後、そんな場面に遭遇したら、良い選択をして、良い人生を選んでくれ」

祐二がうなずくと、

「若い青年が、年寄りの長話に付き合ってくれて有難う」

人も六十を過ぎると、挨拶や仕事以外で若者と話す機会がほとんど無いため、岡本はその満足感なのか、礼をいうと笑みを浮かべ目を閉じた。

祐二が、その顔を何気なく見つめていると、気付いた岡本が言った。

「松江駅到着には、まだ、だいぶ時間があるよ。君も一眠りしないか。退屈な旅も、眠ると、夢が見られて、楽しい旅になると」

「僕は、目が冴えて眠れませんし、もし、見たとしても追い掛けられる夢だけです」

「追い掛けられる夢とは、淋しいかぎりだね」

「岡本さんは、楽しい夢が見られるんですか？」

「勿論だ」

「どんな夢を見られるんですか？」

「年老いて、寝て見る夢は、恋の夢」と、照れ臭そうに言った。

「え！、恋の夢ですか」

意外な答えに驚いた祐二は、自分の父親も、岡本と同じように恋の夢を見るのかと思っただが、よく考えてみると、鼾をかくのが忙しくて、夢を見る筈がないと思った。

「不思議と言うのか、だから夢なのか、見る夢に出てくる全ての女

性は、今までに一度も見たことがないんだ、だが、なぜか、自分の恋人になっでいて、その恋人を町角や駅のプラットホームで見かけ、胸を切なくして駆け寄るのだが、急に姿が見えなくなるのだ。そして、探していると、恋人の住所を知ることができ、人に道順を教え、て頂くが、どうしても家に辿り着けないのだ。その切なさは、とても言葉では言い表せないほどなので目が覚めるんだよ。そして、この夢は何度も見た夢だと、夢の中で思うんだ。何処の誰とも知らない女性に恋をする、なんと素晴らしい夢だとは思われないかね」

恐いものに追い掛けられる夢や、松や柿の木に縛られ、大鉈で切られそうになり夢が覚める、等の夢を見ている祐二には、少し羨ましい夢に思えたので、

「いい夢ですね」と言つと、岡本は頷き、

「じゃあ、これから、その夢をみるよ」と、岡本は目を閉じた。

祐二は、その寝顔を見ながら、今回の短い旅で、母子、その母子を手助けした少年、そして、今、目の前で眠っている岡本を生涯、忘れないだろうと思つた。

岡本の顔から車外に目を転じると、何時の間にか高梁川が現れていた。

第26話

静かに流れる水流の中を魚が泳ぎ、岸边には、白鷺が白い彫刻のように微動もせず佇み、猛暑の暑さをかき消していた。

しかし、祐二の心眼に映っているのはお伽の国だった。

（女性に逢わせてください）と、高梁川に願う。

やがて、電車は高倉山の麓に到着し、二股に別れた高梁川よりの路線へ乗り入れ、トンネルに入った。

祐二は、女性の姿を少しでも長く見られるように、顔を左側の窓に寄せ、電車がトンネルから出るのを待っていた。

しばらくして、電車がトンネルを出た、祐二が間髪をいれずに高梁川の河原を見ると、女性はパラソルの横に立っていた。

（居た！）

祐二は心の中で感動の叫びを上げた。

今回も、車窓から何気なく見ていたら（パラソルの横に立つ女性の絵画を見ているような気がしただろう。だが、祐二が顔を窓にびったり寄せていたので、視野が広がり、女性のその後の行動が見えた。女性は、いきなりパラソルの柄に手を伸ばしたのだ。

（パラソルを抜かないで！）と、心で願った。

その願いも虚しく、女性はパラソルを抜いた、同時に女性の姿は後方に消えた。

祐二が腕時計を見ると、十二時二十分過ぎだった。

猛暑の真っ只中、女性がこれ以上、写生を続けられなくなり、帰り支度を始めたのと祐二は考えたのだ。

（遅かった）

喜びの後の失望、祐二は、切なさで胸が張り裂けそうになる。

（明後日があるさ）と、祐二は自らを慰め、河原へ行かないことにした。

電車は後、数分で備中高梁駅に到着する。この駅で降車する人た

ちは、慌ただしく荷物を纏めたり、気の早い人は、早々と降車口へ向かい始めた。

祐二は、その人たちを見ているうちに、急に降りたくなってきた。電車を降りるとなれば、岡本に挨拶をしなければならぬ。だが、岡本は楽しい夢を見ている真つ最中かもしれない。

祐二が声を掛けるべきか、迷っていると、岡本が目を開け、「降りるなら早く用意をしたほうがいいよ」と、優しく急がせてくれた。

「有難うございます」

祐二は礼を述べ、電車を降りた。

第27話 お伽の国

河原からパラソルを抜いた女性は、また、パラソルを立てようとしていた。

どうやら、吹いてきた強い風が、パラソルを大きく傾かせ、女性に熱い直射日光が当たり、写生ができなくなったので、パラソルを立て直しているのだ。

作業が終わると女性は、パラソルの中に入り、カワラナデシコの花の写生を始めた。

すると、また、川下の方から微風が吹き、川面にさざ波をお越した風が河原に上陸し、パラソルの中の女性の長い黒髪を靡かせ、河原に生息するカワラナデシコや名前も知らない草花たちを揺らせながら通って行く。

花は風に弱い、女性は風が通りすぎるまで写生を中止して、風の方を見つめる。そして、風が通りすぎると、優しい目で花を見つめては筆を繊細に動かす。

今日の河原は、倉敷駅方面で猛烈な雷雨が発生した影響かどうかは不明だが、度々強い風が通り過ぎて写生の邪魔をしたため、絵の完成が一時間以上も遅れているのだ。

この女性は、天見彩世、京都の宮都大学二年生。この猛暑の中、京都から高梁市東町の実家へ帰省し、この河原で写生するには悲しい訳があった。

駅とは、彩世は小学三年生の冬、突然、難病を患い、病院に入院した。

彩世の病状は重く、面会謝絶が二ヶ月も続いたが、早春になって病状が少し良くなり面会が許されるようになった。

同級生の百合は、彩世の身を案じて、毎日のように彩世を見舞いに来ていたが長くは居なかった。

なぜなら、百合の父親は、妻と三人の子を残し、一年前に急死し

ただ。そのため、妻は、三人の子供を育てるために、土木の仕事など、様々な仕事を朝から晩まで働いたが収入が少なく、何時も苦しい生活をしていた。

どんな苦勞も厭わずに働く母親の姿を見た百合は、贅沢心を捨て、幼い弟や妹の面倒を見ながら、陰で母親を助けていたのだ。

そんな訳で、彩世へのお見舞い品も、野山で摘んだ一本の花しか持つて来れなかった。

しかし、彩世には百合の優しさが伝わり、何時も感激していた。

夏が来ると、百合は高梁川で摘んできた一本のカワラナデシコの花を彩世に差出し

「この花の名は知らないけど、私の大好きな花なの、サヨにあげるわ」と言っつて、淡いピンク色した花を、荒れて黒くなった小さな手で花瓶に活けた。

その時、百合は高梁川から直接きたのか、高梁川の匂を病室に持ってきた。彩世はその匂いがとても好きだった。

彩世の心中を察した百合は、病気が治ったら、高梁川で一緒に泳がないかと誘った。

「私、川で泳いだことがないの。病気が治ったら、高梁川へ行つて、カワラナデシコの花を写生して、百合にあげるわね」

すると、百合が嬉しそうに。

第28話

「わたし絵が下手なの、指切りよ」と、彩世の指に指をからませてきた。

絵が下手なのは、絵を描く時間もお金もないからだ。

百合が四年生になると、

「河原で咲くカワラナデシコの花はね、一粒の土もない石と石の間で、一生懸命に花を咲かせているのよ。サヨも苦しいけど、この花に負けないように頑張ってるね」

と、急に大人びた励ましをする。だが、翌年の夏、百合は、この川で溺れそうになっている年下の子供を見附、助けようとして溺れ死んだのだ、その日が八月二日だった。

百合の死を知った彩世は、あまりの悲しさに生きる気力を失ったが、百合が活けてくれたカワラナデシコの花を見ているうちに、百合に心情を察して涙が流れた。

あれは彩世が入院してから最初の面会日、同級生や近所の友達がお人形や玩具を持ってお見舞いにきていた。

少し遅れて百合が一本のナズナの花を持ち見舞いにきた。百合は他の友だちのが持ってきたお見舞品と自分が持ってきたナズナの花を見比べ、急に悲しそうな顔を見ると、ナズナの花を自分の背中に隠し、みんなの後へ隠れた。

それを見た彩世は

「母さん、私の大好きなナズナの花の匂いがするわ、もし、誰かが持ってきてくれたのなら花瓶に活けてください」

と、言うと、母親は何気ない素振りをして、

「彩世は野に咲く花が一番好きだったわね、百合さん有難う」

と、言ってナズナを受け取って活けると、百合の目から涙が溢れた。

百合は、あの日から死ぬまで、花が枯れそうになると元気な花を

持ってきてくれた。

（どんな苦境にも負けない心優しいユリ。ユリの行動の全てに愛がこもっていたわ。も、し、私が死んだら、ユリはきつと悲しむわ。それだけではない、死ねばユリとの約束が果たせなくなる。そうだわ、一日も早く病気を治し、高梁川の河原でカワラナデシコの花の絵を上げなければ）

と、考える彩世だったが、病気の身ではどうにもならず、心を痛めていたが、翌年の春になってから病気が急に治り、毎日のように高梁川に来ていた。

憑かれたように高梁川へ行く彩世を見て両親は、このまま彩世を放置していたら、何時の日か、百合と同じ運命を辿るのではないかと危惧した。

そこで両親は、彩世を高梁川から引き離すことを考えた。その結果、彩世の心が落ち着くまで、京都市南区時絵町に住む、彩世の母親の両親に預けることにした。

その旨を話すと、孫の世話が出来る、大喜びして引き受けてくれ。

そこで、彩世は六年生の一学期から京都の小学校へ転校した。

京都に来た彩世は、両親や百合のことを思い出すと、胸が張り裂けるような淋しさに襲われるのだ。

第29話

そこで彩世は、祖父母の家から近い所にある桂川へ歩いて行き、河原や草花を見ては、心を癒していたのだ。

祖母も彩世の悲しみを取り除こうと考え、フィギュアスケートを習わせた。

幸いにも彩世は、フィギュアスケートに適していたのか、今では日本選手権試合に出場するほど上達し、その優美な姿をテレビで度々、放映されていた。

だが、試合がテレビで放映されると知ると、彩世は急に実力の半分も出せないのだ。

その訳は、自分が恋こする男がテレビを見ているかもしれないと思ひ、失敗は絶対に許されないとこの緊張感が身体を堅くするのだ。男との出会いは、二年前の早春、急に高梁川が恋しくなってきた。そこで、祖母の家からそう遠くない桂川へ行った。

桂川には、白や黄色の卯の花が咲き誇り、土手には雑草が緑の芽を出し、彩世の目や心を優しく癒してくれた。

故郷を心に描きながら散策する彩世の前に、突然のように現れた二人の男が、恐ろしい形相をして襲いかかってきた。

彩世が悲鳴を上げると、スーツを着たビジネスマン風の若い男が、どこからともなく現れ、悪者と戦いながら、恐怖心で地面にうずくまる彩世に、早く逃げると命じた。

彩世は、言われるままに、震える足を引きずり、その場から逃げ帰った。

しかし、いくら彩世が逃げても恐怖が後を追い掛けてくる。そして、助けてと叫べば悪者に自分の居場所が知れるのではないかと声も出せなかった。

やっと、家に辿り着いた彩世は、祖父母に助けを求めようとしたが不在だった。

日暮前になつて帰つてきた祖母に話すと、

「恐ろし、もし、その男性が現れなかつたら、今頃、彩世は殺されていたわ。あの場所は、若い女性が何人も殺されてるのよ。二度と行ってはいけません」

と、祖母は恐ろしそう言った。

聞いていた彩世も、今更ながら見が縮む思いがすると同時に、助けてくれた男のことが心配でならない。

(私を助けてくれた人は大丈夫かしら)

彩世が心配している所へ祖父が帰つてきたので、同じことを話すと、祖父が、

「危なかつたね。でも、あの二人なら、桂川の下流で、女性殺害犯として警察に逮捕されたよ」と言ったので彩世は安心したが、助けてくれた男が忘れられなくなった。

その日まで、彩世は病氣、百合の死、転校などが重なつたために、まだ、初恋の経験がない。その彩世に恋の火を灯したのが助けた男だった。

男に激しい恋心を抱いた彩世は、結婚するならこの男しかいないと思つていたので、その男のよく似た男性を見付けると後を追いつけ、顔を確かめていた。

第30話

また、男が、自分をみつけてくれるようにとの願いから、助けられた時の服装で居るように心がけていたが、いつも同じ服装でいることが困難であるため、髪型と藍色のヘヤーバンドだけは、男と出逢うまで変えないと決めていた。

しかし、二年間は長すぎたのか、男を恋い思う心も、今は遠い初恋の思い出になっていた。だが、今、彩世の願い通り、男は彩世の姿や髪型に惹かれ、こちらへ向かっていた。

下車した祐二は、改札口を出ると急いでコインロッカーを探した。小さな駅のこと、その在りかはすぐ目に入った。

一分一秒も無駄に出来ない祐二は、ロッカーに荷物を入れながらタクシーを探す、幸いにも、近くに停まっていたので飛び乗った。

「お客さん、行き先は？」

タクシーの運転手に問われ、

「行き先？」と言いかけたが、後が出てこない、それもその筈、場所は電車から見て知っていたが、初めての土地、地名や道順を知らないのだ。

「場所は電車から見て知っているんですが、地名も道順も知らないんです」

と、祐二が恥ずかしそうに言うと、運転手が

「じゃあ、駅のキップ売り場の横に、簡単な観光マップがあるから、それを見たら分かると思いますよ」と、のんびりした声で教えてくれた。

「ありがとう」

礼を言うと、祐二は駅内へ後戻りした。観光マップは、運転手が言っていたように、他に案内書と共に置かれていた。

タクシーに戻った祐二は、運転手に観光マップを見せ、

「ききょう緑地公園です」と、言うと運転手は頷き、車を発車した。

タクシーは駅を直進し、高梁川を渡ると、左折し、高梁川に沿って川下へ向かう。

「お客さん、どの辺りで下りられますか」

運転手は、スピードを落としながら尋ねた。

「あの虫かごを持った三人の子供が歩いている。前方で停めてください」

「じゃあ、一台の車が駐車している、道路の行き止まりですね」

「そうです」

運転手は、車の横に停めた。

河原に女性が居なければ、このタクシーで駅へ送ってもらおうと祐二は考えた。

「すみませんが、この場所で、僕の帰りえを約十分ほど待っていてください、もし時間内に戻ってこないときは帰ってください」

そう言って、運賃と待機時間を多め支払って車を降りた。

第31話

土手には、背丈の高い草木が生え、その間に、人が一人、通れるほどの道が川の下流に向かつて続き、少し歩くと、土手の草木が刈り込まれた場所があり、距離は遠いが、河原で写生する女性の姿が見えた。

（間に合った！）

祐二は天にも昇る気持ちになった。

刈り取られた場所を過ぎると、また背丈の高い草木が茂り女性の姿見えなくなった。

やがて、草木がまばらになり、女性の姿が真横に見え隠れし始めた。ここから少し川下へいけば河原に下りる小さな路があるのだが、気が急ぐ祐二は、夏草をかき分け、河原へ下りながら女性の顔を見た。

「なぜだ？」と、思わず呟いて立ち止まった。

女性の顔は昨夜から何度も祐二の脳裏に現れた同じ顔とヘアードだ。

何処で逢ったか思いだそうとしていると、後ろで人の気配がした。祐二が振り向くと、何時の間に来たのか、タクシーで追い越した、あの三人の子供たちが警戒感も露に、祐二と女性を見ていた。

祐二は彩世のことで頭が一杯だったため、すぐ後を子供たちが付いてきているのに気が付かなかったのだ。

その疑惑に満ちた少年たちの顔が今朝、祐二をストーカー呼ばわりした男児に見え、（しまった。子供たちは僕が彼女に近寄って行くと、今朝の子供のように、このおじさんはストーカーだよと、彼女に告げるだろう、いくら言い訳をしても、いや、言い訳も聞かず、女性は逃げ出すだろう）祐二がそう考えてのは、今朝の経験もあるが、昨今、ストーカーによる凶悪な殺人が多発しているため、人々がストーカーと言う言葉に非常に敏感になっているからだ。

最愛の女性にストーカーだと勘違いされるのは余りにも代償が大ききと思う祐二。

少年たちの警戒の眼で、女性の方へ駆け出した。それを見た祐二は、女性に逢うのを諦め、身を縮めるようにして、来た道を急ぎ足で引き返した。

少年たちは、彩世に駆けよると、祐二が立ち去った方を指差して言った。

「今、あそこからお姉さんを見ているお兄さんが居たよ。もしかしたら、ストーカーかもしれないよ」

彩世が恐ろしそうな表情をして、指差された方を見ると、ジーンズの男が背を丸くして草木の間から現れたが、すぐ、草木に隠された。

その姿を見た彩世は、

「あの人がストーカーなの？」

「ストーカーでないなら、覗いたりしないよ」と少年は決め付けた。

「それもそうね」と彩世は言ったが、すぐ

第32話

「あの人は．．．．．」と呟くと、男の後を追い掛けた。

彩世が男の姿を見たとき、男はタクシーに乗るところだった。

「こんな何も無い所へ、あの人が来るはずがないわ」

と、呟いた彩世は、車で追いかけるのはやめ、河原へ戻り始めた。スーツ姿で闘う男と、背中を丸めたジーンズ姿とでは、誰が見ても同一人物には見えない。

だが、男に恋する彩世は本能的に知るが、理性が目を曇らしたのだ。

そして、彩世は肝心なことを忘れていた。何も無い所に、自分が居たことを。

祐二の決断、彩世の思い違いによつて、この二人の運命を大きく変える一人の若い男が川下から、川を渡って彩世がいる河原へ向かっていた。

何も知らない彩世は、完成した絵を見ていたが、川下で水音がしたので振り返った。

「やあ！」と、男が気やすく声を掛けてきた。

彩世は、どう答えて良いのか迷っていると、男は何の躊躇もなく近付いてくる。

やがて、男の顔と服装がはっきり見えてきた。男は背中に荷物を背負っているが、身に付けているものは、海水パンツ一つだった。

彩世にしてみれば、海水浴場やプールで、海水パンツ一つの男性を見ても、恥ずかしいと思うことはなかったが、自分以外に誰も居ない河原で、若い男のパンツ姿を見るのが初めての上、男の爽やかな顔を見て、消え入りたい程の恥ずかしさに襲われた。

恥ずかしい、それは男に恋心を抱いた証拠、彩世は男の姿が眩しく映り、頭の中が真っ白になっていた。

そんな時、男は東京の大学四年の真竹慎吾と名乗った。

しかし、恥ずかしさで、頭が空白だった彩世には、慎吾の言葉が聞こえていなかった。

彩世の恥ずかしげな様子に気付いた慎吾は、自分が海水パンツ一つの姿だったことに気付き、顔を赤らめると、急いで、背負ったバックから短パンとＴシャツを取り出して着た。

慎吾は、彩世を気遣いながら話始めた。

「僕は高梁川を研究しているものです。そのための調査をしていたんですが、あなたが写生しているのに気付かず、邪魔をしてしまいました。謝ります」

少し落ち着きを取り戻した彩世は、慎吾の言葉が聞こえるようになった。

「いえ、邪魔だなんて思っていないです」

慎吾は、一度、名乗ったので、また、氏名を名乗るのは変だと考えたのか。

「僕の名はシンゴ、あなたは？」と遠慮ぎみに言った。

「彩世です」

答えてから、彩世はなんともいえない幸せ感に包まれた。

「何を写生しているのですか」

第33話

「カワラナデシコの花です」と、河原に生えた花を指さした。

「これは、僕の大好きな花、別名、大和ナデシコですね」

「ええ」

高梁川の研究しているだけに、慎吾は、この花のことはよく知っていた。

また、百合が大好きな花を、慎吾に好きだと言われ、一層、慎吾が好きになる。

絵をしげしげと見ていた慎吾が驚きを交えて言う。

「絵は完成しているんですね。実物より美しい」

長い間、画き続けた花、下手である訳がない。だが、彩世に上手下手は分からない。

何故なら、絵を見せたのは慎吾が初めてなのだ。その為、お世辞だと受け取ったが、それでも嬉しかった。

「有難うございます」

という彩世を見て、慎吾は、その美しさに恋心を抱かずにはいられなかった。

彩世は慎吾に見られているが恥ずかしくなったのか、出来上がった絵を持つと、川の流れが緩やかな所へ行き、写生した絵を清らかに澄み切った水中へ沈めた。

彩世は絵に向かって話し掛ける。

「ユリ、この絵、気に入ってくれた」

慎吾は思わず何をするんですかと言いたくなくなったが、彩世の姿があまりにも厳肅であり悲しみが見えたので、何を言わず、静かに見守っていた。

沈められた絵は、彩世と慎吾が起こした波により揺れ、様々な形に変化した。波が消えて行くに従い、絵は水中で美しく咲いた。

しばらくの間、彩世は同じ姿勢でいたが、やがて、絵を水中から

引き上げると河原に上がり、濡れた絵を乾かすのか絵を小石の上に置いた。同時に、彩世の顔から、あの厳肅さと悲しみが消え、何時もの彩世に戻った。

それを見た慎吾は、彩世に尋ねる。

「美しく描けた絵を何故、濡らして皺だらけの絵にするんですか？惜しいじゃあないですか」

彩世は、百合との約束を話した。

慎吾は、彩世の優しさに触れ、一層、彩世が好きになった。

太陽熱で熱せられた河原の石が、慎吾の裸足を焼くのか、盛んに足を動かしていたが、とうとう我慢できなくなったようだ。

「足の裏が暑くて堪らないです。彩世さんも泳ぎませんか」

誘われて彩世は嬉しかった。しかし、なぜか即答出来ないでいた。その様子を見ていた慎吾は、断られたと思い一人で泳ぎ始めた。

第34話

彩世が写生に来る時は、必ず、水着を下に着いていた。それは泳ぐ為ではない。自分が病気だったとはいえ、百合を助けられなかったことが悲しく、もし、誰かが溺れそうになったら助けようと用意しているのだ。

しかし、目的がどうあれ、華やかなビキニの水着は恥ずかしい。そこで、水泳選手たちが着用する水着を着ていた。

彩世と一緒に泳ぎたかたが、慎吾は初対面の男性、まして、恋心を抱き始めた彩世には、この女性は簡単に人に誘いに乗る軽薄な女性だと、軽蔑されるのではないか考え、すぐには応じられない。

また、市とはいえ、小さな町、誰が何をしているか手にとるように分かる。だが、慎吾とこのまま別れることが、どんな淋しい結果を招くかを経験上から知っていた彩世は、恥ずかしさをかなぐり捨てて泳ぐことにした。

二人は時の経つのも忘れ、川遊びをしていたが、慎吾が急に思い出したように言った。

「食事を忘れていた」

「私もよ」と彩世は言ったが、実は幸福感で腹は満腹だった。

「じゃあ、食事をしましょうか」言つと慎吾は彩世の手を取り、河原へ上がった。

「わたし、お弁当を持っていないの」

彩世の言葉が聞こえないのか、慎吾は黙って自分のバックを取りにいった。

「私、コンビニへ行って買ってくるわ」

と言つと、慎吾がバックを広げて、

「これを見てください」

バックの中には、弁当を二つあった。

「まあ、何時もそんなに召し上がるの」

「いえ、もしもの事を考えて、買っていたのが役立ちました」

言うと慎吾は弁当を一つ、彩世に渡した。

「有難う」

「いえ、祖末な弁当ですが、召し上がってください」と、慎吾が神妙な態度で言った。

それから二人は、パラソルの下で、楽しく食事をした。

「慎吾さん」

好きな男の名を初めて呼び、彩世の胸は喜びに震える。

「何ですか」と、さり気なく答えるが、慎吾の顔は喜びに溢れていた。

「もう、今日は調査しないんですが？」

「します」

「何処を？」

「どこまでとは、はっきり言えませんが、出来るだけ上流へです」

第35話

「じゃあ、私もお手伝いさせてください」

「本当ですか」と、慎吾は聞きなおさずにはいられない。

「はい」と彩世が答えると、慎吾が顔一杯に喜びを表し。

「お願いします」と頭を下げた。

「じゃあ、私の荷物を片付けます」

早速、二人は、写生道具一式を持ち、ききょう緑地公園横に駐車している彩世の車へ運び込んだ。

「慎吾さんの車は？」と、彩世が尋ねた。

「僕は車に乗ってきていないのです」

「なぜ？」

「川の調査は、車で素通りしては何も分かりません。自分の足で川の中を歩き、身体で体感することが大切だと思っています。車を利用すると、出発点に車を置くので、また、後戻りをしなくてはならない。それは、あまりにも効果的でないと思ったからです。今日は、美袋駅から川を上がって来ました」

「じゃあ、ここより上流は、車で御供しますわ」

「車なら調査が容易になります。有難う」

「源流や市町村の資料の調査をしなくてもいいの？」

「昨年までに、全ての資料を集め、源流から瀬戸内海まで歩いて調査しました」

「じゃあ終わっているのでは？」

「いえ、終わっていません。理由は、昨年の調査は、上流から下流に歩いて見た視点でした。今回は視線を変え、下流から上流へ向かって調査しているんです」

「あら、じゃあ、昨年もここを通ったのでしょうか」

「なぜ会えなかったんだらう、でも、会えてよかった」と、慎吾が顔を赤らめて言った。

「彩世さん、今日の調査が終わったら、一緒に食事してくれませんか」

彩世は喜んで受けた。

慎吾は一分一秒でも早く今日の調査を終わらせようと思ったのか、急いで調査道具を持ち川に駆け込み調査を始めた。

彩世は慎吾の後に続くこうとして、車に乗った。そのとき、ふと、タクシーに乗る男の姿がよぎったが、すぐ忘れた。如何に初恋の男でも、恋し合う実態がない片思いゆえに、新しい恋が芽生えたら、忘れてしまうのは当然のことである。

彩世は、幸せそうな顔をして、慎吾の歩調に合わせるように車を走らせた。

第36話 明と暗

八月四日。

「起きなさい」と、部屋の外から母親の元気な声が聞こえた。少し間を置き、目覚まし時計がけたたましい音を立てて鳴り響く。

祐二は、ベットから飛び起き、午前六時三十分に合わせていた目覚まし時計を止めた。

「母さんを信じなかったのね」

母親は、部屋へ入ってくるなり、不満げに言うと、窓を開け始めた。

真実を言い当てられた祐二は、母の気持ちを考えると、はい、そうですね、とさええず、「違うよ」と嘘をつく。

「嘘でしょう。態度で分かるわ」

「なぜ、僕を信じないの？」

逆に質問すると。

「私は絶対に子供を信じないようにしている」と平然と言った。

「母さんを信じろを言うけど、子供は信じないなんて、勝手な話だね」

「私は子供を信じると、子供に対する注意力が散漫になり、子供が悪に走ったり、苦境に立たされていても気付かなくなるからよ。でも、注意はしても援護はしないから、自分で解決するのよ。分かった」

「気疲れしない？」

「しないわ」

「そんなもんですかね」

「一昨日、祐二が帰ってくるまで、私との約束したことを守っているか、いないか心配で堪らなかったけど、祐二の無事な姿を見て安心したわ」

母が泣いてまで頼んだ約束を破った祐二は、穴が有れば入りたい

気分だった。

悄気返る祐二の目に、朝日が当たり、一瞬、目が暗む。

「よく眠れた？」

と、母親は、祐二が生まれた時から続けている、わが子の健康を確かめるために、顔や身体を丹念に観察する。

「今日も健康ね」と、安堵の表情する。

「飽きもせず、同じことを繰り返せるね」と祐二が呆れたように言った。

第37話

三日前の祐二なら、煩い、早く話しが終わらないものかと願っていた。しかし、今は、母の愛が痛いほど分かる。

祐二の心の動きを敏感に感じ取ったのか母親が、

「悲しそうな顔、どうしたの」と、尋ねる。

「いつも僕を見守ってくれて有難う」

「神妙な態度は祐二に似合わないし、私の不安が増すだけよ。何時もの祐二が私は一番好きよ」と言っただけで母親は部屋を出たが、初めて聞く祐二の優しい言葉に目を潤ませた。

祐二が帰り支度を終えた頃、母親が来て、

「もう帰るの？」と寂しそうに聞く。

祐二は、うん、と短く答え、背伸びをした。

「章治さんのお悔やみはすませたのね？」

「昨日、幼友達と一緒に行ったよ」

「どうだった？」

「それは悲しかったよ。皆、声を出して泣いていたよ」

「人の死は悲しい。特にまだまだ人生がある子供や若者の死はなお悲しいものよ。だから、私をかなしませないでね。祐二」

「分かったよ、母さん」

「じゃあ、食事の用事が出来ているから食べなさい」

頷いた祐二は、母親に導かれ、食卓に着いた。

「父さんは？」

「仕事よ」

「こんな早い時間なの？」

「早い？太陽はとづくに昇ったわ。人間も植物も、朝がとても大切なよ」

と、母親は言っただけで、

「見送りにせよに悪いが、元気で暮らせたらと言っていたわ」

と父親の代弁をした。

「そう、じゃあ、父さんに、元気でと、伝えてください」
「分かった」

食事中、二人は世間話をしていたが、母親が急に深刻な顔をして話始めた。

「昨日まで、この家には、保夫婦と孫たちが一緒に暮らしていて、それはとても賑やかで楽しかったわ」

「そういえば、父さんや母さんの顔から笑顔が絶えなかったね」

第38話

「ええ、でも、保が近所に家を建て、引っ越しをしてから、この家には私と父さんの二人だけ、だから、淋しくて仕方ないの。もし、祐二と一緒に住んでくれたら、どんなに嬉しいことかと、毎日、父さんと話しているのよ。どう、帰ってきてくれない？」

祐二は無下に断れずに沈黙した。

母親は、それ以上言わず、話を切り替えた。

「お昼ご飯を食べてから、家を出ても、明るい間に京都へ着くでしょう。祐二が帰ってきてから、あまり話が出来なかったわ。どう、父さんが帰ってくる正午まで居て、それから京都へ戻っていつでもいいんじゃない？」

「悪いけど駄目なんだ」

「どうして？」

「人と逢う約束があるんだ」

聞いた母親が、目に涙を溜めて、

「やっぱり、とうとうくるべきものが来たのね」

「やっぱりとか、来るべきものが来たとか、そして、なぜ泣くの？」

「祐二が、私の元から去る時が来たからよ」

「なぜ、僕が去るの？」

「好きな女性が出来たからよ」

祐二は、母親の勘の鋭さに驚いた。

「女性？居ないよ。なぜ、居ると思ったの？」

「保や妹の美保に恋人が出来たときののように、祐二がいままで見たことのないような楽しげな顔をしている、そして、時々、物思いに沈むでしょう。その上、長年の目標が壊れても、落ち込んだ様子がない。これは、好きな女性が出来た証拠よ」

いい当てられ、祐二は顔が真っ赤にした。

「人に逢うと言っているけど、逢う人は、好きな女性でしょう。母

さんは、祐二が帰って来たときから気付いていたんだからね」

だが、恋人でもないのに、居ますともいえない。

「誤解だよ。好きな女性なんか居ないよ」

「隠さなくてもいいのよ」

そこで、祐二が簡単な説明した。

「隠した訳ではないけど、確かに好意を抱いている女性は居る。でも、まだ逢って話をしたこともないんだよ」

「なんだ、片思いなの、可哀想に。そうだ、母さんが力になってあげようか」

母にとって、我が子といっても、家庭を持った保と美保は子を持つ親。どうしても、遠慮するという気持ちがある。だが祐二にはない。その我が子が自分の手から離れ、見ず知らずの女性の元へ去るのかと思うと、嬉しさの反面、悲しくて仕方なかった。

「恥ずかしいから、お父さんには」

と祐二は口の前に人差し指を立てる。

第39話

「分かっている、父さんに話すと、その女性の迷惑も考えずに、うちの祐二と結婚して下さいと会いに行くわ。だから、何も言わないわよ」

言うつと、母親は土産物を祐二のバックに詰め込み、終わると、「はい、用事が出来ました。送っていかずごめんね」「いいんだよ」

祐二は、荷物を受け取り母親の見送る中、バス停へ向かった。バス停は、家から歩いて五分ほど。

祐二は、故郷の町を記憶に止めるため、ゆつくりと町並みを見てあるいた。

停留所へ着いた祐二がバスの時刻表を見ると、幸運にもバスがきた。

バスには十人位の乗客がいた。子供の頃なら顔見知りの人が一人ぐらいはいたが、今は一人も居なかった。

故郷を出るとき、何時もの後ろ髪を引かれる思いがするのだが、今回は、早く出ていきたいと思い、美しい高梁川が目には浮かぶ。

松江駅に着いた祐二は、急いでプラットホームに駆け上がる。待つ間もなく、岡山行やくも号が入ってきた。

今日の祐二には、やくも号が、夢と希望に満ちた新しい人生へ誘う乗り物に見えた。

祐二は胸を踊らせ、電車に乗った。

やがて、やくも号は、午前十時前に備中高梁川に着いた。

駅は高梁市の中心部に位置し、四方を緑なす山に囲まれた美しい町である。

改札口を出た祐二は、二日前と同じように荷物をコインロッカーに入れ、タクシーに乗ろうとしたが、ふと、立ち止まって考える。

（先日、女性は子供たちから、ストーカー男の話を聞かされていた

ら、僕がその男と分らないように衣服を着替えていても、河原に見知らぬ男が居れば、用心して河原へ来なくなるだろう。どうすれば良いのだ)

思案していると、街角から真つ黒に日焼けした二人の小学生たちが釣り竿を担ぎ、大きな声で話ながら、高梁川の方へ向かって歩いて行く。

(そつだ、少年たちは高梁川で魚を釣るんだ。後に付いて行き、適当な時間まで、少年たちが魚釣りする様子えを見てから、河原へ行つても遅くなるだろう)

考えた祐二は、少年たちに声をかけた。

「君たち、魚釣りに行くのかな」

突然、知らない者から声を掛けられた少年たちは、一瞬、驚いたような表情をしたが、平静に答えた。

「そつだよ」

「高梁川へ？」

「うん」

二人が同時に答えた。

「そつ、邪魔でなかったら、魚釣りを見たいのだが」

「いいよ」と、言つて、少年たちは歩きだした。

「有難う」

礼を言い、祐二は少年たちの後を歩いていた。

しばらく行つてから、祐二が尋ねる。

「どう、魚はよく釣れる？」

少年たちは歩きながら、

「あまり釣れないよ」と、少し自信無げに答えた。

「どうして？」

「魚が少ないから」

琵琶湖では、ブルーギルやブラックバスが異常繁殖し、日本固有の魚たちが、今や、これら外来種の餌食になる家畜のような存在になり、もはや、以前のように、水だまりなどで、群れで遊び戯れる

ことも出来ず、一生怯え続けるのだ。

「もしかしたら、この川にもブラックバスが居て、魚を食べているのかな？」

「そうだよ」

「じゃあ、楽しい釣りができないね」

少年と話している間に、高梁川に着いた。

「どこで釣るの？」

少年が遙か上流を指差して言う。

「向こう」

「残念だなあ、君たちの釣りを見たかったけど、あんな遠い所まで行けないから、ここで別れるよ」

祐二が言うと、少年たちは、にこつと白い歯を見せ、

「もし、見たいと思ったら、来てもいいよ」

と、言って、上流へ歩いていった。

しかし、土地不案内な祐二に良い思案は浮かばない。そこで、橋の欄干に身体をもたれて川を見ていた。

(そうだ、川の中を歩いて行こう)

橋の袂には川へ下りる小さな道があった。祐二はその路を下り、水深を計ると、見た目より浅かったので、ズボンを腿まで捲り上げ、靴を脱ぎ、裸足で川に入った。

少年たちが言ったように、魚の姿を、見付けるのに苦労した。

やがて、河原が見えるところまで来たが、河原にはパラソルも、女性の姿も無い。

「逢いたかった」

祐二は力なく呟き、茫然とたたずんでいたが、ふと気付いた。

第40話

もし、女性が祐二をストーカーと思ったのなら、写生場所を他の河原へ変える筈だと。

上流の河原には女性が居なかったことを知っていたので、祐二は、川の中を歩いて川下に点在する河原へ行っただが、残念ながら居なかった。

元の河原へ戻った祐二は、河原から去りがたく、灼熱の陽光を浴びながら、正午過ぎまで、女性が現れるのを待っていたが、現れなかった。

祐二は、駅に戻りながら、例え、ストーカー呼ばわりされても逢いに行けば良かったと、心の底から後悔していた。

祐二が駅に着いてから、すぐ、乗る電車が到着したが、祐二は、どうしても、この町を去ることが出来ず、電車には乗れなかった。なぜなら、未練だが、せめて、もう一度、高梁川を見てから帰りたかったからだ。

早速、祐二は高梁川へ向かった。やがて、魚釣り少年たちと別れた高梁大橋へ着いた。

祐二は橋の欄干に身を寄せ、川を見、居ない女性の姿を捜していたが、未練心を断ち切るように、踵を返して駅へ向かった。

その途中、貸し自転車屋が祐二の目止まった。

（そうだ、高梁市の観光名所を自転車で巡れば、女性に逢える可能性がある）

早速、祐二は自転車を借りて、彩世搜しの観光に出掛けることにした。

まず、最初に目指したのは、高梁市歴史美術館。だが、何分にも住んだことがない町なので、すぐ、迷っていると、中学生らしき少女が故障したのか動かない自転車を、汗だくの顔で移動しようとしていた。

祐二は、自転車を修理してあげようと思い、

「故障しているの？」と尋ねた。

「はい」

「僕は子供の頃、故障した自転車をよく修理したんだ。僕が修理できるとも思えないので、一度見せてくれないか」

「直してくれるの、嬉しい」

と、言っ、少女は自転車から離れた。

「よし、久しぶりに腕を試すか」と、言っ、点検した。

「チェンが外れているから動かないんだ。すぐ、直すからね」

「直せるの、良かったわ」

普通の子供なら、チェンカバーが壊れた壊れた古い自転車には乗るのは嫌と言っ、だろう。

しかし、この少女は奇麗に手入れをして乗っ、ていた。

「終わったよ」

「早い、もう、直ったの？」

と、驚きながら少女は自転車に乗った。

第41話

「どう?」

「漕げる、快適よ」

「良かった」

と、言いながら、祐二は汚れた手をティッシュで拭いていると、少女が自転車を降り、自分のハンカチで祐二の手を拭こうとする。「たいした汚れでないから、いいよ」

と祐二が手を引っ込めると、少女が無理矢理手を取って拭き、

「はい、綺麗になったでしょう」

と言つて、祐二の手を取り祐二に見せた。

「本当だ、有難う」

と、言つて、自転車に乗り。

「じゃあ、気お付けて帰りなさい」

と手を振ろうとした。

すると、少女は、祐二が自転車の前籠に入れていた観光マップを

見付け、

「自転車で観光しているの?」と尋ねた。

「そうだよ」

「この町は初めてなの?」

「そうだよ」

「じゃあ、道に迷うでしょう?」

「少しね」

「じゃあ、私が案内して上げる」

と少女は自転車に乗った。

「有難う、でも、見知らぬ男の観光案内などしたら駄目だよ」

「どうして?」

「危険だから」

「お兄さんは危険な人ではないわ」と、笑顔で言った。

「君……」

祐二が少女をどう呼ぶべきか考えていると、

「すみれ、私の名前は高梁すみれ」と名乗った。

「僕は樫山祐二、よろしき。所で、すみれさん、少しの親切や見た目だけの判断で信用していたら、拉致され殺されるよ」

「じゃあ、お兄さんは、私を自転車で誘拐するの。そんなこと絶対に出来ないわ。だって、案内する場所は、何時も人が居るのよ」

第42話

祐二が尚も断る理由を考えていると、

「私、自転車を直して頂いたのに、何の恩返しも出来ないよ、何時までも、後悔する心が残るから案内させて、お願い。私、案内は初めてではないのよ。以前にね、中年のご夫婦が道を尋ねたから、案内してあげると、とても喜んでくれたわ」

祐二は、少女の優しい心根に負けた。

「じゃあ、頼むよ」

「任してください」

と、言っつて、少女はお姉さん気取りで、自転車を走らせた。

最初に訪れたのは高梁市歴史美術館、次に薬師寺、松連寺を巡り、城見通りに出た。

城見通りから花水木通りに進めば、彩世の家がある。だが、二人は城見通りを直進し、郷土資料館や武家屋敷等を巡り、最後に備中松山城を観光した。

松山城を出ながら祐二が言った。

「今日はすみれさんのお陰で、楽しい観光が出来た。有難う」

「あら、もう、観光は終わりなの？」

と少女は寂しそうに言った。

「もつと、観光巡りをしたいけど、時間が無いんだ」

「残念だわ。だって、まだ観光名所は沢山あるのよ」

「僕も残念に思っけど仕方ない。でも、もう一度、来たいと思っつている」

「本当、その時は私が案内して上げるわ」

祐二が帰り始めると、すみれは、祐二が道に迷わないか心配し、駅まで付いてきた。

観光中、すみれは、沈んだ祐二の顔を見て、祐二の心を明るくするために、色々試みていた。その様があまりにも愛らしいので、

祐二は、泣きたいほどの失望感が癒され、今度きた時は、また、すみれに観光案内をしてもらいたいと思った。

そして、運が良ければ、彩世に出逢い、彩世と観光が出来るかもという夢が持てた。

すみれの見送りに別れの辛さを感じていると、やくも号が入って来た。

祐二が自由席車両に乗り、席を探していると、岡本が居たので驚いて挨拶した。

「先日はお世話になりました」

岡本は、祐二が島根へ帰省せずに、高梁市で二日間過ごしたと勘違いして尋ねた。

「町の感想は？」

「夢の国でした」

「成程。私は方々へ旅しているが、この市が一番好きだ。好きな理由と聞かれれば、景色と高梁市という名前かな。この二つが、僕の心を捕らえて離さないんだよ。君には、夢の国に見えたんだね。そう言われてみると、そうとも思えるね」

と、感心したように言った。

「はい」

第43話

と言って、岡本の顔をよく見ると、顔が泣いているように見えた。そこで、不躰だとは思ったが尋ねた。

「どうかしましたか？」

岡本は自分の顔が涙で汚れていると気付いたのか、恥ずかしそうな顔をすると急いでハンカチで顔を拭く。

そして、岡本は黙って、手に持っている今日付けの新聞を広げて、祐二に見せた。

紙面には少女の写真が載っていた。その写真を見た祐二の顔から、血の気がひき、顔が真っ青になると、手がぶるぶると震え出した。

祐二の脳裏に、あの日が蘇る。

幸せそうな母子が居た。大きな荷物を背負った美しい母親がいた。その母親によく似た可愛い少女がいた。その少女が拉致され、殺されたのだ。

祐二は堪らないほどの悲しみに打ち拉がれた。祐二の目から涙が溢れ出る。その涙を拭きもせず、呻くように言った。

「あの子は、もう、この世には居ない……。あの子の命を奪った犯人が憎い。時を戻せるなら、僕は自分の命を捨てても、あの子を守ってあげる。だが、もう遅い……。」

岡本は、祐二の悲しむ様子を静かに見守っている。

「僕は今日まで、動物が殺されると悲しみの涙を流し、助け出された写真等を見ると、感動の涙を流した。そして、その事を後々まで覚えていたが、人が殺されたと見聞きしても少しの間は可哀想だと思っただが、一粒の涙を流したことがない。そればかりか、心の隅では、またかと思い、すぐ忘れていた。こんな僕が、今、涙を流し、悲しみに打震える資格があるのか。今までの僕が恥ずかしい。」

今日まで、祐二の身近において、幸いにも非道な殺人事件が無かったために、残された者の、悲しみ、怒り、そして、無念が分から

なかったが、我が妹と思いたいほどの愛らしい少女が殺され、真の悲しみや怒りが込み上げてきたのだ。

「そんなに自分だけを責めるな」

と岡本が言った、祐二がその顔を見ると、

「言い訳になるが、毎日、何件もの殺人事件が発生し、多い日には数十人もの人が殺されているのだ。そのため、何時の間にか私も殺人事件に慣れ、麻痺し、怒りの心を失い、不意ながら、仕方ないと、現状を追認してしまう。その結果、被害者に哀悼の念を抱くことすら忘れ、今日の事件は、明日の事件により忘れ、三日前の事件でも、思いだせなくなる始末だ。我ながら情けないよ」と自嘲気味に言った。

「人々が事件を簡単に忘れると、被害者や遺族の気持ちは救われないでしょうね」

「君と同じ気持ち日本人ならみんな持っている。そして、このままではいけないと考えているが、事件が多すぎて何も出来ないのだ」否定出来ないでいる祐二の脳裏に、ある光景が写る。

アフリカの草原で、ヌーやガゼルの群れがライオンや豹に襲われ、一頭が犠牲になる。

第44話

と、ヌーヤガゼルは、近くで仲間が食べられていても、平気で何事もなかったように草を食べている。

ヌーヤガゼルには、哀れにも抵抗する武器が何も無いから仕方ないが、人間には、知恵と愛があり、他人の悲しみや苦しみを知っている。その上、法律と武器があるのだ。

だが、人間は人が殺されても、ヌーとガゼルと同様に、見たり聞いたりしたときだけ、被害者のことを考えるが、明日になれば被害者のことを忘れ、何事もなかったように美味しい物を食べている。

人間は、ヌーヤガゼルではない。人間が人間を助けなくて誰が助けるというのか。

祐二は少女に、（俺は絶対にヌーヤガゼルにならない。そして、君の悲しみが消えるまで忘れないよ）と誓ったものの、今日までの自分は、世情に関心を抱けば目的が果たせなくなると考えて、目的以外の事には、絶対には耳目を貸さないように塞いでいた。この行為そのものが、ヌーヤガゼルと同様の行為と気付き愕然とした。

「悲しいことばかり、もう、何も見たくても聞きたくない」と、祐二が言うと、岡本が

「あの少女が可哀想でならない。この悪夢から覚めるために、私は眠る」

言つと、岡本は新聞を丁寧に折畳み、バックのなかに入れて目を閉じた。

祐二、車窓を流れる高梁川に向かって、近日中に来ます、と挨拶して、目を閉じた。

祐二と少女が出会った頃、慎吾の調査も三日目となり、調査の最終地点である新見市へ来ていた。

やがて、調査が終わったのか、慎吾が車の中で待機する彩世に手を振りながら、

「終わりました！」と、大きな声で言った。

彩世は車から飛び出し、慎吾に答えるよう手を振りながら河原へ向かって走った。

慎吾の前に彩世が立つと。

「やっと、高梁川の調査が全て終わりました。これも、彩世さんのお陰です。有難うございました」

「それはお目出度うございます。でも、他の川の調査は行なわないのですか？」

「いえ、折りがあれば、伯備線沿いに流れて日本海へ注ぐ日野川も調査したいと思っています」

「じゃあ、その時もお手伝いさせてくださいね」

「手伝ってくれるんですか、喜んで願います」

「よかった。ところで、お腹、空いてないですか？」

「お腹ぺこぺこ、こんなに空腹でした」

第45話

と言つて、慎吾はお腹を叩いて見せる。

彩世は、急いで車に駆け戻り、お弁当を持つと河原へ走った。

その様子を慎吾が嬉しそうに見ていた。

慎吾の前で、彩世は河原にシートを広げ、籐で編まれた籠から弁当を取り出した時、慎吾が急に姿勢を正して「彩世さん」と呼んだ。彩世は何事かと立ち上がり、慎吾の顔を見つめた。

「僕と結婚してください」

昨日から彩世は、慎吾からの愛の言葉を待っていた。しかし、何も言ってくれないので、悲しい思いをしていた。しかし、言われた言葉は、それ以上の嬉しい言葉だったので、彩世は、何と答えたら良いか分からず、黙っていた。

「嫌ですか？」と心配そうに尋ねる。

彩世は、強く首を振った。

「では、承知してくれるんですね」

「ええ、よろこんでお受けします」

やっと、彩世はこたえることができた。

「有難う。僕は来年大学を卒業します。そして、大阪のマスコミ関係に会社に就職することが決まっています。もし、彩世さんに異存が無かったら、出来るだけ早く結婚式を挙げたいと思います。どうかお返事をください」

「はい、お任せします」

彩世の言葉は簡単だが、声は喜びに震えていた。

「じゃあ、僕は実家へ帰り、このことを両親に報告し、三日後には彩世さんのご両親に会いに行きます」

「お待ちしております」

「僕はなんて幸せな人間なんだ」

「私もよ」

互に見つめ合う。

「そうだ、彩世さんをお願いしたいことがあるんですが」
「何でしょう?」

「僕は一度、彩世さんが河原で写生する姿を電車の窓から見たいと思っ
ています。出来るなら、彩世さんのご両親に会いに来る日、あ
の河原で写生していてくれませんか」

「三日後ね?」

「彩世が確かめると慎吾が確約するように、
そうです」

第46話

「いいわ、でも、電車に乗って来られる時刻は？」

「いつも、彩世さんが写生している時刻がいいと思います」

「分かりました。もし遅刻しても待つていますから必ず来てね」

「彩世さんを悲しませるようなことを僕は絶対にしません」

「嬉しい」

「そうだ、洪水や雨の日は駅で待つていてください」

「はい」と、言ってから彩世が尋ねる。

「今日の予定は？」

「僕は、まだ、井倉の鍾乳洞を一度も見物したことが有りません。

彩世は行つたこ

とがありますか？」

「あります。高梁市にもあるんですよ、今度、来られた時に案内しますわ」

「楽しみにしています」と、言つて慎吾はシートに座り

「じゃあ、彩世さん手作りのお弁当を頂きます」

「どうぞ」

と、慎吾は彩世が作つてきた弁当を美味しそうに食べはじめた。

河原で遅い食事を終えた二人は、車で井倉の鍾乳洞に向かった。

鍾乳洞に着いた彩世と慎吾は中へ入った。焼き付くような炎天下の下にいた二人にとって、鍾乳洞は寒さを感じるほどの涼しさだった。やがて、慎吾が帰る時間が来た。

彩世が慎吾を新見駅へ送り届けると、すぐ、やくも号が到着した。

「じゃあ、三日後、必ず、河原に居てくださいよ」

慎吾が乗つた電車が備中高梁駅に着くと、偶然にも、おなじ車両に祐二が乗つて来た。

だが二人は他人を見るほど心に余裕が無いため、互いの姿を見ることは無かった。

慎吾を見送った彩世は、結婚の申し込みを受けた、その興奮さめやらぬままに、実家へ戻ってきた。

「ただ今」

明るい声で彩世は家へ入る。

「遅かったわね」

隣の部屋から出てきた母親が不機嫌な声で言った。

「まだ、お日さまは西の空に輝いているわ」

そういつて彩世は自室に入るなり、私、結婚するのよと、嬉しさを抑えて呟いた。

しばらく経った時、母親が深刻な面持ちで、彩世の部屋に入ってきて尋ねた。

「ここ二、三日、何だか楽しそうな顔をしているけど、何か好いことがあったの？」

聞かれた彩世は嬉しさを隠そうとしたが、自然と顔が弛んでしまふ。

「何も無いわ」

第47話

否定したが、母親は分かっているのよと言う。

「あなたは、男の人と高梁川の調査をしているらしいわね。その男性とは、どんな関係なの？」と、尋ねた。

「どんな関係？そんなことを誰から聞いたの？」

「お得意さんからよ」

彩世隠すのを諦めた。

「じゃあ隠しても駄目ね」

「やっぱり何かあるのね」

「本当は隠すつもりはないの。今晚、家族がみんな揃った時に話そうと思っていたんだけど、いま母さんに話すわ」

母親は、一層不安な顔で彩世の顔を見ていた。

「私、好きな人が出来たの」

彩世は恥ずかしそうに顔を赤らめて言った。

「そうだと思っただわ。で、今後どうするの？」

「男性の名は慎吾さん、三日後、父さんや母さんに会いに来るわ」

「交際したいと？」

「いえ、結婚の申し込みよ」

母親は、目が飛び出したかと思うほど、大きく目を開けて彩世を見て言う。

「えー、結婚の申し込みだって、それは駄目よ。だって、彩世はまだ学生よ。慎吾さんとか言っただわね。その人の年は？」

「来年、大学を卒業し、大阪の会社に就職すると言っていたわ」

「駄目、駄目、結婚は駄目よ。母さんは絶対に反対。父さんも許しはしないわ」

母親はとんでもないと大声で反対をした。

拙いと思った彩世は、母親を慰めるように、

「結婚は、私が大学を卒業してからでもいいと言っていたわ」

「それなら話は分かるんだと、父さんがなんて言っか？」
と、言っている所へ父親が帰ってきた。

「父さん」

母親の呼び掛けを無視して、父親が自室に入ろうとした。

「父さん、大切な話があるの、しばらく、ここに居て」

父親は、母親の要請に渋々応じた。

「なんの話だ？」

彩世に代わって、母親が話した。

「ふーん、そうか、彩世も、もうそんな年になっていたか」
聞いた父親は淋しげに、彩世から目を逸らした。

第48話

「ふーんとか、そうか等といわず真剣に考えてくださいよ」

「考えているよ。本当は反対したい。しかし、彩世の幸せそうな顔を見てみると、許さない訳にはいかないよ」

「有難う父さん」

言って彩世は、目に涙を溜めて、父親に抱きついた。すると、父親は彩世を優しく抱いて言う。

「こうして、お前を抱いてやったのは何年、いや、十何年ぶりかなあ。あの小さな子供が、早、こんなに大きくなって」

父親は、彩世を抱き、遠い過去に思いを馳せていたが、彩世の肩をしっかりと掴み、優しい声で言う。

「幸せになるんだよ」

彩世は、父親の優しさに胸が詰まり、声を上げて泣いた。

父親と彩世の成り行きを見ていた母親が、二人の気分を壊すように。

「父さん、簡単に許したは駄目。彩世には天見酒造を継ぐ使命があるのよ。彩世の結婚相手は、この家を継いでくる人でないと駄目よ」
父親も思いは同じだった。

「彩世、その人の名は、そして、家業を継いでくれるのか？」

「慎吾さんです」

現実的な問題を投げかけられ、彩世の顔に苦悩が現れた。彩世は両親も家業も愛している。しかし、慎吾に家業を継げない人との結婚ができない人との結婚は出来ないなどと、死んでも言えない。

苦しんでいるのを見兼ねた父親が言った。

「家業を継ぐか継がないかは、慎吾くんに会ってから決めれば良い。もし、慎吾くんが嫌だと言うなら、その時はその時考えよう」

「長年続いた家業を他人に譲るのは嫌よ」と、母親が不満らしい口調で言った。

「所で、慎吾くんの名字は何というんだ。それから大学名は？」

父親は母親の言葉が聞こえない振りして尋ねた。

彩世が恥ずかしそうに答える。

「名乗っていたけど、私が聞き漏らしてしまったの」

頷いた父親が言った。

「慎吾くんに一目惚れして、何を言っているかが分からなくなつたんだろう。白状するが、私も母さんと初めて出会った時は、何を話、何を聞いたのかも覚えていないほど母さんに一目惚れしていたから、彩世の気持ちが分かるよ」

母親は父親の話を嬉しそうに聞いていたが、話がおわると、嬉しさを隠し、皮肉っぽく言う。

「嘘でしょう。ずいぶん横柄で自信たっぷりだったわ」

第49話

「あれは見せかけだったんだ」

言った後、話がそれたことに気付いた父親が。

「慎吾さんの電話番号は知っているんだろ。すぐ、電話を掛けて尋ねなさい」

「今は出来ないわ」

母親が何故と聞くと、彩世が困った顔をして言った。

「聞きたいけど忘れましたなどと、恥ずかしくて言えないわ」

「なるほどなあ、でも、知らないではすまされないだろう。知っているのと不便なことが起こるよ」

「それは大丈夫よ。互いの携帯番号は知っているし、顔写真も携帯電話の中にあるわ。これが慎吾さんの顔よ」

彩世が携帯電話を両親の前に差し出し、慎吾の写真を見せた。

「おおー、素敵な青年ではないか」

母親は、父親の感想に付け足すように言う。

「本当ね。彩世が好きになるのも無理がないわね」

両親の反応から、慎吾との結婚を許されたと判断した彩世だが、もう一度確かめたくなった。

「じゃあ、慎吾さんを家に招いてもいいのね。そして、結婚も」

「ああ、私からお願いしようと思っている。それだけでいいだろう母さん？」

母親は、しかたなく、承諾した。

「父さん、母さん有難う」

言って、彩世はまた涙くんでいた。その彩世を見て父親が注意するよつに言う。

「彩世、もう一度言うが、慎吾さんの住所、名前、大学名を知っておく必要がある。出来るだけ早く尋ねなさい」

「そうね、明日にも聞いてみるわ」

「それがいい」

両親から、慎吾との結婚が認められ、彩世は心の中で喝采していた。

（私はなんて幸せなんでしょう）

と、彩世は、幸せに酔っていた。

わが娘の幸せそうな顔を見ていた父親は、何に気付いたのか、顔を曇らせ、彩世に尋ねた。

「本当に幸せか？」

「幸せよ」と、彩世が笑顔で答えた。

「それならいいんだ」

母親は父親の真意が分からず尋ねた。

第50話

「幸せかとか、それならいいんだとか変なことをいうけど、意味が分からないわ、分かるように説明してください」

「彩世には目出度い日、だから言うのは明日にするよ」

と、父親は何でもないとというような顔をした。

「明日まで待てないわ、今、言ってください」と、母親が追求した。

「彩世も聞きたいか？」

「はい、聞きたいわ」

「じゃあ、話すが、私は彩世の急な結婚話に驚いて、何も考えられずにいたが、彩世が結婚したいと思っていた青年のこと、そう、彩世を助けてくれた青年のことを今思い出したんだ。私も、彩世の結婚相手はその青年が一番望ましいと思っていたので、彩世がその青年を見付けだすのを密かに願っていたのだ。あれほど恋い慕っていた青年を忘れられるのか、それが心配なんだ」と、父親が尋ねた。

彩世の顔が一瞬、曇った、

「大丈夫よ」と、笑顔を作った。

わざとらしい笑顔を見た母親が、

「私も彩世を助けてくれた青年が好きだった。もし、考え直すのなら今のうちよ」

この三日間、彩世は完全に祐二のことを忘れていた。だが、その人のことを両親に思い出させ、一瞬、胸が詰まる思いがした。

しかし、慎吾との楽しい三日間を思い出すと、祐二の姿も陽炎のように消えて行く。

「あの人にお礼は言いたい。でも、もう終わったの」

「そうか、心の整理がついたか、それなら、何の心配もない。だが、助けてくれた人の恩は絶対に忘れるなよ」

「分かっているわ。だから慎吾さんと結婚しても、あの人の恩を忘れないように、私は、この髪型、そしてヘアバンドを逢えるまで

変えないわ」

「それは良い考えだわ。いつか、きっと、逢えるわよ」と母親が断言するように言った。

「でも、逢った時のことを考えると少し不安になるわ」
すると、父親が

「もし、不安なら、今夜、もう一度、婚約の件、助けてくれた人の件をよく考えれば良い。まだ、今ならやり直せる」

と、父親は祐二に末練があるのか、また言った。

「そうよ、よく考えるのよ」

と、母親も、我が子が失敗しないように注意した。

しかし、今の彩世には、考え直すことなどありえないことだった。

第51話

高梁川に、また近日中に来ますと言って、京都へ戻った祐二だが、会社に勤務する身では、休める日が土日しかない。

その土日が降雨の周期に入ったため、八月下旬を過ぎても行けなかった。そして、最後の土日も雨の予想だった。

金曜日の朝、父親からの電話があった。

「元気にしているか」

「お見合いならお断り」

祐二が電話を切ろうとすると、それを察した父親が慌てて言う。

「違うから、話を聞け」

「嘘を言ったから切るからね」

「分かった」

「じゃあ、話を聞く」

「おい、祐二、なんか変だぞ。もしかしたら好きな女性がいるのか？」

父親が期待を込めて尋ねた。

「居ないよ」

「情けないな。だから、早く結婚さそうと思って俺は必死に相手を探している。話が逸れてしまったが、実は、十月に国会議員の選挙がある。保がその選挙に立候補すると決めたんだ。そこで、明日、家族会議を開きたいから、今夜、帰ってこれるか」

「それが本当なら、ぜひ帰るよ」

「じゃあ、待っているからな」

父親は電話を切った。

祐二の実家は、兄が生まれるまで、春日町で農業を営んでいたが、周りが段々と宅地開発されたせいで、農地が農業に適さなくなつたため、幾らかの農地を売却し、園芸業を始め、今では、四季折々の花をポット栽培し、島根は無論、日本全国に出荷していた。

兄は、家業に力を入れる傍ら、島根県が自立出来る都市になるにはどうすれば良いか考えていた。そして出した結論は、人口が多いほど経済の循環が良くなり発展するだった。

循環に必要な人口を算出すると、最低、五百万人が必要になる。その人口を確保するためには、まず、若者が県内に留まれるような政策が必要である。そこで兄は、大企業を誘致し、京都駅から山陰へ新幹線を通そうと考えているのだ。

兄の考えを聞いたとき、ホラ吹きと思っただが、よく考えてみると、県内の失業と、若者が都会へ流出する現状を阻止できる唯一の方法は、山陰に大都市を創るしかないことぐらいは、祐二にも理解できたし、祐二が立てた目標もそこにあったのだ。

勤務を終えた祐二は、激しい雨の中、新幹線で京都を出たが、彩世の河原に着いた頃には小雨になり、河原は夕暮れの雨で、薄暗くなっていた。

第52話 哀しみの出逢い

(今は誰もいないけど、お伽の国は確かにあった)

彩世に逢えずに帰ったあの日のことを思い出すと、祐二の胸が切なく震える。

(雨が止んだら、必ず、あなたに、逢いに行きます)

と心の中で、祐二は彩世に言った。

だが、彩世が河原で写生する日は、八月二日だけで、よほどの事情が無い限り、祐二は彩世には逢えないのだ。

そんな事情があるとは知らない祐二は、希望的観測から、夏休み期間中は、彩世が河原へ来ると思っていた。

祐二は、雨が止むよう祈りながら、故郷へ帰っていった。

翌日、島根県の天候は、人々の日常生活に影響がない曇り時々小雨だった。

祐二は兄の件で多忙だったが、天候予報だけは見ていた。しかし、明日も雨の予報だった。祐二は、もう彩世に逢えないと思うと、悲しくて胸が締め付けられた。

日曜日の朝。祐二は、窓から入る朝日の眩しさで目が覚めた。

「晴れた！」

祐二は喜びの声を上げて、飛び起きると、

「母さん、大切な用があるのを忘れていたから、すぐ、帰るよ」

その慌ただしさに、母親は、訳を聞くのを忘れ、帰り支度を手伝った。

祐二が、荷物を持ち、バス停へ走ると、すぐバスが来た。

そのバスに乗り松江駅前で降り、駅のプラットフォームに駆け上げると、すぐ、やくも号が到着し乗車した。

(バスも電車も、待ち時間がなく乗れた。もしかしたら、あの女性に逢えるかも)

逢った時のことを考えている間に、やくも号は、高梁駅に到着し

ていた。

電車を降りた祐二は、荷物をコインロッカーに入れると、高梁大橋に向かって走り、着くと、前回と同じように、高梁川に入り、川下に向かって歩いて行った。

やがて、祐二は、彩世の姿を見る場所まで来たが、居なかつたらと思うと、直視できずに目を閉じ、心を落ち着けてから、恐々目をあけて見ると、見覚えがあるパラソルが立ち、その下に彩世の姿があった。

「有り難う！愛する高梁川！」

思わず礼を言っていた。

だが彩世の顔は悲しみて沈んでいた。

彩世を悲しくさせた原因は、新見駅で慎吾を見送った翌日から、慎吾との連絡がつかないばかりか、両親に結婚を申し込む日が来ても、慎吾が現れなかつたのだ。

彩世は慎吾の言葉を信じ、京都へ戻ることを一週間延ばした。それでも慎吾が現れないので、一度は京都へ戻り、フィギュアスケートの練習を始めた。

しかし、悲しくて、どうしても練習に打ち込めず、実家に戻り、今日まで、写生をしながら慎吾が現れるのを待っていた。

彩世に、そんな不幸があったとは露とも知らない祐二は、逢える喜びに震えながら、自分の心に、冷静にと言いつ聞かせた。

（人の居ない所で、静かに近寄るのは、いくら行儀良くても、相手に恐怖感を与える）と考えた祐二は、前回と同じように、自分の存在を知らされるべきだと考え、激しい水音をたてながら歩いていった。

彩世は水音に、一瞬、慎吾が来たと思い祐二を見た。しかし、慎吾でないと知り、写生に専念していた。

祐二は、彩世が自分を見ても恐がらずに写生していることに安心して、近付いていった。

彩世も、祐二のわざとらしい乱暴な歩き方で近寄ってくる姿を見

ても、何故か、恐いという気持ちになれなかった。

祐二は少し離れた場所から彩世の顔を真正面から見て思った。

（何故なんだ。僕がお伽の国の女性の顔を想像した時に現れたのがこの顔だった。しかし、最初に見た時の顔は生き生きと輝いていた。でも、今はなんだか悲しそう）

不審に思いながらも、その美しさに気恥ずかしさがどつと沸き、祐二は、電車から貴女を見て、逢いにきましたと、正直に言えなくなってしまうた。

そこで祐二は、川の美しさに惹かれて来たと、思わせるために、彩世に背を向けて立つと、川を見ながら、さりげなく、

「この川は美しいですね」と言って振り向くと、彩世は、写生しながら頷いた。

第53話

「僕は伯備線の電車に乗り岡山に向かっていたんですが、車窓から見える川があまりにも美しいので、少しの時間、この川の中を歩きたいと思い、備中高梁駅で下車し、川を下ってきました。この川は高梁川でしょう」

慎吾と会う前の彩世なら、祐二の魂胆を察知したかもしれないが、今は、慎吾のことで頭が一杯だったので疑うことができず、ええ、と答えた。

「これが僕の憧れの高梁川。今から僕の愛する川になりました」

「この川を愛して頂き嬉しく思います。貴方はご存じないかも知れませんが、以前の高梁川は、今に比べて水量も多く、水は清く澄みとても奇麗だったそうよ」

「そうですね、でも、今も美しいですよ」

彩世は男に対して、言いようのない安らぎを覚え、話を続けたいと思った。

「何か、この川に対して特別な思い出があるのでしょうか？」

「ええ、祖母らしき女性が孫娘に高梁川にまつわる、美しいお伽話を話しているのを偶然聞き、どうしても一度、訪れたいと思っていましたが、今、やっと目的を達しました」

彩世がお伽話に興味を持ったのか、

「どんなお伽話かしら？」

と、尋ねながら祐二を見上げたが、祐二の顔が太陽の位置に近かったため、一瞬、彩世の目に陽光が入り、目が眩み、祐二の顔が見えなかった。

祐二は、彩世の哀しげな顔をみているうちに、祖母が言ったお伽話は人の不幸を幸せに変える、との言葉を思いだした。

「聞きたいですか」

すると、彩世は哀しげな声で、

「ええ、ぜひ聞かせてください」

と、言つて祐二を見上げるが、また、目が眩んだのか、反射的に顔をそらした。

「じゃあ、話す前にお聞きしますが、この川へよく来ますか？」

「はい」

「じゃあ、一度ぐらいは西の方に架かる朝の虹を見たことがあるでしょう」

「朝の虹ですか。美しいでしょうね。でも、見たことがないわ」と彩世が残念そうに言った。

「それは残念、もし朝の虹が見えたなら、虹が消えない間に願いをかけると、どんな望みも叶うという伝説もあるのですよ。あなたは聞いたことがないですか？」

と、言う声を、彩世はどこかで聞いたような気がしたが、それ以上考えなかった。

「いえ、今、初めて知りました」

「高梁川は大きい川だから、他の地域のお伽話かもしれないね」

「いえ、わたしだけが知らないのかも知れません。お願いです、そのお伽話を聞かせて頂けませんか」

彩世はお伽話を聞き、今の悲しみから少しでも逃れられたらと思つたのだ。

「分かりました。でも、お伽話を僕が語れば嘘に聞こえるかも知れません。どうか目を閉じて、絵本に出てくる優しいおばあさんの顔を睨に浮かべて聞いてください」

第54話

祐二は話始めたが、聞いたとおりに話すことが出来ず、要約して話すことにした。

昔々、高梁川の川辺に貧しい漁師が居りました。漁師には、病弱の妻と、六歳の娘と二歳の妹がいました。父親は毎日のように高梁川で漁をしていましたが、どんな訳なのか、急に魚が獲れなくなってしまうのです。そんな或る日、父親は上流へ行けば魚が獲れると言つて出掛けたまま帰つて来なかつたのです。

と話ながら、祐二は、自分の語り下手に我慢ならず、止めようと思い彩世を見た。しかし彩世が真剣に聞いているので、止められなくなつた。

覚悟を決めた祐二は、一息吐いてから、話はじめた。

父親が帰つてこないため、食べる物がなくなり、母親は起き上がれないほど病気が重くなつたのです。そこで上の少女は、母親と妹に食べさせるため、毎日、高梁川へ魚を獲りに行きました。しかし、六歳の女の子が獲れる魚は小さい魚ばかりでした。そのうち、少女が小魚を獲つていることが、村のお金持ちの子供たちに知られたのです。

お金持ちの子供たちは少女に、

「僕のお庭の池に飼っている魚と同じ魚を取つて食べている。魚が可哀想だ。すぐ、取るのをやめる」

と言つて、川へ石を投げ込み小魚を逃したり、姿を見えなくするのです。少女は意地悪をされ泣きました。しかし、どんなに意地悪されても少女は魚を獲つて帰らないと、母親と妹が死ぬことを知っていました。

少女は意地悪な子供達が帰るのを待つてから、魚を獲りました。

しかし半年も経つ頃には、少女が獲れるような小さな魚はいなくなり、例え獲れても、一匹か二匹でした。

祐二は、彩世の顔を見て話すのが恥ずかしくなり、彩世に背を向け、川の流れを見ながら話す。

獲れた魚は母と妹に食べさせた少女は、自分は草木の葉を食べ、朝の暗いうちから高梁川へ来ました。しかし、獲れる魚はいませんでした。深い淵には数匹、少し大きめの魚が泳いでいました。少女は荒れて黒くなった手を差し出してその魚を獲ろうとしました。少女は知っていました。いくら手を伸ばしても魚が獲れないことを、でも少女は手を伸ばさずにはいられなかったのです。

急に彩世が顔を覆って泣き出した。

「どうかしましたか！」祐二が驚いて尋ねると。

「私は薄情者です」と言って泣きじゃくる。

「貴女の力になりたい、どうか理由を教えてください」

彩世は、百合があつて荒れて黒くなった小さな手で小さな魚を獲り、小さな弟や妹に食べさせていたのでは、と考え、思わず泣いてしまったのだ。

彩世から、哀れな百合の話が聞かされた祐二も、涙が出るのを止められなかった。

第55話

祐二は、川に向かって、百合の冥福を祈った後、話を続ける。

少女が手を伸ばした時、意地悪にも通り雨が川に降り、魚の姿を消してしまった。

魚を取る手段を奪われた悲しみで、少女はその場に崩れ落ちました。

それから、どの位いの時間が経ったでしょうか。

少女が起き上がり、何気なく西方をみると、美しい虹が出ていました。

少女は虹に向かって跪き

「父さんを母さんや弟の所へ帰してください」と祈ったのです。

彩世は百合の悲しみを思い、祐二の話を涙を浮かべて聞いたが、思わず尋ねた。

「お父さんは帰って来たの？」

それに答えず祐二は、話を続けた。

それからしばらく経った時、虹の架かった西方の川上で、ゴーと言っ激しい音がしました。

その音が川を下ってくる。少女は恐くなって土手まで逃げた時、赤茶けた濁流が少女の足下まで打ち寄せて来ました」

しかし、濁流の水位はそれ以上は上がりませんでした。少女は荒れ狂う濁流を恨めしげに眺め、今日は母や妹に食べさせる魚が取れないと泣きました。

「可哀相な少女」と彩世が呟く。

その時、濁流の勢いで流された大きな鯉が岸へ打ち上げられました。

少女は大喜びして捕まえると、持っていた籠に入れました。

「よかったわね」と、彩世は思わず喜びの声をあげてから、

「それからどうなったの？」と催促した。

少女はもつと鯉が取れるのとは思い濁流を眺めていました。すると、真つ黒い大きな流木が流れてきました。

流木の上には人間が乗り、濁流の中に振り落とされないようにしがみついていた。流木に乗った人間は、少女の父親だったのです。

少女は泣きながら叫びました「父さんを返して！」その声が聞こえたのか、父親を乗せた流木がゴムのように曲がり、反動を利用して父親を少女の前に投げ飛ばしました。

少女は嬉しくて父親に抱きつきました。そして父親は愛する娘を力一杯抱きしめました。

少女はこの幸せが真実なのか確かめようと、父親の肩越しに濁流を見ると、その目に映ったのは、流木が反転し、真つ白な腹だったのです。

流木の正体は、人間の腕で抱かえられないほど大きな大蛇だったのです。

父と娘は溢れる涙を止められないままに、濁流の中を浮き沈みしながら川下へ流れて行く大蛇に「ありがとうございます」と手を合わせました。

母親は夫が帰ったことと、少女が取った鯉を食べ病気が治りました。

それから父親の漁は、大きな鯉や美しいヤマメがたくさん獲れるようになり、一家に幸せが訪れました。

「大蛇さんはどうなったの？」

とお伽話の中に居る彩世が聞いた。

「大蛇は中国山地を護る神様だったので、高梁川から瀬戸内海へ出ると、龍に変身し、雲を湧かせると、その雲に飛び乗り、風を起すすと、また、中国山地へと戻ったそうだよ」

「じゃあ、神様は少女を可哀想と思って、お父様を返してくれたのね」

「可哀想、だけでは神様といえども何も出来なかったでしょうね。」

それよりか、両親や妹たちを思う優しい心と、その行動力に報いたのです」

「お父様は、半年間も何をしていたのでしょうか」

「父親は、家族に少しでも多くの食物を食べさせてやりたいと思い、誰も行ったことがない山深い谷に入り、道に迷っていたのです。神様はそのことを知っていたので、雨を降らせ、谷に洪水を起こし、父親を高梁川へ押し流し、神様が変身した流木に父親を乗せたのです」

「優しい神様ね」

「良いことをしていると、必ず、神様に届くと僕は信じています」

「じゃあ、神様は、なぜ、ユリを死なせたんでしょうか？」と、彩世が悲しげに言った。

「そうだね、百合さんは、自分の命を犠牲に子供を助けたんだ。だから、神様は、百合さんの意志を尊重したのかもしれないね」

「ユリの意志？」

第56話

「そうだよ、もし、人間が人間を助けなかったら、誰が人間を助けるのでしょうか。百合さんは、自分の命より人の命が大切と思っていたから、自分の命を犠牲にしても、子供の命を救ったんです。神様は、そんな百合さんを見捨てません。今頃は、大好きなカワラナデシコの花に囲まれて遊んでいるでしょう。でも、百合さんは、彩世さんの絵が一番好きだと思えますよ。百合さんの愛に満ちた行為は、私たちの心に永遠に残ります」

「きつと、そうだね。素敵なお夢を見させて頂きました。私は貴方のお話を信じます。そして、優しいお心遣いに感謝します」

彩世は、まだ醒めやらぬ夢から醒めるよう目を開けた。しかし、急に明るい陽光で目が眩んだのか、両手で目を抑えた。

「どうやら僕のお伽話では、あなたの哀しみを癒すことが出来なかったようです。もし差し支えがなかったら、哀しみの原因を聞かせてください」

祐二が聞くと、彩世が泣き出した。

「すみません余計なことを言ってしまったようです」

「いえ、嬉しくて泣いたんです」

「僕はあなたの哀しみの顔を喜びに変えてあげたいのです。その原因を僕が聞いても、何も出来ないかも知れませんが、話すと少しは気分が晴れるでしょう。そして、哀しみや苦しみを理解する人間が一人増え、解決の道が早まるかもしれないのです。もし、恥ずかしいのなら、僕ではなく、高梁川に話して下さい」

今日、彩世の哀しみが頂点に達していた。そこへ祐二が現れ、お伽話を聞かせ、そして、二人が共に百合の悲劇に涙を流したのだ。

彩世には、祐二が何者かより、心の中では、すでに親しい友人になっっていた。

また、はなせば、気持ち少しは楽になるのではないかと考え、

「婚約したひとを待っているんです。でも、三週間も経つのに来ないんです」

婚約していると聞いた祐二の驚きは、想像出来ないほどだった。

(愛する女性に婚約者がいた!)

どつど、悲しみがこみあげてきて、声もでない。

彩世は祐二の驚きを感じ取ったのか、

「私ごとで、おどろかせてごめんなさい」

我に帰った祐二は、

「悲しい気持ち、よく分かりますよ」

「話を聞いてくださったので、少し気持ちが晴れました。有難うございました」

「それは良かったですね。所で、何を写生しているのですか？」

「カワラナデシコの花です」

「僕の両親や兄は花が大好きです。でも僕は、花のことを詳しく知りません」

と言って祐二は彩世に近付き、絵を覗き込んだ。

第57話

彩世は、その祐二の顔を見た瞬間、何かに触れたような驚きの眼差しで祐二を見ていたが、

「あなたは！」と驚きの声を上げた。

彩世の驚きに祐二の方が驚いて、下から見上げる彩世の顔を見て、「あっ！」と、祐二も驚きの声をあげた。

女性の驚き顔と藍色のヘヤーバンドが合致すると同時に、当時の状況がはつきりと蘇った。

祐二は助けを求める女性の声を聞き、駆けつけると、二人の男が倒れている女性に襲いかかるうとしていた。

祐二は咄嗟に二人の男を突き倒し、女性を助け起こしながら、怪我をしていないか顔を見た。その驚いた顔が、今、祐二の前にあるのだ。

彩世を思い出せなかったのは、助けた喜びより、闘った後の虚しさの方が遥かに大きいため、出来るだけ事件を忘れるようにしているためだった。

しかし、祐二は彩世が忘れがたく、心の奥底に、その顔を刻んでいたのだ。

彩世が感動に震える声で言う。

「あなたは、私を助けてくれた人でしょう」

一瞬、彩世は祐二に抱きつこうとしたが、耐えた。

彩世は祐二が歩いてくる姿をみても、何の警戒心も抱かなかったのは、感覚的に、自分に害する人でないことを感じていたのだ。

「あの時も、そのヘヤーバンドをしていましたね」と、祐二が言う
と、

「はい、覚えていてくださったのね」と嬉しそうに答える彩世。

「忘れませんよ。二年前の五月、桂川でしたね」

「はい、あの時、貴方が早く逃げるんだ。と叱るように言ったから、

私は恐くなって、お礼も言わずに帰ってしまいました。でも、貴方の顔は忘れませんでした。あの時は、危ないところを助けて頂いて、有難うございました」

柔道と空手の高段者である祐二には、二人の悪党を追い払うのに苦労は無かった。

祐二は女性が、自分を覚えていてくれたことを知り、失恋したことも忘れ、この上もない喜びを感じていた。

「恐いのに、よく僕を憶えていましたね」

「忘れる筈はありません。貴方は私の（初恋の人と言うのを耐え）恩人ですもの」

恩人と言うだけでなく、慎吾に出会うまでの彩世は祐二を結婚相手と思っていたのだ。

「早くお逢いしたかったわ」

と、言った、その言葉には嘘偽りはない。慎吾に出会う前に逢っていたればよかったのにと心の中の叫びが口にでたのだ。

だが、すぐ、彩世は、祐二に惹かれて行く自分に気づき、慎吾に詫びていた。

第58話

彩世は、自分の複雑な心境に戸惑い、一層、悲しげだった。

祐二は、その悲しげな彩世をいとおしく思うのと同時に、何が何でも、彩世の顔から悲しみを取り除かなければと考え、

「僕の名は、榎山祐二です。この奇遇は、運命の神様が、以前のように、貴女に力を貸せと命じているのかもしれませんが」

彩世はしばらく思案していたが、断れば、祐二は婚約者が居る女に、もう用はないと、去って行くかもしれないと思うと、とても断れなかった。

詳しく話を聞いた祐二は、奈落の底へ叩き落とされたような気持ちになり、しばらくの間、奈落の底で、

（あの日、子供達に、ストーカーと言われても、逢いに行けば、この女性は僕をストーカーなどとは思わなかった。それなのに僕は、間違った選択をしてしまった）と後悔した。

「よく話してくれました。良い善後策を考えましょう」

祐二の悲しみは言葉では表せない。しかし、彩世を見捨てることが出来ない。

（僕が生まれてから初めて心から愛した貴女。例え、貴女が誰の恋人や妻であろうと、僕の助ける心に偽りはない。僕の命あるかぎり、あなたの幸せを陰ながら見守ります）

と、心に誓い、祐二は彩世に対する恋心を奥底に仕舞込むと、力強く言った。

「大丈夫、すぐ捜し出します」

「本当ですか？」

「はい、絶対に探し出します。そつだ、慎吾君の写真か何かありますか？」

全てを祐二に話した彩世だが、愛した人に慎吾の写真を見せられない。

「ありません」

「無いですか、じゃあ、似た人が有名人にも居ませんか？」

しばらく考えていた彩世が言った。

「サッカー選手に似ているように思います」

それは祐二も知っている選手の名前だった。

「あの有名な選手ですか、それならすぐ探し出せますから、気楽な気持ちで待って

いてください。僕は帰ったら、早速、友人、知人に依頼しますよ」

「そんなに簡単でしょうか、今は、個人情報保護法があるし」

「時間をかければ、必ず、捜せだせますよ」

「でも、慎吾さんに迷惑かからないでしょうか、それが心配です」

彩世の顔から最初の喜びが、困った顔に変わった。

「慎吾という名は沢山ありますから、僕自身が捜しているといえは、

誰も、彩世さんが捜している慎吾とは気付かないでしょう。また、

彩世さんが捜す場合は、お父さんが捜していることにすれば良いでしょう」

「そうですね。どうぞよろしくお願いいたします」

彩世の顔に安堵の表情が浮かんだ。

第59話

「任せてください」

電話番号の交換を終え、祐二が握手を求めると、彩世は震える手を差し出した。

（暖かい手、なぜ、私はこの人を待ち続けられなかったの！）

と、自分を責めたが、それで、慎吾への愛が消えたわけではない。祐二がふと、思いついたように尋ねた。

「その後、百合さんのご家族は？」

「私とユリは幼い頃から無二の親友だったけど、私は子供だったので、ユリの家庭のことまで詳しく知らなかったわ、私が高校生になったとき、私の両親から聞かされた話によると、ユリの母さんとはとても偉い人だそうよ。父親が居ないのに、子供が親や他人様に頼る習慣が身に付いてしまうと、大人になってから一人で生きて行けないと考え、子供たちに自分で生きる強い心、そして、人を思いやる優しい心を育てるために、誰の援助も受けず、一生懸命に働く姿を子供たちに見せていたのよ。無論、高梁市の人たちは様々な援助を申し出たわ、私の両親もね。でも、今だに援助を受けずに頑張っているわ。昨日、久しぶりにユリの弟さんと妹さんに会ったけど、弟さんは高校二年生なのに、中学生に見えるけど、礼儀正しく、しっかりとした考えを持った優しい少年よ。妹のすみれさんは活発で、とても思いやりが深くて優しい少女になっていたわ」

「それは良かったですね」

と、言ったものの、すみれの名が気になった。

（すみれさん？もしかしたら、観光案内をしてくれた。あのお姉さんぶつた可愛くて優しい高梁すみれさんかもしれない）

祐二は知らないが、伯備線の通路で母子を手助けした優しい少年は、百合の弟で、高梁すみれは、祐二が推理したように、高梁すみれだった。

祐二が帰ると言う彩世が、

「もう、帰るの？両親が助けてくれたお礼を言いたいと、何時も私に言っているの、どうか、私の家の家に来てください」

「ごめん、僕は礼を言われるのが苦手なのです。だから、ご両親に会えません」

彩世は、祐二の決心が強いと感じた。

「残念だわ、でも、何時の日か会って下さいね」

頷いて、祐二は帰りだした。

「あっ、待ってください、車で送りますから」と彩世が慌てて言う
と。

「彩世さん、僕は高梁川が大好きで愛しています。だから、川を見物しながら歩いて帰りたいのです。彩世さんは、百合さんの絵を仕上げてください」

祐二は彩世の車に乗って仲良く語り合いたい。だが、彩世に近付けば近付くほど、失恋の悲しみが大きくなるために距離を作ったのだ。

第60話

しかし、失恋の痛手は祐二から氣力を失わせたのか、ストーカーと疑われたときのように、肩を落として歩いていった。

彩世は、祐二がカワラナデシコの花を写生してくださいと、言った言葉が冷たく聞こえ、目に涙を浮かべ去り行く祐二を見送っていた、だが、その姿が見えなくなるのと同時に、
(私は祐二さんを死ぬほど愛していた。でも、祐二さんは私を愛していなかった)

勝手に推理した彩世は、思わず河原に泣き伏した。

だが、彩世は自分の感情に溺れるあまり、祐二の歩く姿に気付かなかった。もし、彩世が素直に祐二の歩く姿をみたら、あのストーカー男が誰だったか分かっただろう。

祐二に逢い、一層の哀しみを抱いた彩世は、絵を百合に上げると家に帰った。

彩世が家に入ると母親が「今日は何時よりも早かったわね、どう連絡ついた?」

「いえ」

寂しげに彩世が答えると母親が慰めるように言った。

「優しい彩世を騙す男など居ないわ。きっと何時か現れるわよ。元気をだしなさい」

「そうならいいんだけど」

彩世は、叱られるのを覚悟して祐二に逢ったことを話した。無論、電話番号は伏せた。

「なぜ、お連れしなかったの?」

予想通り、母親は顔を真っ赤にして怒った。

「どうしても嫌だというから」

「じゃあ仕方ないわね。でも、今度、逢った時には、必ずお連れし

てね。もし、慎吾さんが来なかったら祐二さんと、いえ、つまらない事を言い出してごめんなさいね」

母親は、約束を破る慎吾より、祐二と彩世を結婚させたいと思ったのだ。

「今度逢つたら、絶対に電話番号を聞くのよ」

「いいわ、京都の大学に戻った時に話してみる」と、言った後、

（大学へ戻る？今朝まで私は大学とフィギアスケートを辞め、河原で写生しながら慎吾さんを待つと決めていたのに）

彩世は自らの心境の変化に驚いた。

翌日、彩世の姿が河原へ現れた。

彩世は写生道具を持ち、カワラナデシコの花を求めて、河原をあちこちと歩いたが、見つけだせなかったので、ユリが病室に活けてくれたナデシコの花を思い出し描こうとした。しかし、ユリと祐二と慎吾の顔が交互に現れ、何時の間にか泣いていた。

そして。

（祐二さんのことを忘れた私が悪い）

彩世は自分を責めた。しかし、いくら初恋の人でも、片思いのうえ、二年以上の年月が経っているのだ、忘れて当然だ。それなのに責めるのは祐二への愛が蘇った証だ。

第61話 危機一髪

彩世は堪らず、この場から逃げ出したくなる。すると、暴漢と戦う祐二の姿が現れると、すぐ、お伽話を話す声が聞こえる。そして、不意に祐二の暖かい手の感触が蘇り、思わず。

（わたしを助けて）

と、叫ぶ。すると、祐二の手が、彩世を、しっかりと握り、「京都で逢おうね」という妄想が頭を駆け巡りながらも、絵は完成した。「ユリ、ごめんね。あなたの不幸と比べたら私の悲しみや、苦しみは取るに足りないわ。今日の午後、私は京都へ戻るけど、また、会いにくるわ」

家に帰った彩世が京都に帰る準備をしていると母親が来て。

「あら、少し元気になっていい。どんな心境の変化かしら、もしかしら、祐二さんのせいかしら」

母親は不誠実な慎吾より、彩世を助けてくれた祐二が彩世の結婚相手として相応しいと思っていたので、彩世の心が祐二に傾くように仕向けながら、車で彩世を備中高梁駅へ送り届けた。

「京都には祐二さんが居るから、安心して見送れるわ」と言って彩世の反応を見る。

母親の期待に反し、彩世は、今も慎吾を思うと会いたくて胸が苦しくなる。だが、やくも号に乗った彩世の顔は、昨日より少し明るくなっていった。

祐二が母親との約束を守っていたなら、今頃、祐二と彩世はお伽の国の主人公になり、幸せな日々を送っていただろう。

だが、守らなかつたために、愛する彩世までも悲しみの淵に巻き込むこととなった。

祐二と彩世に、再び幸せが訪れる日があるのだろうか。

京都に戻った祐二は、彩世への恋心を封じ、早速、友人知人や会社関係の人達に慎吾捜しを依頼した。

しかし、日が経つに従い、封じた筈の恋心も封じ切れなくなり、逢いたさに、胸が潰れそうになるのだ。

祐二の切ない心を癒せるのは、彩世に逢うことだ。しかし、彩世に逢うためには、約束したように、慎吾の情報を得た時である。

そこで祐二は、情報を得るために奔走したが、一ヶ月が過ぎても、まだ、一件の情報も得られないため、苦悩していた。

そんなある日。

「おい、昼飯に行こうか」と同僚の鈴木肇が、仕事をしている祐二の肩を叩いた。

「もう、そんな時間か」

第62話

祐二が腕時計を見る。

「そんな時間か？とは何だ。お前は、お腹が空いてないのか」

「空いているよ」

「しかし、最近のお前は仕事に熱中して、何度も食事を忘れかけているじゃないか」

「帰省した時の仕事が片付いていないんだ」と、言い訳したが、仕事をしていないと、失恋の苦しみから逃れられないのだ。

「違うね。俺は君を理解する最良の友だよ。夏期休暇以後、ずっと冴えない顔をしている。きつと、何かあったに違いない。訳を話せ」

鈴木が心配そうに尋ねた。

「別段なものもないよ」

「うそ付け。普通、帰省はお盆前後なのに、今年も八月二日だった。きつと、何か予定があつての事と思うがどうだ」と、推理する。

「本当に何も無いよ」

「その話は後にして、まず、食事に行こうか」

「そうだな」

二人は、社をでると、近くのレストランへ行った。

席に着くと、すぐ、鈴木が言った。

「俺、婚約したんだ」

聞きたくない言葉をいきなり言われたので、祐二は

「婚約」と、呟いて顔を曇らせた。

「おい、榎山、お前は俺の婚約が嬉しくないのか？」

と、咎められた。

「すまん、悪い。気のすむまで謝るよ」

「謝らなくてもいいよ」

鈴木の心を傷つけたことに気が付いた祐二は、

「どんな弁明も許してもらえそうもないが、僕の訳を聞いてくれ」

と言わずにおれなかった。

「訳があつたのか、じゃあ、聞かせてくれ」

「場所は言えないが、夏季休暇の帰省中、ある女性に出逢つた。僕はその女性に、初恋をした。幸いにも話す機会を得て、天にも昇る程の幸せを感じていたが、話している間に、その女性には婚約者がいることを知つたのだ。だから婚約と聞いて、辛くなつたのだ」と、祐二は、簡単に話した。

「そうか、分かつたぞ、休暇から帰つた後のお前は、どこか、元気が無かつた。どうやら、それが原因だたんだな。そうか、失恋したか。」

第63話

と、何度も頷いていた。

「その態度、何となく、おもしろがってないか」

「すまん。帰省日と言うが、以前から好きな女性が故郷に居たのちがうのか」

「違うよ、なぜ、勝手な推測するんだ？」

「推測ではないよ。その証拠は、去年、我が社に入社した京極霧子、この名前はお前も知っているだろう」

「と言いながら祐二の顔を伺う。」

「知っているよ。それがどうした？」

「吉永良子が言っていたよ。この夏の休暇前、我が社のマドンナ的存在の京極霧子が、お前を北海道旅行に誘ったが、断わられたと泣いていたそうだよ」

「待つてくれ、断ったのは確かだが、彼女だけでなく、数人のメンバーと一緒にいかないかと言っていたよ」

「鈍い奴だ。社内の独身男性なら、彼女から誘われたら断る者は一人も居ない。それなのに断ったのは、故郷に恋人が居る、この考えは理論整然としているだろう」

「ばかばかしい」と、あきれ顔で言った。

「じゃあ、理由を話せ」

鈴木はよほど祐二の恋物語を聞きたいのか、追求の手を緩めない「断ったのは、買った新車を父母や幼友達に見せることだった。しかし、計画が急変したために、目的が果たせなかつたけどね」

「じゃあ、初恋の女性といつ出逢ったんだ」

「帰省した日だよ」

「八月二日か」

「そうだよ」

「じゃあ、婚約を知ったのは？」

「半月前だ」

「じゃあ、約、一ヶ月で初恋は終わったんだな」

「そういうことになるね」

「お前は目的に一直線だから周りが見えないんだ。だから、すぐ、振られるような女性に恋をしてしまったんだ。じゃあ、もしかすると、霧子さんに好意を抱かれていることに全然気付かなかつたんだな」

「好意を持たれいた？」

「やっぱり、車の為に霧子さんの愛が分からないなんて、お前の、その無神経さに腹が立つよ」

「そうか、それは申し訳ないことをした」

祐二は、心底から謝った。

第64話

「俺に謝っても無駄だ」

「分かっている」

「もつと、目を方々に向けるべきだな、でないとな、次の目標は達成しないぞ」

「次の目標を知っているのか？」

「知っているよ。会社を起こして、本社を島根県に移転し、島根の繁栄に寄与するんだらう」

「詳しいな」

「当たり前だ。入社日の退社時、同時入社した者たちが集まり、お前に遊びに行かないかと誘ったとき、お前はみんなの前で言っただらう。僕は、目的があるので、みんなと遊び等の付き合いは出来ないから、よろしくお願いしますと言っただらう。後日、俺がその理由を糾したら、言ったじゃないか」

「そうだった。ところで、婚約の話はどうなった？」

「お前のせいで、話がそれってしまったが、婚約相手は、お前も知っている庶務課の吉永良子だよ」

「無論よく知っているよ。何時も物腰が穏やかで、素敵な女性だ。

お前の目は確かだなあ。お目出度う」

祐二の贅辞に鈴木は、

「いや、有難う」

「結婚式は何時だ」

「十一月中旬だ。式に出てくれるだらうな」

「丁度、二ヶ月後だな。喜んで出席させてもらうよ」

「諸事に関わらないお前の出席が、何より嬉しいよ」

「変人扱いをするな。そうだ婚約に乾杯しないか」

「一滴もアルコールが飲めないのに、乾杯とは、威勢がいいことを言っね」

「目出度いことだから、退社後、乾杯できる所へ行こうよ」

「分かった、ところで、明日の土曜日、予定あるか？」と、鈴木が尋ねた。

「無い、自慢できないがね」

「良かった。じゃあ明日、俺に付き合ってくれ」

「何をするんだ？」

「フィギュアスケートを観戦に行くんだ」

「何だ、それは」

「スケートリンクで、飛んだり、舞ったりする美しい競技だよ」

「そんな競技があったのか、知らなかったなあ」

「馬鹿と言いたいが、お前に言っても意味ないな。行ってくれるか」

第65話

「最近、今までに、見聞きしなかった事が目や耳に入り、自分が違う世界に居るような気がしてならないんだよ。仕方ない、付き合うとするか」

「じゃあ、明日の正午、京都駅で待ち合わせ、食事後、スケート場だ」

退社後、祐二と鈴木は、居酒屋でささやかな乾杯をおこなった。

翌日、祐二が指定された場所に行くと、予想もしない女性が居たので驚いた。

昨日鈴木との話にでて来た。同じ会社の京極霧子がそこにいたのだ。

「京極さん。貴女も、鈴木くんに誘われたんですか」

「いえ、私は吉永良子さんに誘われたんです」

「僕はフィギアスケートを見るのは初めてなんです。貴女は？」

「私は、知ってます。」

「じゃあ、先輩なんだ。僕は何も分からないから、よろしくお願いします」

二人で話しているところへ、遅れて鈴木と婚約者の良子が来た。

「遅くなってすまん」

四人は食事をした後、スケート場へ行った。

フィギアスケートは人気スポーツなのか、観客席はすでに満員だった。

鈴木が買った席ならリンクから一番遠い席だと思っていたが、リンクから五列目の席だったので、祐二は驚いて鈴木に尋ねた。

「こない席良く購入できたな」

「良子が、自分の両親の結婚祝いに、俺の分も含めて買ってくれたんだが、あいにく両親の体調が思わしくないので、券を無駄にするのももつたないかと、彼女は友人の京極さんを誘い。一枚余るから

俺も誰か友人を誘ってみてと言われたんで、親友のお前に気晴らしにどうかと来てもらったのさ」

どうやら、鈴木と良子が祐二と霧子の仲を取り持とう考えた作戦だった。

しかし、祐二は霧子を女性として尊敬していても、恋愛感情を持っていない上に、鈴木から、霧子が祐二に好意を抱いていると聞かされていたので、霧子を意識するあまり、場内のことは上の空だった。

やがて、フィギュアスケートの演技が始まった。特に女性は、華麗な衣装に身を包み、優雅な演技で観客を夢の世界へと誘った。

演技者の何人かが華麗なパフォーマンスで観客を魅了していたが、一人の女性がリンクに上がると、今迄よりも一際、大きな歓声と拍手が起こった。

「彩世さん！」

良子と霧子が声援を送った。

霧子に神経を使っていた祐二だが、自分の命より大切と思っていた彩世の名前が出たので祐二はリンク上の女性を見て驚き、思わず「彩世さん」と呟いていた。

河原の彩世は美しくても親しみが持てたが、スポットライトに照らされながら、氷上で演技する彩世は、まるで、春の妖精のように祐二には見えた。

第6話

(彩世さんはスター、僕とは住む世界が違う)

この時、祐二は、彩世を遠くに感じた。

「彩世さんをご存じなんですか？」

霧子が尋ねた。

「いえ」

「近年、調子を落としているけど、二、三年前は、オリンピックでメダルを獲れると言われていたのよ」

「なぜ、調子が落ちたのでしょうか」

「人は、様々な憶測をしているけど、私は、女性としての見地から、身体の変化と恋だと思えます」

「なるほどね」

恋と聞いて、祐二はありえると思った。

やがて、彩世の演技は終わると、また、嵐のような歓声と拍手が場内に木霊した。

祐二も、拍手していた。

「今日の彩世さんは、とても美しく纏めたけど、以前の正確さがないわ。恐らく、精神的の問題で、演技力が落ちたようね」

「よく、ご存知ですね」

「私もフィギュアの選手だったのよ」

「詳しいと思つたら。貴女も選手でしたか、何故、やめたのですか？」

「十六歳の時から急に体調を崩して止めたわ」

「それは残念ですね。体調を崩さなかつたら、今、リンクの上に居たでしょうね」

「そうかも知れないわね」

祐二が慎吾を捜すと言つた時、彩世の顔が喜びと困つた顔に変わった意味が分かつた。

(彩世さんはスターなんだ。もし、彩世さんの名前で、慎吾くんを捜したら、新聞に載る可能性があり、二人が迷惑をしていたらう。僕の名前で捜すことにして良かった)

やがて、選手の演技が終わったので、四人は会場を出ると、近くの喫茶店でコーヒーを飲んだ後、鈴木が、樫山に用があると行って、女性たちと別れた。

「おい、用があると行ったが、何の用だ」

「霧子さんと、仲良く話していたね」

「そう見えたか、よかった」

「と言うことは、お互いに意気投合したんだね」

「意気投合？それは何だ？」

祐二が尋ねた。

「お前が霧子さんが互いに好意を抱いているように見えたからだ」

「ええ？そう見えたか」

祐二が意外そうに言った。

第67話

「と、言うことは、何もなかったということか？」

鈴木が落胆したように言った。

「僕は、以前、お前に言ったように、彼女を尊敬しているが、恋愛感情は持っていないといっただろう、まして、社内では、互いに気まずい思いをするのは嫌だからね」

「俺は、お前が初恋に破れたと聞いた。俺の経験から、初恋は破られるためにあり、その経験が、真の愛を見付ける糧となると思っている。そして、失恋の悲しみや苦しみを消す最も有効な手段は、新しい恋をすることだ。霧子さんとどうだ？」

「今回の招待はそれが目的だったのか」

「そうだ。お前と霧子さんならお似合いだと思っただよ」

彩世一途の祐二には、鈴木の好意は、ありがた迷惑でしかない。「お前の好意は忘れない。もし、霧子さんがこの計画を知った上で参加したのなら、霧子さんにはすまないが、僕は今も彼女のことを忘れられないからだ」

「そうか、まだお前は思っていたのか、弁解の余地がないな。悪かった、許してくれ」

「僕のことはいいから、霧子さんが傷つかないように対処してくれ」「分かった。決して、霧子さんの心が傷つかないようにする」

鈴木は、意気消沈の体で帰っていった。

一人になった祐二の脳裏に、氷上で優雅に演技する彩世の姿があった。逢いたくても逢えない彩世の姿を見たことにより、祐二の辛い心が癒されたのだ。

彩世は、祐二が言った「慎吾くんは僕が責任を持って捜します」の力強い言葉だけを信じて京都へ戻ってきた、と自分の心に言聞かせていた。

でない、祐二の愛を期待し、慎吾との婚約を疎ましく思うよう

になるかもしれないという恐れと罪悪感からである。

だが、もはや、否、以前から祐二を愛した彩世に、祐二を愛するなどというのは無理な話であった。

彩世は、祐二の電話を待っていた。だが、何時まで経っても電話はこない。その悲しみを抱いて、フィギュアスケートの試合に出場し、以前のように、自分の思いが祐二のに届くようにと演技した。

彩世は、その演技を祐二が感動しながら見ていたことも知らず、マンションへ帰ってくると、祐二に見放されたと泣いていた。

そこに、父親から電話があった。

「新しいマンションへ引っ越しした気分は、どうだ？」

彩世が女性専用のマンションへ引っ越したのは、社命で米国へ出張していた祖父母の長男が、会社から、急遽、京都支社へ転勤命令を命じられたために、妻と五人の子供を連れて帰って来たのだ。祖父母の家は大きい方だが、彩世が住みには部屋が少ないため、近くのマンションに引っ越してたのだ。

第68話

「引越したといっても、歩いて二分ほどだから、淋しくないわ」

「そうか、心配していたが、案外元気そうで安心したよ」

「祐二さんが元気つけてくださるから、心配しないでね」

高梁川以来、祐二に逢っていないのに、彩世は父親を心配させないために嘘をついた。

「有り難いことだね、よくお礼をいいなさい。私もお礼を言いたいから、住所や電話番号も知らなから、それも出来ない。何とか、祐二さんに会わせてくれないものかね。彩世から頼んでくれないか」
「それは駄目よ。だって、いくら私がお願いしても会ってくれないかったのよ。それは、お礼を言われるのが嫌なのよ」

「そうか、じゃあ、お礼が言える時まで待つよ」

「そうしてください。ところで今日は私を心配して電話してくださいの」

「父さんは私を心配して電話をくれたの」

「いや、良い話を聞かそうと思ってだ」

「慎吾さんのことね」

祐二に見離されたと思った彩世の心は慎吾へ移り、胸が期待で切なく震える。

「昨日、得意先の人から、慎吾らしき学生が居ると報せてくれたんだ。しかし、あまり期待しないようにな」

「はい」

「得意先の人たちには、私が捜していることにしていられるからね」
「有難う、住所は分かっているの？」

「大阪の天満だよ」

「きつと慎吾さんだわ。だって、大阪のマスコミ関係の会社に就職が内定していると話していたんもの」

「そうか。私と一緒に付いて行ってやりたいが、明日の日曜日は、

業界の大切な会合があるから行けない。来週なら行けるのだが、その日まで、待っているからね」

「いえ、すぐ会いたいから、明日、行くわ」

彩世は、一刻も早く慎吾に会いたかった。

「それはなら、厚かましいが、祐二くんをお願いしてみたら」

父親は、女一人の危険性を察知して言った。

彩世も、一瞬、そう思ったが、

「捜して頂いても、一緒に行つて頂くのは、あまりにも厚かましいので、明日、一人で行きます」

「それも、そうだな、良い知らせを待っているよ」

父親は言つて電話を切つた。

第69話

翌日、彩世は大阪の環状線天満橋で下車し、父に教えられた住所のマンションへ行き、郵便受けを見て、金丸慎吾の名前を確かめた。彩世は、はやる心を押し沈め、エレベーターに乗り、六階のボタンを押す。

数秒で六階に着き、ドアが開いた、同時に彩世の心臓が早鐘を打つ。

慎吾の部屋の前に着いた彩世は、ドアを軽くノックし、ドアが開くのを待つ、その間の時間が、彩世にとって、無限の長さを感じた。だが、室内からの返答がないため、今度は少し強めにノックした。その音がマンション内に響き渡った。

ドアの内側で人の動く気配がしたのと同時にドアが開いた。誰？と言いながら、頭髪を茶髪に染めた男が出て来た。

彩世の目には、出てきた男がとても大学生に見えなかったため「慎吾さんは居られますか」と尋ねた。

「居るよ、君は誰だ」

「失礼しました、天見彩世と申します」

「用はなんだ」と男は気味の悪い顔をして言った。

「慎吾さんを尋ねて来ました」

「会わしてやるから入れよ」と言って、彩世を室内に導いた。

「慎吾さんは？」

疑うことを知らない彩世は、まだ、この男を信用し中へ入った。そんな彩世を玄関から中へと導いた男は

「前にいるだろ？俺が金丸慎吾だ」と言われても、父に紹介された慎吾がこの男と同じだと思えない。

「嘘でしょう？」

「真正正銘、俺が金丸慎吾だよ」と言って、運転免許所を見せた。免許所の名前は金丸慎吾となっており、写真は男の顔だった。

真実を見た彩世は、失望と同時に失礼なことをしたことに気付く。「ごめんなさい、間違ってしまいました。どうかお許しください」心を込めて謝罪した。

金丸慎吾はそんな彩世をニヤニヤしながら見つめて馬鹿にするように言った。

「何を謝ってんだよ」

「金丸慎吾さんを、捜している人だと勘違いして会いに来たことです。突然お邪魔して申し訳ありません」

「勘違いじゃない。俺は君が捜している慎吾だよ」と、金丸は薄気味悪い笑いをうかべた。

第70話

その気味悪さに身震いをした彩世は、

「失礼は重々お詫びします、どうかお許しください」と言って、部屋を出ようとしたが金丸が玄関へ先回りしてドアの鍵を掛けた。

彩世は、恐怖に慄きながらも、金丸を退け鍵を開けようとする。金丸は彩世の手を取り、部屋に連れ込もうとする。

「助けて！」と、彩世は叫んだ。

すると、金丸は彩世を押し倒し、手で口を塞いだ。彩世が全力で抵抗していると金丸の手が彩世の口から外れた。

「祐二さん、助けて」

思わず祐二に助けを求めていると、廊下を走る音が聞こえ、閉じこめられた部屋のドアを激しく叩く音と同時に

「警察を呼ぶわよ、開けなさい」と女性の声が出た。

その声に驚いた金丸は彩世から離れた。彩世は夢中でドアの鍵を開け外へ飛び出すと、外に立っていた女性に縋り付いた。

「この女は俺の女だ。他人が余計な事をするな」

後から出てきた金丸が恐い顔をして、女性を睨む。

「それ本当？」と言って彩世を見た女性は。

「彩世！彩世ね」と、驚きの声を上げた。

彩世は恐怖で言葉もでないのか、首肯してから救いを求めようと、女性の顔を見た。

「恵子！」

それは同じ大学に通う友人の森田恵子だった。

「この男性と付き合っているの？彩世」

「違うわ」

彩世は恵子に縋り付いた。

「うるせえ、俺たちは付き合ってるって言ってんだろ」

男が脅すように言う。恵子が声を張り上げて言った。

「嘘を言つて彼女に危害を加えると言つたら警察を呼ぶわよ」

恵子の言葉に男はせせら笑いながらも呼べよと言つていたが、三人のただならぬ様子に何事かと、住人達が集まつてきた。

すかさず恵子が「脅されてるんです、誰か」と叫ぶと、金丸は分が悪いと思つたのか、

「面倒なまねしやがつて、さつさと帰れ、余計なまねすると殺すぞ」と捨て台詞を吐くと部屋へ逃げ込み、ドアを荒々しく閉めた。

集まつた人々もそれを見届けると安心したように、帰つていった。

恵子は彩世をマンションから外へ連れ出しながら尋ねた。

「なぜ、あんな男に絡まれてたの？」

彩世は、話そうとしたが、まだ、恐怖で、何も考えられない状態だった。

それを悟つた恵子は、彩世が落ち着くのを待つてから聞こうと考え、大阪の梅田まで出たところで、地下街にある喫茶店へ連れて行った。

第71話

「もう落ち着いた？」

「ええ、今日は危ない所を助けて頂いて有難う。もし恵子が来てくれなかったら……」

「いいのよ、間に合って良かった」

「ある人を捜していて、その人らしき人がいると聞いたので、尋ねて行っただけど、全然違う人だったの。失礼をお詫びして帰ろうとしたら、襲われたの」

「恐かったでしょう」

「ええ、本当にありがとう恵子」

彩世は先ほどのことを思い出したのか、また震えだした。

「以前から捜していた人に会いに行っただのね？あの助けてくれたと言う人に」

「違うのよ、今回は父の代理で会いに行っただの」

彩世は、祐二の忠告を守って、慎吾のことは伏せて話した。

恵子は良い人なのだが、以前に祐二のことを何気なく話したら、大学中に知れ渡り、やがてマスコミに追い掛けられる羽目になったのだ。

そのため彩世は慎吾にかかる迷惑を考え、恵子に本当のことを言えなかった。

今回は、祐二の教えを守ったので、二度と、騒ぎに巻き込まれる恐れはないが、今後、一人で、慎吾に会いに行くことはためらわれた。

「そうだったの。私があのレストランへ行ったのは、私の彼が住んでいるからよ。今日は彼と話し合いをしたと思っただけで居なかったの、帰ろうとしたとき、女性の悲鳴を聞いたので、行ったら彩世だったから驚いたわ」

「あのマンションに恋人がいたの？どんな人か会ってみたいわ」

「それは無理ね」

「どうして？」

「今日、彼に会いに来たのは、別れを告げるためだったのよ」

「どうして？」

「彼、北海道へ帰ると言うのよ」

「じゃあ、一緒に行けばいいのに」

「それがそもいかないのよ」と、言った恵子は、彼と別れる原因を話した。

彼は弁護士資格を得るために、司法試験を何度も受けたが落ちた。恵子は、その位で別れる気はない。真の原因は、試験勉強もせず、毎日パチンコ通いをしていて、その資金や生活費は親が有名な病院の院長であるため、毎月、仕送りしてもらっていた。

その自立心のなさに、恵子は愛想を尽かしたのだ。

第72話

「最近、親が仕送りを止めると言っていたので、パチンコができないから北海道へ帰るといいだしたの、呆れたでしょう」

「そうだったの」

「そうよ、弁護士にならなくてもいいの、自立心さえあれば別れないわ、どうにも我慢できないのは、パチンコばかりして、働きもせず親に頼ろうとする甘えが許せないの」

人間が働く心を失ったら、幸せはない。まして、愛する人がいる者が働くことを放棄したら、その人達を幸せにできるはずはないのだ。

彩世は自分の苦しみを忘れ、恵子の身を心配して言った。

「深刻な問題ね」

「そうでしょう」

「私には、恵子の愛している彼が、パチンコに夢中になるなんて、考えられないわ、パチンコは愛より強いのか？」

「彼の場合はね」

「残念ね」

「私も最近までは、愛に終わりは無いと考えていたけど、その愛がメッキを剥ぐように剥がれていたわ」

「愛って、そんなに簡単に無くなるのね」言っただけで慎吾の顔を思い浮かべていた。

「私は、自分の心を覗いて知ったわ」

「そうなの。ところで、そのことをご両親に相談しの」

「したわ」

「じゃあ、姫路の実家へ帰ったんだ」

「いえ、彼が夏休み中は帰るなときつく言うので帰れなかったの、電話で話したわ」

「で、ご両親の考えは？」と大人の考えが知りたい彩世が聞いた。

「すぐ別れなさいだったわ」

「そうなの、でも、大学は辞めたりしないでしょう」

「いえ、辞めるかもしれないわ」

「えっ、辞めるの？」

彩世には信じられなかった。

「そうよ、私、何だか勉強するのが嫌になってきたの」

慎吾の不実に泣いた彩世は、恵子の心境を理解できた。

「何もかも嫌になったのね」

「そうよ」

「辞めてどうするの？」

「就職するわ」と、平然と言った。

第73話

「この就職難の時代に大学中退では、いい職に就けないって聞いたけど」

「それは大丈夫よ」

「じゃあ、決まってるのね。良かった」

「いえ、決まってるじゃないけど、申し込めば採用は確実なの。会社は神戸に本社があつて東京に支店を置いているIT関連の会社なんだけど、その社長夫人は、真竹洋子さんと言つて、私の母の友人なの。高校を卒業するまで、お家にはよく遊びに行つたわ社長さんには三人の息子さんがいて良く遊んでもらつた、みんないい人で、家族ぐるみの付き合いで気心は知れてるし、前々から高校をでたら社長秘書にならないかと行つてくださつて、今も母にそう言つてくれてるの」

「有り難い話ね」

「彼がちゃんと弁護士になつてくれたら、彼を会社の顧問弁護士に雇つて頂けたらとか、ずうずうしいけど社員に採用してもらえればとか考へてはいたんだけど、あの有様なら、紹介したら失礼このうえもないから、彼とのことは話てはいないのよ」

「人生つて、悲しいけど、思い通りにはならないわね」

彩世は我が身を思いだしながら言つた。

だがしかし彩世は、自分から運命を遠ざけてしまったことに、この時は気がついてはいなかった。

「彩世を助けた男性は、まだ、見付けだせないの？」

突然言われたので、彩世が目丸くしている。

「でも、羨ましい。いつまでも追い掛けて、逢つた時の美しい夢を見ていられるんだからそれに比べて、私の愛は黒く汚れ切つた鉄くずのように剥げ落ちてしまつたわ。もう、私には、美しい夢を見る事が出来なくなつてしまつた」と、悲しそうに言つた。

「諦めたら駄目よ、その諦めの心が愛と夢を失うんだから」

「そうでした。私には大切すぎて近寄れなかった人がいたわ」

「そんな人が他に居たの？」

「居たわ、その人は私の初恋の人よ。でも、その人が東京の大学へ行ってから数年たって、私も京都の大学へ入ったので、その人のことを忘れ、今の彼と付き合ってしまったのよ。まだ、遅くないわ。実家へ帰ったら、その人と会えるかもしれない。そうよ、会えるわ」
言った恵子の顔に明るさが戻った。

彩世は、恵子も、苦しい経験をしていたんだと、驚きながら聞いていた。

「その人は？」

恵子の初恋の男に興味を持つ程、心に余裕がない彩世だが一応たずねた。

「真竹家の次男よ」

言うつと、恵子は自分の胸を抱いて言った。

「その人の名前は？」

第74話

彩世は興味を抱いて尋ねた。

「占ったら、他人に名前を言つと、その人が離れて行くと言われたから、誰にも言わないことにしているのよ」

恵子が真剣な顔をした。

「じゃあ、もう、彼と別れるのは決定的ね」

「少しだけ未練があるけれど、将来のことを考えると未練を断ち切るしかないわ」

彩世は慎吾の愛を考えた。

（慎吾さんが連絡してこないのは、私に対する愛が醒めたせいだわ。だって、私なら、一分一秒でも離れるのが嫌だし、声が聞きたいから絶対に連絡するわ）

彩世に対する慎吾の愛が消えたと思うと、楽しかった三日間が思い出され悲しくなる。

「帰りましようか」恵子が促したした。

「恵子は私の恩人よ、もし困ったことや相談したいことがあったら、すぐ、駆けつけるから呼び出してね。今日は本当にありがとう」

彩世は恵子によって、危機を救われ、恋愛が夢のように美しく無いと教えられた。

一ヶ月後、恵子から北海道へ行くと言う連絡があった、理由を尋ねてみると、妊娠していることに気付き、子供の将来を考えると、とても、男と別れることが出来なくなり北海道へ行くことにしたとの返答だった。

十月下旬の日曜日。

今は秋、例年なら、深まる秋を愛でる気候なのに、今年の京都の秋は、季節を先取りしたかのよう、北風が吹き、寒い冬の到来を予感させる日々が続いていたが、今日の午後から急に、春のような陽気になった。

その陽気がマンションの自宅でパソコンを操作していた祐二に、春を感じさせた。

祐二が窓を開けて外を見ると、太陽は、薄い霞が包まれたかのように、優しい陽光が地上を照らし、今朝の、あの寒々とした風景が春の景色に見えると同時に、彩世を助けた二年前の暖かい春を思い出し、すぐ、逢いたくなつた。

だが、逢えない。否、逢いたければ、すぐ逢えると分かっていた。だが、言えない。

何故なら、彩世は助けてもらった恩義から嫌でも拒否できないと祐二は考えているからだ。そのため、祐二は、逢いたくても逢えない悲しみに堪えているのだ。

逢えない哀しみと、今日の小春日が、祐二に夢を見させた。

夢とは、絶対に叶わなぬ儂い望みと知りながら、ゲーム機をリセットするように、彩世と初めて逢った日にリセットし、慎吾が彩世に会う前に、自分が彩世に逢おうと考えた。

リセットするためには、彩世を助けた場所へ行かねばならない。

だが、今は、その場所を正確に覚えていないのだ。

第75話 桂川

そこで、祐二は、場所を特定するには、あの日と同じ行動をする必要があると考え、あの日の行動を思いだそうとした。

あの日は、桂離宮近くの会社で商談を済ませ、次の行き先は、伏見区の久我の会社へ行くために、桂川の堤防上を通る、水垂上桂線に車を取り入れ、川下の久我に向かった。

彩世を助けた場所は、堤防下から桂川までに広がる河川敷で、大小の木々に囲まれ、よく注意しなければ、木々の下で何が行われているか分からない場所であった。

だが祐二は、一瞬その木立の中で何か動く物を見たので、車を止め、耳を澄ませると、小さな悲鳴が聞こえた。

祐二は、堤防を駆け下り、彩世を助け、早く逃げると、命じたが、闘いを仕掛けず、相手の出方を待った。相手は闘いなれているのか、用心深く祐二を観察していたが、我慢できなくなったのか、殴りかかってきた。

しかし祐二の敵ではない。二人の男は、瞬時に草の上に投げ飛ばされたので、恐れをなして逃げだした。

暴漢が逃げ出した方角は、助けた女性が逃げた方なので、祐二は、男達を追い掛け、追い越し、反対の方向へと追いやり、女性が安全な場所まで逃げたか確かめるために、逃げた方を見ると、助けた女性が、水垂上桂線を上流に向かって逃げて行く小さな姿が見えた。

女性の安全を確認した祐二は、商談時間が迫っていたので、すぐ車の乗ると、久我に向かったのだ。

あの日のことを思い出した祐二は、まず、桂離宮へ行き、水垂上桂線に取り入れ、河川敷を見ながら、スピードを落とし、久我方面に向かった。

やがて、見覚えがある木々が見えてきたが、当然のように彩世は居ない。

だが、リセットするには、あの木々の下へ行く必要がある。そこで、祐二は車を降り、堤防から河川敷へ降りようとして、下を見た。「彩世さん！」

捜していた彩世が居た。

それも、あの近寄りがたいフィギュアスケートのスター彩世でなく、祐二が助けた時と同じ姿をした彩世が居たのだ。

祐二の頭は、一瞬、真っ白になるほどの衝撃を受けた。

彩世は、自分の名を呼ばれた堤防の上の方へ振り向くと、スーツ姿の祐二が車を背にして立っていた。

彩世は、あの日に戻ったような気がした。嬉しさが彩世の目に涙を溢れさせ、祐二の姿が見えなくなる。

「祐二さん！」

彩世も祐二の名を呼び、堤防の階段を駆け上がった。

祐二は、こんな危険な場所へ一人で来たんだと注意しようとしたが、彩世の涙を見て可哀相になり

「どうしたの？」

第76話

優しく祐二は尋ねた。

「悲しかったから」

思わず彩世は本心を言ってしまった。

彩世は、祐二からの電話を待つていたが、何の連絡もないので、一度は、電話しようと考えたが、催促しているように思えて出来なかったのだ。そして、彩世は、祐二が自分の悲しそうな様子を見て、仕方なく、慎吾捜しを申し出たと考えるようになり、男はみんな慎吾と同じように、約束を破ると思って悲しんでいた。

しかし、祐二はそんな人ではないと思いたいたために、この場所へ来て、あの日を思いだしていたのだ。

祐二は、彩世の泣く様に、堪らない程のいじらしさ感じ、涙が出そうになる。

（慎吾くんに会えない淋しさを僕に逢って、その淋しさから逃れようとしているんだ）

そう考えた祐二は、今、慎吾の話をするのは酷だと思い。

「泣きたいほど、実家や高梁川が恋しいんですね。でも、ここは危険だから、二度と来ないようにして下さいよ」と、ホームシックのせいにした。

「ごめんなさい。祐二さんが命を賭け、私を助けてくれたのに、また、同じことをしてしまいました。もう、絶対に来ないと約束します」

彩世は心底から悪いと思ったのだ。

「彩世さんは、百合さんとの約束を破らないように、どんな約束も破らないから安心して居られます」

「信じて頂いて嬉しいわ」

祐二は、後で、自分が言った言葉により、彩世が縛られるとも知らずに言ったのだ。

「祐二さんは、この場所をよく通るんですか？」

貴女に逢いたくて来ましたなど言える訳がない。

「そうですね、月に一度は通ります」と何気ない振りをした。

「じゃあ、助けてくれた時も？」

「そうだよ」

「じゃあ、二度とも、月に一度だけなのに出逢ったのね」と、二人に縁の深さを強調した。

「不思議だね」

「私たち、どうしても逢う運命だったのね」

「僕は、どうやら、彩世さんが困った時に現れる運命を持つ人間のようだね」

違う、逢いたいと思うから逢えたのよと言いたい彩世。

「困った時だけって言うのは嫌よ」

彩世は魅力的な目で祐二を見上げた。

第77話

「分かりました。もし、逢えない時は、電話をします」

彩世は、祐二に嫌われているのかが知りたくて尋ねた。

「今日まで、一度も電話をしてくれなかったのは何故？」

「慎吾くんの情報がありしだい電話しようと考えていました。でも、何の情報もないから出来なかったのです。」

祐二の答えは不満だが、自分が嫌われていないことを知って安心した。

「分かったわ、でも、用が無くても逢ったり、電話してね」

また、魅力的な目で祐二を見上げる。

「彩世さんもね」といいながら、彩世から目を反らした。

「自分のことを棚に上げてごめんなさい」

これから、二人は逢ったり、電話が出来ても、彩世に婚約者がいるかぎり、二人が愛を語ることは出来ないのだ。

「今日は、僕が付いているから危険でない。どうぞ、故郷に思いを寄せてください」

彩世は、祐二の優しい言葉に涙がでる。

「でも、祐二さんはお仕事でしよう」

「日曜日は僕も休みです。だから、気が済むまで付き合いますよ」
「嬉しいわ」

言つと彩世は、先ほどまで座っていた所へ降りて行き、祐二を笑顔で招いた。

彩世の招きに応じた祐二は、

「今の彩世さんの顔は明るいですね。やっぱり、川が心を癒してくれたんですね」

彩世の心を労るように祐二が言った。

「分かります？」と答えたが、本当の訳を今は言えない。

祐二は、草の上に座ると言った。

「慎吾くんのことだけど、僕は友人知人や、仕事関係の方にも捜すように依頼していますから、必ずよい報せがくると思っています。どうか、もう少し待っていてください」

彩世にすれば、今、慎吾の話より、祐二と居る幸せを味わいたい。「はい、よろしく願います」

祐二は、探し出すのが如何に困難なことが分かっていたが、正直に言ったら、彩世が苦しむと考えすぐ、探し出せるように言った。

「ところで、彩世さんはスポーツなどしていますか？」

祐二は話題を作るために、知っていて尋ねた。

「フィギアスケートをしています」

「そうですね。僕は、子供のころ、面白半分に滑りましたが、滑るより転ぶのが早かったので、才能がないと、即、諦めました。簡単なようですが、案外、難しいですね」

第78話

「そうでしたの。でも、好きになれば簡単よ」

彩世が優しい目で祐二を見る。

「成る程ね。所で、試合はあるんですか？」

「はい、十一月の中旬にあります。テレビでも録画放送されることになっていきます」

「その試合、応援に行っていていいですか」

「ぜひ、来てください。でも、私はテレビで放送されると知っただけで、気持ちが萎縮し、良い結果がでないの。もし、失敗しても笑わないでね」

言って、彩世は恥ずかしそうな顔をした。

十六歳までの彩世は、将来のオリンピック選手と期待されていたが、十七歳になってから、急に失敗が多くなり、三位が一度で、後は五位から十位の間を彷徨っていた。

「僕もスポーツマンだから笑いませんよ。でも、スポーツには失敗が付きものです。また、嘲り、罵声などは当たり前です。一流選手になるためには、それら全てを冷静に受け止め、平常心で試合ができるようになることです」

「いつもコーチに注意されているんだけど、どうしても出来ないのよ」

「その気持ち分かるよ」

「試合が終わったら逢いに来てくれるわね」

彩世が信頼仕切った顔で言った。

「そうしたいが、出来ないんだ」

祐二が哀しそうに言つと。

「なぜなの？」

彩世も悲しそうに聞いた。

「フィギュアスケート界で、彩世さんは有名人だから、万一、慎吾

くんに見られたら、誤解される恐れがあるからだよ」

「私はなんと思われても今は平気よ」

「僕も、何を言われても平気ですが、慎吾くんが簡単に信じるでしょうか。だから、目立たないように、逢いましょう」

「他の場所で逢ってくださるのね、じゃあ、我慢するわ」

「目立たないようにと言ったのは、会場から彩世さん演技を見るということですよ」

悲しそうな彩世の顔が急に明るくなった。

「応援に来てくださるのね、嬉しい。それなら、逢わなくてもいいわ」

彩世の無防備な考えを諫めるために、もう一度、言った。

「慎吾くんのことを考えたら、僕らは表立って逢うのを控えるべきだとおもっ」

「悲しいことね」

「これも有名税と割り切らないと」

「じゃあ祐二さんは有名でないの」

「そうだよ」

第79話

「あれほど強くてモ」

「強くないけど、僕は自分の心身を鍛えるための武術なので、試合はしません」

「そうなの」

その時、堤防の上から、二人を揶揄するような声がした。

二人が振り向くと、祐二の車の横で、見るからにがらの悪そうな若者が三人、祐二と彩世を見下ろしていた。

祐二が彩世に関わるなど目で合図したので、彩世は聞こえないふりをした。

「なんとか返事をしろ」

三人が恐い顔をする。

それでも祐二が無視していると、我慢ならなくなった一人が、「なめるな！」と、叫ぶやいなや、堤防を駆け下り、祐二に殴りかかった。

祐二は相手の攻撃を避けず、相手の身体に手が触れた瞬間、男の身体は下の草の上に投げられていた。

「まだ、闘うか？警察に通報するぞ」

興奮もせずと言った。その落ち着きと底知れぬ強さを見せ付けられた男達は、先を競って逃げ出した。

「恐かったわ」

彩世が身を震わす。

「やっぱり、この場所へ来てはいけないね」

「はい、何時の間にか恐さを忘れてました」

彩世は祐二に逢いたい一心から恐れを忘れていたのだ。

その時、祐二の携帯電話が鳴った。

「はい、榎山、……そうか分かった」と言って電話を切った。

「急用ですか？」

彩世が心配そうに尋ねた。

「友人が、会ってくれと言っているんだ」

「すぐ行ってあげてください」と彩世が気を効かした。

「彩世さんを残して帰れません。まだ、少し時間があるから、僕の車でドライブしませんか。と、言っても、桂川の周辺を少々ですが」「ぜひ、お願いします」

祐二は、彩世の手を取ると、車に乗せ、すぐ発車させた。

(この暖かい手は、河原で握手した手、いえ、今、思い出したわ、この手は、助けてくれた時の手だわ)

第80話

思い出した彩世は、感激で手の震えが止まらなかった。

「この車に、僕以外の人が乗ったのは彩世が初めてなんですよ」

「初めてなの、何だか光栄に感じるわ」

光栄より、他の女性を乗せたことがないことが、彩世を喜ばせた。

「光栄とは有り難い。実は、乗せなかったのには理由があるんですよ」

「そのお話聞きたいわ」

祐二の話なら何でも聞きたい彩世である。

「じゃあ、話ますが、この話には思い入れが強いので、運転しながら話すのは危険だから、一時、車を停止します」

祐二は車を路肩に停めた。

「僕の故郷は島根県です」

祐二は経緯を話した。しかし、電車で彩世の姿を見たとは言わなかった。

「じゃあ、この車に乗って故郷へ帰るといふ目的はまだ達していないのね。なんだか祐二さんが、可哀相に思えるけど、お母さんの気持ちを考えて、仕方がないと思うわ」

彩世が暗い顔をした。

「やっぱりね。でも、そのお陰で彩世さんに逢えました。だから、人の運命なんて、少しのことで大きく変わることを知りました」

「よく分かりますわ」

彩世は祐二に逢えた運命を幸せと感じ、自然に笑顔が出た。

「いい笑顔だ。これからは何時も、その笑顔で居てください。でないと、もし、慎吾くんに会ったら、嫌われますよ」

今の彩世は、祐二との再会の喜びに酔っていたかった。だが、祐二がその喜びを奪った。

彩世が言った。

「私は、慎吾さんを捜すことが出来なくなりました」

「何故ですか」

彩世は、金丸慎吾事件を話した。

「そんな恐い目に遇ったんですか、これからは僕と一緒にいきます」
彩世は、祐二と逢えるだけで嬉しかった。

「よろしく願います」

やがて、ドライブも終わった祐二は、久世橋を渡り、蒔絵町にある、彩世のマンションの前に車に車を停めた。

「また、逢ってくださいね」

彩世が心細げに念を押した。

頷いた祐二は、車を発信させた。

祐二が願った過去へのリセットとは表面上だけは叶った。しかし、内面は、何も変わっていない。しかし、今の祐二には、これ以上の幸せを望むのはむりであった。

第81話 別れを胸に

祐二と彩世が自由に電話しあい、逢おうと思えば、何時でも逢えるようになる、皮肉なもので、十一月早々、東京の友人から、慎吾の情報を得たので、彩世に電話した。

「はい、彩世です」

待っていたような彩世の返事。

「慎吾くんらしき学生のお知らせがありましたよ」

「それは、本当ですか」

祐二への愛が高まったとはいえ、慎吾の消息が分かったと聞かされると、会いたいとの思いで胸が締め付けられる。

「僕が受けた感じから、間違いないと思います。でも、期待はしないでくださいよ」

「はい」

「住所は、東京の渋谷区、松濤町のマンションです。行ける日を教えてください」

「明後日の日曜日、でも、祐二さんに予定がありましたら、次の日曜日でもいいです」

「僕には予定などないです。じゃあ、明後日、尋ねて行きましょう」
冷静を装い、事務的に彩世と逢う場所と時刻を決め電話を切ったが、祐二の心の中は、

（もし、慎吾くん、否、慎吾くんに間違いない。その慎吾くんが彩世さんが会ったときが、僕と彩世さんの別れの時だ）

彩世が慎吾を捜した時、必ず祐二は傍にいる。そして、不要の存在になるのだ。

その時、祐二は何も言わず、その場から静かに姿を消そうと考えていた。

日曜日午前八時、京都の改札口。

祐二が改札口へ行くと、彩世が白いTシャツの上に黒のカーデガ

ン、紺のジーンズ姿で立っていった。

黒のカーデガンを脱ぎ、ヘヤーバンドを付ければ、高梁川で写生した時の姿になる。

彩世がこの服装を選んだのは、慎吾に分かりやすいためと慎吾が心変わりしていたら、その時、別れるのではなく、新見駅で慎吾を見送った時を別れたことにし、新しい人生を歩こうと考えたのだ。無論、祐二とである。

彩世の考えを知らない祐二は、彩世が目立たない服装をして来たのは、世間の目を気にしているんだと考え、出来るだけ、ただの、友人として振る舞うことにした。

「お早よう、もう、来ていたんですか」

「はい、お待ちしていました」

「昨夜は、よく眠れましたか」

「はい」

彩世は、慎吾に会えるときめきと、祐二を失うかもしれないという不安で、少しか眠れなかった。

「それは良かった」

第82話

祐二も、彩世を失う辛さで、あまり眠れなかった。

「乗車券を買いに行つてきます」

「昨日、僕が買いましたから、買わなくてもいいですよ、そつだ、コーヒーでも飲みませんか」

「はい、お付き合ひさせていただきます」

二人は、喫茶店へ行つたが、複数用の席が空いていなかった。

「仕方がない、電車内のコーヒーを飲みましょうか」

「それがいいわ」

二人はプラットホームに上がった。

東京行きのプラットホームには、乗り降りする人で、賑わつていたが、その人の間を縫うように、ハトが餌を捜していたが、やがて、彩世と祐二の間を平然と通つて行つた。

そこへ、東京行き、のぞみ号が入ってきた。

乗客は行儀良く列を作り車両へ順番に乗る、祐二は彩世を前にして最後尾から乗り、指定席に座つた。

「落ち着きましたか」

「ええ」

答えながら彩世は祐二の顔を見る。

「少し、眠たそうですね」

彩世は、腫れぼつたい顔を隠すように俯いた。そこえ、社内販売の女性が商品を積んだ手押し車を押しながらやってきた。

「彩世さん、コーヒーは何を」

「ホットをお願いします」

祐二が販売員を呼び止めて注文した。

「ホットコーヒーを二つください」

祐二が注文すると、すぐ、コーヒーが祐二の手に渡された。

二人は、暖かいコーヒーで眠気を覚ました。

「間もなく、慎吾くんに会えますね」

「ええ、何だか、恐いです」

祐二は、彩世と自分がただの友達に見えるように気をつけたが、誰の目にも、仲が良い恋人同士に見えていた。

「品川駅まで、まだ、二時間もありませんか」

彩世にしてみれば、今は祐二と一緒に電車に乗っているが、もし、会いに行った男性が捜している慎吾なら、帰りの電車に祐二は居ないのだ。

「眠れないの、どうぞ、祐二さんは寝てください」

彩世は、祐二と出来るだけ長く居たかった。そして、この思い出を胸に仕舞って置きたかったのだ。

第83話

「実は、僕も眠れないです」

祐二も彩世と同じ心境だった。しかし、どうしても、慎吾に会った時のことが頭に浮かび、話は途切れがちになり、やがて、眠る振りをして、先のことを考え、慎吾でなければよいのと思う祐二だった。

今日で別れと思う二人にとって、二時間はあまりにも短く、何時の間にか品川駅に着いていた。

「やっと着きましたね、さあ、元気を出して、慎吾くんに会いに行きましょう」

二人は、のぞみ号を降り、山手線に乗換え、渋谷に向かった。

「目黒駅を通り過ぎたから、間もなく、渋谷ですね」

「何だか胸騒ぎがするわ」

彩世が心細げに言った。

「胸騒ぎでなく、不安なんでしょう」

「分からないと、兎に角、恐いわ」

言っている間に渋谷駅に着いた。

「タクシーに乗りますか」

祐二が彩世に尋ねた。

「いえ、近いから歩いて行きましょう」

二人は、道玄坂を上がって 松濤町へ着いた。

東京の大学で四年間も学んだ祐二に、松濤は馴染み深かったので、すぐ、慎吾らしき学生が住むマンションを捜しだし当てることできた。

都会のマンションは、大抵、セキュリティシステムが設置され、入るのが困難だが、このマンションは、建物が古く、勝手にマンション内へ入ることができた。

マンション一階には、各部屋の住人用の郵便受けが設置され、そ

の中に、渡辺慎吾の名があった。

祐二と彩世はエレベーターで五階へ上がり、祐二が部屋のインターホンを押して言った。

「渡辺慎吾さんはご在宅ですか」

本来は、彩世がインターホンを押し、中の住人と言葉をかわすのだが、もし、捜している慎吾でなかったら、祐二が慎吾を捜していることにしたのだ。そして、彩世が慎吾の顔を見て、本当の慎吾なら、彩世が会いにきた事情を話すことにしていたのだ。

「はい、どなたですが？」中から声が聞こえた。

祐二が、彩世の顔を見ると、感極まったのか、今にも泣きそうな顔をしていた。

「慎吾くんだね」

彩世に確かめると、彩世が頷いた。

「樫山と言つものですが、ぜひ、渡辺さんにお会いしたくてきました」

「少しお待ちください、すぐ、出て行きますから」

第84話

祐二は、出てくるのを待ちながら思った。

（迷惑がらずに、この礼儀正しい対応、彩世さんが愛した慎吾君に間違いない。この慎吾くんなら、きっと、彩世さんを幸せにしてくれるだろう）

思うと同時に、祐二は、哀しみに打ちのめされた。

待つ間もなく、ドアが開いて、一人の学生が出てきて言った。

「お待たせいたしました。ところで、ご用件は？」

祐二が彩世を見ると、祐二の背に隠れたのだ。

「僕は京都の檜山祐二というものです」

名刺を渡し、

「僕の会社のお得意さんから、慎吾くんとおっしゃる学生さんを捜してくるよう頼まれ、貴方に会いに来たのです」

「そうでしたか、僕がその慎吾」

「残念ですが違いました。失礼なこと致し、誠にすみませんでした。心からお詫びを申し上げます」

「京都から、わざわざ来られたのに残念でしたね。どうか、お気を落とさずに、東京見物をして帰ってください」

「有難うございます。じゃあ、失礼します」

祐二は心の中で、慎吾がこの学生なら、素直に彩世の婚約を認める、等と、考えていた。だがその余裕は、今後も彩世と会える保証があったからだ。

逃がした魚は大きく見えるように、慎吾でないと分かった時の彩世の失望は大きく、出せるものなら、声を張り上げて泣きたかった。しかしその反面、祐二が学生と対応する姿を見ると、頼もしく、この人を信じ、愛していれば、何時か幸せになれるような気がし、泣きたい気分も消えていた。

「東京見物をしますか？」

「騒がしい場所へは行きたくないです」

「じゃあ、皇居の周りを散歩しますか？」

「賛成だわ」

祐二と彩世は、皇居の周りを散歩した経験から、今は、最も適した場所だと思った。

タクシーで皇居前へ行った祐二と彩世は、早速、歩き始めた。

皇居周辺には、多くの人たちが、散歩やジョギングをしていた。

その人達の中へ、祐二と彩世は入って行った。

「声は慎吾くんの似ていたんでしょ」

突然祐二が尋ねた。

「ええ、そっくりだったわ」

「それなのに慎吾くんではなく、残念だったね」

「ええ、でも覚悟していたから平気よ」

第85話

彩世の顔に明るさが戻った。

「今後のことを考えると、その覚悟が必要だね」

「そうよ、終わったことは、すぐ、忘れるように努めているのよ」

「流石、スポーツ選手だね」

「じゃあ、祐二さんもすぐ忘れるの？」

「うん、でも、スポーツだけだよ」

「私は慎吾さんに会えない時だけよ」

彩世は、祐二に忘れやすい女と思われないように、言い訳をした。
「そうだ、ジョギング、いや、追っかけっこしながら、皇居を一周
しませんか、無論、最初は僕が鬼だけだね」

彩世の失望を早く取り除くには、運動、それも、童心に帰る運動
が適していると祐二は考えたのだ。

「いいわね」言っと彩世は駆け出した。

「待て！」

追い掛ける祐二。

「いやよ」

早く、捕まえて欲しいと願いながら彩世は走る。

二人は、皇居の美しい木々の緑やお堀を横目に見ながら、楽しそう
に鬼ごっこをしていたが、何時の間にか、皇居を一周していた。

祐二が立ち止まって、彩世に言った。

「何も考えずに走って楽しかった」

「私もよ」

何も考えずに走ったのは嘘。現実には、相手の愛を得られない二人
は、鬼ごっこの中で、相手の愛を掴まえようとしていたのだ。

「疲れたでしょう」

「少しだけ」

二人の横を、皇居一周する人たちが、次から次へと現れ、互いに

軽く会釈したり、声をかけて通って行く。

「じゃあ、帰りましょうか？」

祐二が言うつと

「はい」と答えた彩世だが、帰れば祐二との別れがあり、その後は、慎吾に会えなかった失望と、祐二への愛に苦しむ自分が待っているのだ。

もつと、一緒に居たいと言えずに、彩世はお礼を言った。

第86話

「今日は、私のために、東京までお付き合ひして頂いて有難うございました。でも、結果が無駄になって、本当にすみませんでした」

「今日からは、有難うや、すみませんは、言わないでください。なぜなら、僕が慎吾くん捜しを申し出たんですからね」

「分かりました。これからは、祐二さんのご好意を有り難くお受けします。あつ、また言ってしまったわ、御免なさい」

彩世は何が何だか分からなくなっていた。

「でも、お礼を言われるのは、いい気分ですね」

「まあー」彩世は呆れていた。

「良き明日を信じて、待ちましょう」

「そうしますわ」

話している間に、東京駅に着いていた。

祐二も、彩世と初めての遠出、その間、恋人同士のように、肩を寄せ合った幸福な気持ちは、一生、忘れることが出来ない喜びだった。

のぞみ号に乗った彩世と祐二は、電車が永遠に停まらないで欲しいと思っていた。

「間もなく、京都駅です」

車内放送が、その夢を破った。

「着きましたね」

祐二が名残惜しそうに言った。

「ええ」

彩世は別れが悲しくて、言葉少なく答えた。

「疲れたでしょう。車でお送りますからね」

「嬉しいわ」

やがて、彩世を乗せた祐二の車が、彩世のマンション前に書いた。「今日は、ご苦労さんでした。また、情報が届いたら、一緒に行き

ましよう」

「お願いします」

淋しそう頷いた彩世は車を降りた。

「さよなら！」

手を振る彩世の顔が悲しみに覆われていた。

今日の祐二は、彩世と慎吾が出合っても、自分は関わりの無い第三者だから、何の動揺もなく、二人の出会いを冷静に見ていられると思っていたが、彩世の感極まった様子を見たときの失望感と哀しみは祐二の想像や覚悟を遥かに越えていた。

そのため、立ち会うのことをよそうと考えたが、もし、立会を断れば、即、彩世との別れが待っていると思うと、祐二に断るという選択肢は無いのだ。

第87話 受けられない幸せ

慎吾の情報が次々と得られ、彩世は試合と慎吾を確認することに追われていた。

以前、会った相手の中には、慎吾の声とそっくりな人がいた。彩世はその声を聞き、感極まって、思わず泣いたことがある。

そのことを忘れようと努めた彩世だったが、あの時に受けた衝撃を思い出すたびに泣いていた。

二人の男を同時に愛する、それも婚約者が居ながらである。彩世は、日々、罪悪感に苛まれていた。

その苦しみを払拭するために、フィギュアスケートに打ち込もうと考え、今までにない猛練習をしていた。しかし、夏休み期間の練習不足が重なったのか、稽古中にアキレス腱を切る不幸に見舞われ、十一月の半ばから、試合は無論、練習さえもできなくなった。

そして、慎吾の情報があっても、祐二に同行できなかった。当然のごとく、祐二と逢う機会も少なくなり、彩世の心が閉じこもりがちになっていた。

そして、祐二に逢えない辛さから、彩世の愛は、慎吾から祐二へと傾き、一層の罪悪感に苛まれた。

彩世は、その苦しみに堪えられず、祐二に慎吾との婚約を破棄すると伝えたかったが、

「彩世さんは、約束を絶対に守るから安心」と言った祐二の言葉を思い出し、伝える勇氣失ってしまった。

月日の断つのは早く、サクラの花が咲き始める三月下旬になっていた。

土曜日の朝、祐二の携帯電話が鳴った。相手が自分の知らない人なので、

「はい」と、だけ答え、相手の出方を待った。

「榎山祐二さんですか」

祐二は慎吾の情報と思い。

「慎吾くんの情報ですね。有り難うございます」と言うと、相手が違っていたのか、少し沈黙した後

「初めまして、自己紹介をさせていただきます。私はいつも貴方のお世話になっている天見彩世の父親でございます」

祐二は予想もしない相手に驚いた。

「彩世さんの、お父さんですが、初めまして」

「三年前、彩世の危ない所を助けて頂いた上に、今は、慎吾くんを捜すために、日々、ご助力を頂いてると聞いています。それにも関わらず、今日まで、一言のお礼も申し上げなかったことをお詫びいたします。遅すぎるでしょうが、改めてお礼を申し上げます」

祐二が何時も、慎吾を捜しているとしり、父親は、有り難さに感極まっていた。

「いえ、当然の事をしているだけです」

第88話

「もつと、早くお礼を申し上げたかったです、彩世がご迷惑だからと電話番号を教えなかったのです。しかし、家内が彩世の部屋を片付けていると、貴方さまの電話番号を書いた手帳を偶然見付けたために分かったのです」

失礼した理由を述べた。

「いえ、こちらこそ失礼しました。彩世さんから、度々、ご両親がお礼を言いたいから住所と電話番号を教えてもいいかと聞かれたのですが、お礼を言われる程の事をしていないので断っていました。どうか、お気遣いは無用に願います」

「有難うございます。今日まで何のお礼を申し上げなかった私どもなのに、また、厚かましい事をお願いするのは、汗顔のいたりですが、もし、今、お時間がございましたら、私どもに会って頂けませんか」

「ええ、何時でもいいですよ。ところで、願いとは何でしょうか？」

「彩世のことです」

驚いた祐二は、思わず大きな声で尋ねる。

「彩世さんがどうしましたか？」

「はい、でも、電話では申し上げられないので、お会いした時にお話します」

「分かりました、すぐ、行きます、場所は高梁市です」

「いえ、妻と一緒に京都へきています」

今朝、彩世の両親は、京都の祖母が体調を崩しているを理由に、彩世一人を家に残して京都へ出てきたのだ。

理由は、彩世に内緒で祐二に会いたいために。

二十分後、祐二は彩世の両親が待っている駅改札口へきた。電話で互いの服装や特徴を知らせ合っていたため、祐二にはすぐ分かった。

「天見さんですね」と。祐二は一応尋ねた。

「はい、お初にお目にかかります天見でございます」

夫が言うと妻が目礼した。

「私は、檉山祐二です、どうかよろしく願います」

「改めて自己紹介をいたします。私は天見正雄と申します。そしてこれが妻の操です。どうかよろしく願います」

天見夫婦は祐二に頭を下げ挨拶した。

「こんな所で話もなんですから、駅ビルに静かなティールラウンジがありますので、そちらでお茶でも召し上がられませんか？」

祐二の誘いに正雄が言った。

「有難うございます。せっかくのお誘いを申し訳ありません、実は僭越ながら、私どもが時々利用しております料亭を予約しておりますので、よろしければ、どうか、お越し願えませんか？」

祐二は料亭など自分には分不相応ではと思えたが、感謝のつもりであろう天見夫婦の好意を、無下にすることもできず。二人の好意に甘えることにした。

第89話

席に着くなり、正雄が畏まった態度で、彩世が助けられた礼を述べた。「どういたしまして、それより、ご用をおっしゃってください」

「分かりました。榎山さんをお願いしていいものかと悩みましたが、私たちの力で解決出来ないで、榎山さんのお知恵を拝借したくてお願いに上がりました」

余程、言いにくい事柄だと察した祐二が助け船をだす。

「私で出来ることなら、何でもします、どうか、遠慮せずに言ってください」

夫妻は、ほっとした表情になり。

「では、ご好意に甘えます」正雄が話します。

「今、彩世は春休みで高梁市へ帰ってきました。しかし、毎日、自分の部屋に閉じこもり、塞ぎ込んで私どもとも話をしません。体も以前より痩せ衰えています。このまま放置していたら、重い病気になり死んでしまうかもしれないのです。どうか、彩世を助けてください」

彩世は祐二への愛と、慎吾に裏切らとの思い、そして、大好きなフィギュアスケートの試合は無論のこと、練習も出来なかったための心労により、心の病に罹ったのだ。

「それは本当ですか！」

「はい」

「しかし、半月前に逢った時は元気でしたよ。そして、土曜日毎に電話していますが、声は明るく元気でした」

「それは、榎山さんの前だけだと思います」

祐二はその言葉に動揺を隠せなかった。

自分は彩世の苦しみを見抜けず、却って無理をさせていたのかもしれないのだ。

「迂闊にも気付きませんでした。病状が悪化したのはいつからです

か？」

「夏が終わった頃からです。最初は日時が解決してくれるだろうと軽く考えていましたが、最近になってから、急に悪くなりました」（去年の夏の頃の彩世さんと今の彼女は、確かに変わった。今も明るく元氣に見えるが、あれは僕に心配をかけまいと考えての芝居だったのかもしいない）

祐二は、彩世の気遣いに、心が苦しくなるほどの哀れさを感じた。もし彼女が今、目の前にいたら、抱きしめ慰めていただろう。

だが、彼女に祐二が触れることは叶わない。

出来ることは慎吾に会わせ彼に彩世を託すこと以外にはないのだ。「彩世さんがそんな状態なら、早急に慎吾くんを捜さねばなりませんね。必ず見付けだします」

「ありがとうございます」

祐二に礼を言う正雄の態度は言葉とは裏腹にあまり嬉しそうではなかった。

そんな正雄の横から突然妻の操が口を出して来た。

「ねえ、あなた、あのことを榎山さんにお願いしましょう」

だが正雄はためらいがあるのか、操に催促されてもなかなか口を開こうとしない。

第90話

見兼ねた操が

「榎山さん聞いてください。私たち夫婦は、彩世を元の元気な姿に戻そうと色々と試みましたが、効果がありません。そこで考え付いたんですが、」

核心を話そうとすると、正雄が操の話を止めた。

「それ以上言ってはいけない。あまりにも不謹慎だ」

操はそんな正雄に反論した。

「この話は、あなたと何度も話し合って決めたんでしよう、彩世の為にはこれしかないって」

話が複雑そうなので、祐二は口に挟まないようにした。

「しかし、それでは、あまりにも榎山さん対してして無礼なことだよ」

「分かっているわ、でも、お願いするしかないのよ」

祐二は、自分の名前が出たため

「僕は、彩世さんのことで、どんなことを言われようとも無礼な等と思いません。どうか、遠慮なく言ってください」

操は祐二の言葉に力を得てかねてからの考えを話だした。

「彩世は、榎山さんの話をするときは、とても、明るく楽しそうに話すんですよ。ですから、今の引き籠りのような状態も、榎山さんの助けがあれば回復すると思っっています。こんな話は榎山さんのご迷惑になるかもしれませんが、もし、榎山さんに付き合っている女性がいないのであれば、彩世と付き合っていたきたいんです。親ばかなのは分かっています。でも彩世はかわいいたった一人の娘です。その為ならなんでもしてやりたいんです。榎山さんの人柄は、彩世から聞きこれ以上ないすばらしい方と思います。私たちの望みとしては、榎山さんが彩世と結婚して天見酒造を継いでいただけたらと考えているのです」

操は縋るような眼差しで祐二をみた。

「妻が勝手なことを言ってますみません。でも、これが私たちの願いですから」

正雄も真剣な表情で祐二に決意を語った。

祐二は思いもかけない申し出に天地がひっくり返るほどの衝撃を受け、言葉が出ない。

操は黙ったままの祐二の手をとり必死で懇願した。

「お願いです。彩世のために」

祐二はやつと言葉をしぼりだした。

「実は僕も彩世さんに好意を寄せています。ご両親に信頼していただいた上、彩世さんとの結婚まで考えていただき、ありがたいと思っています」

祐二が彩世との結婚を承諾したものと夫婦の顔に喜びが現れた。

「天見さんのお言葉に僕は天にも昇る心地ですが、それには今はお応えできません」

「どうしてですか？」

夫婦は落胆したが、まだ希望はあると祐二の言葉を待った。

第91話

「仮に、結婚したとしても、彩世さんは僕を見れば慎吾くんを思い出し、僕の声を聞けば慎吾くんの声を思い出すでしょう。その苦しみは、今日よりずっと大きいはずですよ。なぜなら、彩世さんは僕と一緒に慎吾くんを捜したからです。彩世さんの完全回復を願うなら、慎吾くんを探し出すことが先決です。彼を捜し出せば、結果如何に関わらず、元の彩世さんに戻ります」

「分かりました。樫山さんは、彩世の本当の幸せを考えていてくださる。だからこそ、私たちの願いを聞いてくださらなかったのだ。でも、全てを諦めた訳ではありません。その時期がきたらお願いに上がるかもしれない。その時はよろしくお願いします」

父親が未練げに言った。

彩世の身を案じて、祐二に助けを求めて京都まできた操や正雄をそのまま帰す訳にはいかない。また、彩世の病気が何より心配になった祐二は、

「もし、お邪魔でなかったら、明日、彩世さんに逢いに行きます。行っても、彩世さんの病気が治るかどうかは分かりませんが、彩世さんが心配でなりません」

彩世の両親は、自分達の望みが叶えられず、失望していたが、明日、逢いに行くと言われ、また、可能性が出来たことに、希望を持った。

「ぜひ、おいでください」

「はい、でも、ご両親にお願いがあります」

「なんででしょうか。私達にできることなら」

操が心配げに行った。

「今日、僕がご両親と会って話したことは、絶対に誰にも話さないでください。例え、彩世さんにもです」

「そのお心使い、まことに有難うございます」

彩世の両親は祐二の細やかな配慮に心底感激した。

「納得いただいたので、気楽に彩世さんと逢えます」

祐二は明るくいいながらも心の中で彩世の両親に誓っていた。

（ご両親が僕をこれほどに見込んでくださったのだから、僕は期待に背かないようにがんばらねばならない。僕に彩世さんと結婚してくれなどと言っていただけ、ひとときでも夢を与えてくださった。この夢を大切にします。本当にありがとうございます）

食事も終わり、祐二は彩世の両親を京都駅へ送った。

両親は心残りがするのか改札口を通っても、何度も振り返り手を振っていた。

祐二は、その姿が見えなくなると、すぐ彩世に電話を入れた。

「はい、天見です」

何時もの彩世の声が聞こえてくる。

祐二は両親の話がなければ彩世の苦しみになど、気がついてなかったのだ。

自分の行動で彩世が少しでも楽になればと彩世に用件を切り出した。

「急なことで申し訳ないんですが、もし明日彩世さんに差し支えがなければ、高梁市の観光案内をお願いしたいのです。以前から行きたいとは思っていたのですが、なかなか機会が無かったので、お願いできませんか」

「ええ、もちろん喜んでご案内します。でも私もあんまり詳しいわけではないので、失望しないでくださいね」

「そんなことありません。彩世さんの行ったことのない場所に行ってみるのもいいかもしれませんね」

「お待ちします」

彩世の声が喜びに震えていた。

彩世が少しでも気晴らしになれば、と思ったのだが、祐二にとっても、これが彩世とのデートのようなものなんだと気がつき、祐二の気持ちも弾んだ。

翌日、祐二はやくも号に乗って高梁市へ向かった。

電車が高梁市に入ると、高梁川の沿道やが、サクラの花で飾られていた。

第92話 愛哀の故郷

備中高梁駅に着いた祐二が、改札口を出ると、サクラの花の匂いが微かに立ち籠め、その中に、彩世がサクラの精のように立っていた。彩世の美しさに変わりはないが、今にも倒れそうなほどの衰弱ぶりである。祐二は、彩世に駆け寄り、その身体をしっかりと抱きしめそうになった。だが、出来ない。

彩世には、慎吾という婚約者がいるのだ。

「有難う」

祐二は、彩世の目を優しく見つめる。それが、祐二が出来る彩世への愛である。

「来ないのかと心配したわ」

彩世の目は涙に濡れていた。

「彩世さんとの約束は、死んでも破りませんから心配しないでください。でも彩世さん大丈夫ですか？案内はまた今度に、そのへんでお茶でも」

彩世の痛々しい姿を見て、祐二は観光案内など無理だと思った。

そんな祐二の気遣いを感じ彩世は言った。

「観光巡りをする前に、私をお願い聞いてくださる？」

「彩世さんの願いなら、何でも聞き届けますよ」

「有り難いわ、じゃあ、祐二さんと私が初めてお逢いした河原へ行きたいのです」

「喜んで御供します」

祐二が運転すると言ったが、彩世が案内するのは私の役目と言って、河原へ行った。

「ここが、初めて祐二さんとお逢いした場所よ」

「そうだったね」

「お伽話を、もう一度、聞かせてください」

彩世は目を閉じた。

彩世が祐二をこの河原へ誘ったは、祐二からお伽話を聞いた日を再現し、それ以前のことを無にしたかったのだ。慎吾を忘れるために。

しかし、この考えは、彩世の苦し紛れの手段でしかない。

お伽話を聞き終わった彩世は、心の整理がついたのか、急に元気になった。

「お伽話の少女やユリに比べ、私には、元気な両親と祐二さんが居るから幸せよ。だから、もう泣かないし、病気などしないわ。私を元気づけるお伽話を聴かして頂いて、有難うございました」

「お役にたててよかったです」

「私のお願いはこれでお仕舞よ。今度は祐二さんが言ってく下さい」
彩世の身体を考えれば、観光巡りより、一カ所で居られる方が良
いと思った。

「そうだね。僕はこの町が好きです。だから、この町を一望できる所へ行きたいと思っ
ていますが、そんな場所がありますか」

「それなら、ループ橋に小さな展望台ありますわ」

「ループ橋？」

「あの山の麓から頂上付近の道に架けた、ループ状の橋です。見えるでしょう」

彩世の細い指がループ橋の方角を示す。

第93話

「展望台は見えないけど、橋は見えますね。じゃあ、連れていってください。いや、僕が運転しますから道順を教えてください」

「祐二さんは、私の大切なお客様だから、私が運転します」

彩世は病気などなかったかのように、明るく微笑みながら車を出した。

やがて、高梁大橋を渡る前に着いたとき、信号が黄色から赤に変わった。車を停車させ、信号が変わるのを待っていると、自転車に乗った少女が車に向かって。

「今日は」といいながら、手を振って通りすぎた。

祐二はすぐに、以前高梁市を案内してくれた少女だと気がついた。

彩世と祐二が同時に手を振った。しかし、彩世は祐二の行動に不審を抱かず、少女が誰なのか説明する。

「さっきの自転車の少女はね、すみれさんと言って、ユリの妹さんなの」

(やはり、そうだったか)

思っている間に、少女は小道に入ってしまった。同時に信号が青になり、彩世は車を発車させた。

祐二は、彩世に隠し事をしては良くないと思い、すみれとに關係を話そうとしたが、彩世の心を混乱させるかもしれないと考えてやめた。

やがて、車は十分ほどで展望台に着いた。

彩世が言ったとおり、車を三台も置けば満車状態になるほど小さな展望台なので、座る椅子やベンチもない。

祐二は、高梁市の中心部を一望しながら言った。

「緑の山と裾野に咲くサクラの花、町の中を流れる高梁川、優しい人たち、そして、心に染み込む故郷の匂い、僕にとって、高梁市は、愛哀の故郷です」

祐二の言葉に感激した彩世が言った。

「愛の故郷、とても素敵な言葉ね。私が愛する故郷を愛してくださいって嬉しいわ」

彩世をどんなに愛しても、彩世の愛を得られないばかりか、愛しているふりさえ出来ない祐二の哀しみを知らない彩世は、素直に喜んで。

「彩世さんは、この展望台へ来たことがありますか？」

「いえ、都市部での生活が多かったもので」

「じゃあ、こんな素晴らしい景色があるとは、想像も出来なかったでしょうね」

「ええ」

「町に向かって、手を楕円形に広げて見てください」

祐二は、大切な物を抱くような手を広げた。

「こうなの？」

「そうです、じゃあ、手の間から町を見てください」

彩世は祐二の言う通りに景色を眺めた。

美しい景色を自分が抱いているような錯覚にとらわれる。

「まるで、お伽話の絵本を見ているようだよ」

彩世が夢見るような瞳で応えた。

「そうですよ」

第94話

「ええ、私はこの町に生まれたのね。とても誇りに思うわ
しばらくの間、二人は景色をみていた。

小鳥がサクラの花を啄むのを見た彩世がふと、気付いたように

「お腹すいていないですか？」

「忘れていたけれど、言われたので急にお腹が空きました」

「じゃあ、食べましょう」

「ええ、じゃあどこか食べるお店を捜しましょうか」

祐二の言葉に彩世が車から弁当を取り出した。

「今日、お弁当を祐二さんといただくこうと思って作って来たんです。
お口にあえばいいんですが」

そう言つと、彩世は嬉しげに、展望台にシートを敷き、お弁当を
並べた。

「彩世さんのお弁当が食べれるなんて、最高に幸運ですよ」

「祐二さんは大げさですね」

「ぼくはこれでも小さいと思いますよ」

食べ終わると、彩世は後片付けしながら

「祐二さん」

恋人に話しかけるように言った。

「何ですか」

祐二も柔らかい語調で尋ねる。

「お休みの日は何をしてらっしゃるの」

「柔道や空手の練習かな」

「怪我とかしない？」

彩世が心配そうに聞く。

「少しでも気を緩めるとしてしうけどね」

「それ以外はどう過ごしてるの」

彩世はそれとなく恋人の存在を確かめた。

「男一人わびしく映画やスポーツ観戦ですよ」

祐二の言葉に彩世は希望を持った。

この様子なら恋人はいないようだ。

そんな思いにとらわれていると、高梁市を見渡していた祐二が声を上げる。

「彩世さん」

「なに？」

彩世が祐二をみると、祐二の指が下方をさしていた。

「彩世さんが写生していた河原が見えるよ」

「本当？」

彩世は立ち上がって祐二の指差す方向をみる。

「ええ、そうだわ、あそこだわ」

第95話

「肉眼なら、彩世さんの姿が米粒程にしか見えないけど、望遠鏡を持っていたなら、写生している彩世さんの姿がはっきり見えますね」
「今日まで誰かに自分が写生している姿を見られていたなんて考えもしなかったわ、だから平気でいられたけど、急に恥ずかしくなってきたわ」

「恥ずかしがることはないですよ。出来ることなら、いや、絵を上手に描けるなら、高梁川で写生する彩世さんの姿を描きたい。絵の題名は、彩世の河原、どう？ ぴったりでしょう」

彩世は一層、顔を赤らめ、

「いやよ、なお恥ずかしくなってきたわ」

「そのくらい素敵だと思っただけです」

「もう、からかわないで」

彩世は怒った振りをする。

「すみません」

だが、祐二はいくら誉めても誉めたりないと思っていた。

「高梁川は彩世さん、彩世さんは高梁川」

「それはどういう意味？」

「どちらも美しいからです」

彩世が恥ずかしそうに俯いた

「高梁川でふと思いだしたけど、河原には、カワラナデシコの花が少ないから、ユリさんは淋しい思いをしているでしょうね」

「そう思うわ。でも、私が子供の頃は沢山咲いていたのよ」

「なぜ、少なくなったんだろう」

彩世が急に思い出したように言った。

「そうだ、私がナデシコの花を探しているのを見て、アユ釣りのおじさんが言うのよ、ナデシコの故郷が破壊されているからだ」と
「ナデシコの故郷？」

「実は、私も分からなかったので尋ねると、おじさんが答えてくれたわ。カワラナデシコの故郷は山だそうよ」

「本当に？」

「そうよ、そのおじさんの住まいは岡山市ですけど、生まれ故郷は徳島県の吉野川上流の山地だったそうよ。おじさんが子供の頃には、山地の崖や明るい場所に、ナデシコの花が、一杯咲いていたのに、毎年、その数が減少していった。その減少に比例して、吉野川の河原のカワラナデシコの数も減っていったそうよ。おじさんは、この現象から、平地や河原で生息するナデシコは、山で実った種子を洪水などが、平野や河原へ運んだと推測して、カワラナデシコの故郷は、山だと考えているそうよ」

「成る程ね、故郷が山であると言う真偽はともかく、ナデシコの減少は、自然が破壊されていることに相違ないだろうね」

「怖い、もし、それが真実なら、数年後、河原にナデシコの花は咲かなくなるのね」

第96話

彩世が泣きそうな顔をした。

「心配しなくてもいいよ」

「どうして？」

「河原にナデシコの種子を撒けば良いのです。想像してみてください。あの河原がカワラナデシコの花で飾られているのです。その美しさは、計り知れないと思いますよ」

「そうね、楽しみだわ」

「種まきするときは、彩世さんも手伝って下さいよ」

「喜んでお手伝いしますわ。きっと、ユリが喜ぶわ」

彩世は河原に広がる花を想像しその時を楽しみに思った。

「彩世さん、二人で祈りませんか」

突然祐二が言った。

「何をですか？」

「慎吾くんが探し出せるようにです」

彩世は今は慎吾のことを考えたくなかった。

「そんな、厚かましいお願いはできないわ」

「出来ますよ」

「でも、誰にお祈りするの？」

「高梁川」

彩世は素直に頷いて祈った。

「所で、彩世さんの住まいは？」

「家は見えないけど、あの辺りよ」

彩世が花水木通り方面を示した。

「駅に近いですね」

「ええ、その向こうには、高梁市の観光名所が沢山ありますから、案内しますわ」

「残念だなあ、今日は、もう時間が無いので、次の時にします」

「そうね、じゃあ、できれば両親に会って欲しいんです」

彩世が継るように言った。

「今回は時間がないので、こんど、ナデシコの種蒔きに来る時には、必ず、お伺いしますと、伝えてください」

祐二は、彩世の両親に会うと、初対面で無い事がばれ、見舞いにくるのが仕組まれたことだと彩世に誤解されると、病気が悪化する恐れがあると考え、断ったのだ。

「はい、残念ですが、そう伝えます」

彩世は残念そうな声で答えると、祐二を備中高梁駅へ送っていった。

祐二が改札口を入ってから振り向くと、彩世が、やつれた顔に、精一杯の笑顔を作っていた。そのいじらしい様に、祐二は、思わず、後戻りをしようとする自分の心に、鞭を打ち、電車に乗った。

第97話さらば、哀しみよ

祐二は、彩世の病気を見舞って気付いたことは、孤独感が彩世を病気にさせたのではないかということだった。

そこで、時間が許す限り、彩世と逢い、電話をし、彩世が孤独感を持たないように努めた。それが効を奏したのか定かでないが、彩世は元の元気な姿を取り戻し、七月に行われるチャティーのためのアイスショーに出たいと考えるようになった。

しかし、足の負傷や病気などにより、十分な練習ができなかったため、出場が危ぶまれていたが、猛練習をした結果、出場が可能になった。

やがて、試合の前日がきた。祐二は、彩世の身体を心配して電話をした。

「体調はどうですか？」

「絶好調よ」

彩世が嬉しそうに言った。

「それは良かったね。でも、僕の経験から、調子の良い時ほど、怪我を起こす確率が高いので、用心してくださいよ」

「はい、気を付けます」

「慎吾くんが応援に来てくれたらいいのにね」

「ええ、でも、今日は、何も考えずに一生懸命頑張るわ」

「ごめん。試合に集中しなければならぬ時に、余計なことを聞いてしまいました」

「いいのよ」

「会場から観戦しますから、思い切った演技をしてください」

祐二は電話を切った。

翌日、祐二は彩世を応援するために、誰よりも早く会場へ入ったつもりだったが、すでに満員になっていた。

やがて、観客たちを、現実から夢の世界へ誘うように、美しい演

技がはじまった。選手の華麗な演技に対して、観客は惜しみない拍手を贈る。しかし、今日は、氷の状態が良くないのか、多くの選手が転倒していたので、祐二は彩世も転倒するのではないかと、心配していたが、彩世は、その心配を撥ね除けるように、素晴らしい演技をした。

彩世の演技を見ながら祐二は考える。

(このシヨウは、近畿圏のテレビが放映するだろう。また、スポーツ紙が、出場する選手の顔や名前を掲載していた。もし、慎吾くんが彩世さんを愛しているのなら、この会場へ来るべきだ。そして、応援するべきだ。一ヶ月後には、慎吾さんと彩世さんが婚約してから一年になる。だが、今日まで、何の音沙汰もなく、連絡もしてこない。婚約者としてあまりにも無責任すぎる)

祐二がそのようなことを考えている時、彩世が最後のジャンプをした。だが、飛び上がることが出来ず、前につんのめるようにして倒れた。

第98話

すぐ係員が出て来て、彩世をリンク外へ運んだが、祐二には無限に長い時間を感じた。

祐二は、急いで、知り合いの者だと言って、彩世に逢いに行つた
が取り合ってもらえなかった。

祐二の前を、彩世を乗せた救急車が通り過ぎた。

そこで、彩世の行き先を尋ねたが、身内や学校関係者と証明が無
かったため、教えてくれなかったために、彩世の両親に連絡した。

驚いた彩世の両親は、彩世が運ばれた救急病院を調べ、祐二に知
らせた。

祐二は、直ぐ様、病院へ行き、彩世の容態を確認しようとした
が、病院側はそのことは個人情報だからと教えてもらえなかった。

祐二は彩世にもしものことがあつたらなどと、やきもきしながら
彩世の両親が駆けつけるのを待っていた。

「榎山さん」

彩世の両親が祐二の姿を見付駆け寄つた。

「お待ちしてました。携帯でもお知らせしたんですが、僕では彩世
さんの容態については教えてもらえないんです」

「お世話をかけました。付き添いのコーチからの連絡でも、病院側
からははつきりした事は聞けないようで」

彩世の両親も悲痛な面持ちで答えた。

「今度の大会には榎山さんが来てくださると、久しぶりに元気な様
子で練習に励んでいたんですが、それがこんなことに」

母の操は肩を落として呟いた。

「まだ本調子でない彩世さんに、僕がアイスショーに出るように勧
めたのがいけなかったのかもしれない」

祐二もフィギュアに詳しくない自分が簡単に参加を促したせいだ
と後悔していたが

「そんなことはありません、榎山さんのおかげでどれほど、明るく
なったか、今回のことは榎山さんのせいでは決してありません、
ただ、あの子がまたふさぎ込むのではと」

彩世の父親が祐二に頭を下げた。

「榎山さん、彩世を励ましてやってくださいお願いします。慎吾く
んと言うところの誰ともわからない男性を探させた上に、彩世の面倒
までみて欲しいなどと、ずうずうしいお願いかもしれませんが、私
たちにはあなたしか頼るあてがないのです」

操も夫にならって頭をさげた。

「そんな、頭を上げてください、彩世さんのことは僕の意志でやつ
てることです、それに、彩世さんの力に少しでもなれば、僕は満
足なんです」

澄んだ瞳でそう言う祐二を見て、天見夫妻はなぜ彩世はこの男性
と婚約しなかったのかと悔やみ、彩世が慎吾など忘れ、祐二と添っ
てくれればと思った。

「ありがとうございます。では榎山さんも彩世の容態を尋ねに、ご
一緒ねがいませんか」

祐二は、両親の後に付いていった。

彩世の負傷は、ふくらはぎの肉離れだったが、症状が非常に重か
ったので、退院するのに三日を要した。

祐二は、両親に後を託して帰り、三日後には休暇をとり、彩世の
退院するのを待っていると、父親が足を包帯で巻かれた彩世を車椅
子に乗せて現れた。

「傷の痛みは？」

駆け寄った祐二が尋ねた。

「来てくれて嬉しい。痛みは少しだけ、でも、動いたら凄く痛いわ
涙目で答える彩世を祐二は、自分が婚約者なら、思い切り抱きし
め、彩世の苦痛を少しでも和らげて上げられるのと思った。

「また、当分の間、試合に出られなくなっただね」

「残念だけど、仕方ないわ」

「案外、冷静なので、安心しましたよ」

心配させまいと明るく振る舞っていることに祐二は気がついた。

「でも、せっかく試合を見に来て頂いたのに、転んだりしてごめんね」

「失敗はスポーツ選手にはつきものですから、気になさらない方がいいですよ。ところで、怪我が全快するのは何日かかりますか」

「安静にしていたら、三週間すれば、松葉杖を使って歩けると言われたわ、少し後遺症が残るので無理はできないんですけど、また肉離れすると大変ですものね」

祐二は彩世の心をできるだけ、なぐさめようと決意した。

第99話

「気長に養生してください、また滑れるようになれますよ」

「はい、有難うございます」

そこへ、退院の手続きをすませた、彩世の母親が現れ、

「また、お世話になりました。有難うございます」

操は恐縮して言った。

「いえ、何のお役に立てずに残念です。所で、お医者さんは何と云っていますか？」

「お医者さんの話では、急に激しい運動をしたのがいけなかったそうです。だから、練習をはじめると、二ヶ月後なら良いと云っていました」

「やはり、僕も、そのことを心配していたんです。ところで、彩世さんを実家へお連れするんでしょうね。できたら、僕もお手伝いしたいと思っていますが」

「いえ、彩世は実家へ帰らないと言っています」

「何故ですか」

「足が不自由でも、大学は休みたくないというのです。だから、京都の祖父母に面倒を見てもらうと言っていますよ。京都を離れたくないようなんです」

両親は意味深に言ったが、意味を解さない祐二は言った。

「そうですね、じゃあ、僕の車で彩世さんを、お送りしましょうか」

「そうして頂いたら有り難いです。どうか、彩世をお願いします」

祐二が彩世を祖母の家に送ると言う話をしている時。

「彩世さん」

若い女性が彩世を呼んだ。

「恵子さん、久しぶりね」

「怪我したの？大丈夫」

「ええ、フィギュアスケートの演技中の負傷よ」

「それは、お気の毒に」

と、言った後、恵子は彩世の両親に言った。

「もし、時間があるなら、少し話しができるといいんだけど」

「どうぞ、お好きなだけ話してください」

彩世の母親が言っていると、恵子は、彩世が乗った車椅子を病院の外へ押し出た。

「懐かしいわね、恵子」

「本当ね」

恵子の声に、以前の元気さがない。

「元気が無いわね、もしかしたら、ご家族の方が入院しているの？」

「いえ、真竹家のご家族と一緒にきているの」

「そのために、北海道から帰ってきたの？」

「違うわ、今、神戸に住んでいるのよ」

「じゃあ、ご主人と赤ちゃんもこちらに？」

第100話

「いえ、一人よ」

答えてから恵子が泣き出した。

「何か事情があるのね」

恵子が頷いた。

彩世には、恵子が幸せでないことが一目で分かった。

「恵子に会えて嬉しい」

彩世は優しく恵子を抱き締めた。

「私も会えて嬉しい」

言つと恵子は、また声を殺して泣き出した。

「何度も電話をしたの、でも通じなかつたから心配してたのよ。でも、会えたので安心したわ」

「心配して頂いてありがとう」

「苦労したのね」

恵子が黙って頷く。

「もし、良かったら、事情を話して」

最初は躊躇していたが、

「彼とは、別れたわ」

と、冷たく言った。

「そうだったの」

「でも、今は別れたことが良かったと思っているわ」

「それ本当？」

「今回は嘘を言わないわ」

「さつき、赤ちゃんのことを尋ねると泣いたけど、あかちゃんは元気？」

子供のことを聞かれた恵子は、急に声をだして泣きだした。

「御免ね、悪いことを聞いたりして」

「いいの。去年の六月、そう、北海道へ引っ越ししてから一ヶ月後、

早産で赤ちゃんが生まれたけど、すぐ、その後で死んだわ」

「可哀相に」

彩世も堪らずに泣いた。

「早産になったのは、夫に腹を蹴られたのが原因だった」

恵子が憎しみの籠った口調で言った。

「なんて酷い話なの」

「あなたに会って別れると言ったことがあったでしょう。でも、彼を愛していたから、別れられなかったの」

「それが真実の愛だわ。でも、愛を理解しない人が居るのね」

第101話

「私は彩世に嘘をついていたわ。彼は私のことなんて、お手伝いと性処理の役目をさせるために傍に置いていただけだったのよ」

「そんな、許せないわ」

「私を愛してなんかなかったのよ、だからお腹に赤ちゃんが居ても平気で暴力を私に奮ったわ。それでも、私は赤ちゃんのために、生まれ続けてくれればあの人が少しでも変わるんじゃないかと思つて耐えたの、でも、そのために赤ちゃんを失ってしまった。彼が変わるんじゃないか、愛があるんじゃないかと未練を持たず、別れていれば、今頃はこの腕の中に赤ちゃんがいたのよ。そう思うと悔しくてならないわ」

「大変だったのに、私は何もしてあげなかったわ、ごめんなさい」
「そんなことない、私があんな男を選んだ私が馬鹿だったのよ」

彩世と恵子は共に泣いた。

婚約をしても姿を現さなかった慎吾の愛も、一瞬の恋であってもう終わっていたのかもしれない。

彩世に対する慎吾の愛はもう剥げたのではないかと考えた。

(無理な愛は互い傷つけ合う、もう、私は去つた人を探さない)

恵子の無惨な愛の結末を知らされ、彩世は慎吾の愛を信じられなくなり決心したのだ。

そして今、祐二が彩世の傍にいて、献身的に尽くしてくれる。

祐二の愛が信じられる。だが、その愛は、祐二が誰に対しても持つ人間愛のように思え、淋しくなる彩世だった。

恵子は落ち着きを取り出したのか

「赤ちゃんを失つたのを機に、彼と別れ、岡山の実家へ帰ってきたわ」

冷静に話した。

「そうなの、ご両親とはもう和解したのね」

「ええ、もう絶対許してもらえないと思っていたのに、私のことを優しく迎えてくれたの」

恵子は涙を拭いながら言った。

「我が子を心配しない親はいないわ、まして恵子のご両親は優しい方たちじゃない」

頷く恵子。

「そうだ、真竹家って以前言ってた会社をやってる方達よね、その方達と来たってことは、恵子はそこに就職したの」

「ええ、そうよ」

言ってやつと笑顔を浮かべた。

「じゃあ今は社長秘書の仕事に励んでいるのね」

「そうよ」

「良かったわ、そうだ、恵子の初恋の人と会っているの」

「ええ、会っているわよ」

「初恋の人の恋人になれたら、名前を教えると言っていたけど、聞いてもいい？」

「まだ、駄目よ」

運命はまだ彩世を試すのか恵子の口からその名は出なかった。

「でも、初恋が実る可能性はあるのね」

「分からないわ」

恵子が悲しそうに言った。

第102話

「どうして？」

「私は見たことがないけど、彼に、好きな人が居るように感じるわ」
「それは、残念ね」

「仕方ないわ、だって、私も他の人に心を移したんだもの」
恵子は彩世の一番痛い所を付いた。

「そうね、信念を曲げたら、必ず報いを受けるわね」
彩世は自分に言い聞かせた。

「ところで、ご両親と一緒に居た若い男性、とても素敵ね、もしかしたら、彩世を助けた人でしょう」

「いえ、違うわ」
慌てて否定した。

「あの人を見た瞬間、この人だと、直感したけど、違ってたのね」
「そうよ、あの人は父の知人よ」

彩世は、不幸な恵子に、自分の幸せを見せるのは酷だと思い嘘を付いた。

「付き添ってきた患者さんを放っておいていいの？」
彩世は、話題を変えた。

「あつ、大変だわ、忘れていた」
言つと、恵子は彩世を両親と祐二の所へ送つて来た。

「あら、もう、話は終わったの？」
操は彩世と恵子の赤く腫れたまぶたをみて、二人が何かつらい思いを話あっていたのだと気がついた。

「恵子さんもよろしければお食事でもどうですか？」
彩世の両親が誘つたが恵子は断つた。

「恵子もこの病院には会社の方と来ているそうなの」
「そう、残念だったわね。もし、お暇があれば、彩世がいなくても、気軽に家に遊びに来てね。この子がいらないから静かで淋しいの、高

梁市はいい町だし、観光するならうちに泊まればいいから」

操は明るく恵子を誘った。

「はい、有難うございます、その時はお願いします。それじゃあ、失礼します」

恵子が立ち去ると、彩世の父親が祐二に言った。

「樫山さん長い間お待たせしてすみませんでした。ご面倒で申し訳ないですが、彩世を祖父母の家まで送っていただけますか、わたくしどもはこのまま高梁へ帰らせていただきます」

彩世の心を知っている両親は、彩世と祐二を二人にしてやりたいと思ったのだ。

「もちろんです。任せてください」

祐二は快く答えた。

恵子との話のあと彩世が目腫らして帰ってきたのが、気になって仕方なかった。

慎吾とのことなんだろうか、慰めてあげたいと心から思っていた。

祐二と彩世は、両親の見送りを受け、車を発車させた。

「彩世さん、足は痛みませんか？」

助手席で、痛みに堪える彩世のことがきになり、尋ねた。

「大丈夫よ」

「もし、車の揺れで、足が痛むようなら、電車に乗換えてもいいんですよ」

「そんなに心配しないでください、平気です」

第103話

「わかりました。そうだ、足が治るまで、僕が彩世さんの手足になります」

「そんな事までして頂いては、祐二さんの自由な時間がなくなるわ」

「もう、決めたから断っても駄目です」

「有り難くお受けします」

祐二が彩世に提案した。

「そうだ、来週の土日、映画鑑賞かドライブに出掛けませんか？」

当分の間、彩世は身体を動かせないため、自然と内向きの思考に陥り、病気が再発する恐があると思ったから、祐二は彩世の気分を晴らそうと考えたのだ。

「行きたいです。ぜひ、連れて行ってください」

彩世は痛みを忘れ、嬉しそうに言った。

「僕は考えるのが苦手なので、映画やドライブの計画は、彩世さんが立てて下さいよ」

「はい、喜んで」

数日後から、祐二は彩世が計画した通り、映画、ドライブや、出場できないフィギュアスケートなどを観戦に行った。

また、彩世は、山や海へ行くのが好きだったので、祐二の足手纏いになると思いつながら、行く計画を立てた。

確かに、山や海は、松葉杖を使って歩けるほど平坦でないために、祐二が彩世を背負ったり、肩を貸したりして、文字道理、彩世の手足になっていた。

だが、祐二にとって、この時が、今日までの人生の中で一番、幸せだった。

彩世も、祐二の献身的な手助けに、この上ない程の幸福感に包まれ、慎吾のことも忘れがちになっていた。

だが、幸せすぎるために何時か破られる（慎吾が現れる）時がく

るのではないかと思うと、恐くなる彩世だった。

祐二は、苦悩する彩世の顔をみるたびに、早く慎吾を見付なければと思いつながら、慎吾に婚約者としての役目を示せと叫びたくなる。彩世と婚約してから、やがて一年経つと言うのに、慎吾から何の連絡もない。この仕打ちには、慎吾が彩世に、無言の婚約解消を告げたいに等しいのだ。

彩世が、こんな先が見えない状態が何時までも続いていたら、やがて、彩世の精神が壊れてしまうだろう。

祐二は、彩世を、そんな悲しい女性にしたくないため、今度、彩世に逢った時、慎吾との婚約を維持したいのか問いたただそうと考えた。

その日は、彩世が慎吾と初めて会った八月二日。

もし、彩世が躊躇なく、破棄したいと答えたら、祐二は彩世に、愛を告白すると決心した。例え、その告白が、彩世と永遠の別れになる原因になろうとも。

彩世は祐二の決心を持っている。例え、天地がひっくり返っても、彩世は祐二の愛を絶対に拒否しない。

祐二の長く苦しかった彩世への愛哀は、哀しみも消え、幸せな日々が続くだろう。

第104話 純白のハンカチ

七月も後三日後となった夜、祐二はサッカーの試合をテレビで見ている。しかし、心の中では、彩世のことを考えていた。

そこへ、久しぶりに父親が電話をかけてきた。

「何か用？」

祐二は、見合いを警戒しながら尋ねた。

「何もないが、祐二の声が聞きたくなっただ。元気にしているか？」

父親は、何時もの父親らしくない優しい声で聞いてきた。

「ああ、元気だよ」

「それは良かった」

どうやら、見合いの件でないと安堵した祐二は、父親の労をねぎらった。

「父さん、毎日、家業を守り、国会議員の兄さんの手助けに奔走しているって聞いたよ、身体は大丈夫？」

父親は、祐二が自分の立場を理解していることを知り、嬉しそうに言った。

「心配してくれるか、ありがとう。実を言うと、会社と保の手伝いで疲れているんだ。だから、祐二に会社を任せ、俺は保の手助けをしたいと考えているんだ。どうだ、会社を辞めて、島根へ帰ってこないか」

「残念だけど、見合いとその話は僕の信念と相反するので受けられないよ」

「そうか、それなら諦めよう」

「失望させて悪いけど、これは僕の夢なんだ」

父親がさり気なく尋ねた。

「いいんだよ。今年も帰ってくるのか」

「帰るよ」

「そうか、何日？」

「去年と同じくらいの予定だけだ」

「そうか、母さんも待っているから、絶対に帰ってこいよ」

父親は言うとおっさり電話を切った。

(恐らく、父さんは、家業や兄さんの手助けで忙しい日々を送っていて、僕に電話をする暇もなかったけど、ふと、僕のことを思い出して、電話をかけたくなったのだ)

祐二は、父親の淋しげな顔が思い出されたので、可哀相に思い、内心で報告した。

(父さん、何時も僕の結婚を考えてくれて有難う。でも、もう、その必要がなくなるから安心していてください。なぜなら、愛する人と結婚するから)

報告と同時に、嬉しそうに頷く彩世の顔が祐二の脳裏に写った。

翌日、祐二が昼食をとるために、会社を出ようとした時、携帯電話が鳴った。

「はい、榎山です」

第105話

「彩世です」

平日の昼間は、互いの事情を考慮して、よほどのことが無い限り電話をしないという暗黙の習慣が二人の間で出来上がっていたので、慎吾の居場所が分かったのだと思い、幸福感が一気に吹き飛んだ。

「慎吾くんの情報があつたんですね」

祐二の早合点に驚いた彩世が急いで否定した。

「違うんです」

「早合点でしたか」

祐二の顔が安堵に変わる。

「急に電話をして、ご迷惑をかけました。御免なさい」

「少しも迷惑だと思っていけません。所で、用は何ですか？」

「わたし、今日から実家へ帰ります。帰る前に一目お逢いしたいと思つたの」

「僕も逢いたいから、時間と場所を言ってください」

「今」

「えー、じゃあ、社の近くへ来ているんですか？」

祐二が驚く。

「ええ、前に居ます」

「すぐ行きますが、足は大丈夫ですか？」

祐二が社を飛び出して行くと、彩世は、暑い日差しを避けるように、街路樹の日陰の中に立っていた。

「よく来られました。来るのに迷いませんでしたか？」

祐二が驚きの声で尋ねた。

「はい、何度も通つた道ですから」

「ええ？何度もですか」

「はい、だって、この道は高校のお友達の家へ行く道なんですもの」
「それなら、一度くらいは逢つていても不思議ではないね。そうだ、

顔を合わせていても互いに気付かなかつたんだ」

(違うは、私が気付かない筈がないもの)

強く否定したい彩世だったが、自分の愛を告白するように思えて
言えなかった。

「コーヒーでも飲みましょう」

祐二は近くの喫茶店を指差した。

二人は店内へ入った。

「忙しい所をごめんなさい」

彩世は席に着くなり謝った。

「謝らなくていいよ。僕も彩世さんに話したいことがあつたんだか

ら」

「話て何かしら？」

第106話

まさか、結婚を申し込む、などと言えない。

「大したことでないから、彩世さんが来た駅を聞かせてください」

「わたし、今日から実家へ帰ります。もし、祐二さんが夏期休暇で帰るようなことがありましたら、備中高梁駅で下車して逢って頂けませんか」

祐二は彩世に、慎吾との婚約を解消するように進言し、もし、彩世が応じたら、その場で、彩世に、結婚を申し込もうと決心していたので、彩世の逢ってくれの言葉は、天からの贈り物のように感じた。

「僕が彩世さんに話したかったことは、僕が八月二日から四日まで島根へ帰省することを、話そうと思っていたのです」

「じゃあ、逢ってくださいのね」

彩世は安心した。

「はい、絶対に逢いに行きます」

「じゃあ、何日に来てくださるの？」

祐二は、彩世に結婚を申し込む日を、八月二日から四日までと考えていたが、父親の電話を受けてから、少し考えが変わり、八月二日に結婚を申し込み、彩世が受けたら、その日、両親に報告し、四日の日は彩世の両親に会って、彩世との結婚の許しを受けようと考えていたのだ。

「八月二日は京都からの帰り、四日は島根から京都へ戻るときです。もし、彩世さんの都合が悪ければ変更します」

「そんなに逢ってくださいの。私に都合などないわ」

彩世が嬉しそうに言った。

「僕は、また、高梁市の夏の風景を、ループ橋の展望台から見たいと思っていたので、必ず行きます」

祐二は、大好きな展望台で、彩世に結婚を申し込もうと考えてい

たために、今は真実を話さないようにした。

彩世も今度こそ、祐二と新しい人生を始められると予感がしたのか、彩世の目から嬉し涙が流れた。

急に辺りが騒々しくなった。どうやら昼食時間が終わり、客がレジの前に集まってきたのだ。

レジで支払いをすませた祐二が彩世の所へ戻り言った。

「急がすようで悪いが、僕は仕事があるので、店を出ますが彩世さんには？」

彩世が淋しげに、

「祐二さんと一緒に店をでます」

二人は店を出た。別れ際に祐二が彩世を安心さすように、

「必ず行きます」

祐二は、駅に向かう彩世を見送りながら、

第107話

(彩世さん、僕は貴女に結婚を申し込みます)

八月二日の朝。

「さあ、お伽の国へ行こう」

祐二は、一年前に言った言葉と同じことを言って、マンションを出た。

やがて、祐二が、京都駅に着くと

「榎山くん」

聞き覚えがある上司の声が聞こえた。

「お早う御座います」

振り向いた祐二は、上司に挨拶した。

「帰省かね」

分かっているくせにと思いつながら、

「はい」

と余裕をもって答えた。

「乗車券買ったかね」

「はい」

祐二は、昨年と同じ愚を犯さないよう、前日に購入していた座席指定券を見せた。

上司は、落胆を隠しながら言った。

「コーヒーを飲む時間ぐらないかね」

「十分くらいなら付き合えます」

「そうか、じゃあ、十分だけ頼むよ」

祐二が予想したとおり、祐二にゴルフの自慢が終わると、もう、用無しとばかりに、急いで東京方面行きのプラットホームへ行った。

祐二は、予定どおり、博多行き、のぞみに乗った。

岡山駅に着いた祐二は、早速、彩世に電話した。

「写生しているの？」

「はい」

「今、岡山駅に着いたので、連絡しました。でも、写生の邪魔をして悪かったね」

「いいのよ、今も、風が吹いているので、写生を中止していたのよ」
「じゃあ、僕は河原へ歩いて行きますから、ゆっくり写生してください」

祐二は新幹線の岡山駅を出ると、伯備線のプラットホームへ行き、やくも号が到着するのを待っていた。

すると、数人の怒鳴り声がかと思つと、どたばた駆け回る足音が聞こえて来た。

「スリだ、集団スリだ。捕まえる」

私服の警官らしき人が、線路内を逃げ回るスリ集団を追い掛けている。

やがて、スリ集団は伯備線のプラットホームへ駆け上がり、その中の二人が祐二の方へ向かって来た。

第108話

ホームには、子供や女性、そして、右足は不随、左足は太股の中間から下を無くした青年が車いすに乗っていた。その人達を守るために、祐二は素早く防御態勢を取った。

一人目のスリは、祐二の前を通り過ぎると、車椅子を突き飛ばし青年をプラットホーム上に転倒させて逃げる。

その瞬間青年の胸ポケットから白いハンカチが飛びし、プラットホームに落ちた。後から走ってきたスリが、そのハンカチを踏もうとした瞬間、青年は不自由な身体を一杯に伸ばし、ハンカチを掴むと、同時にスリがその手を踏んだ。

怒った祐二は「許さない」とばかり、スリを追い掛けようとしたが、倒れた青年の姿が目に入ったため、追い掛けるのを中止し、青年に声を掛けた。

「怪我をしなかった」

車椅子の青年には、母親らしい女性が付けていたが、突然出来事に何をすべきかの判断も出来ないのか、一瞬、呆然と立ち尽くしていたが

「はい」

青年が辛うじて答え、ハンカチを大切そうに胸のポケットにしまい、スリに踏まれて出来た擦り傷を、ズボンのポケットから取り出した色付きハンカチで拭いた。

「お手伝いしましょうか」

祐二が遠慮気味に尋ねる。

青年の身体は祐二より少し小さいが、日本人の平均よりはだいぶ大きい。とても、母親一人の力では、青年を車椅子に乗せることができない。

「お願いします」

母親は感謝をこめて言った。

祐二は無言で、青年に了解を求める。

青年も、目でお願ひしますと言う。祐二は青年の手を自分の首に巻いた。すると、最初は恐る恐る祐二の首に当てていたが、すぐ、縋り付くように力を入れてきた。

（このぎこちなさ、人の助けをあまり受けていない。いや、慣れるのを恐れている）

祐二は、思わず胸が締め付けられ、思い切り締めていた。

（可哀相に、どんな事故に遭ったんだろう）

涙が出そうになるのを耐え、祐二は青年を車椅子に乗せた。

「有難うございます」

青年は人に顔を見られたくないのか、野球帽を目深い被りサンダラスを掛けていたが、丁寧な礼を言った。

「息子がお世話になりました」

女性はやはり母親だった。

「お送りしたいんですが、どちらへ行かれます」

「息子の健康のため、玉造温泉へ行くのです」

「そうですか。もし、ご用があれば言ってください」

第109話

その時、やくも号が入って来た。そこへ、スリを追い掛けていた駅員が戻ってきたので、祐二は駅員と力を合わせ、青年を電車に乗せた。

青年の席は、祐二とは反対側の窓際、即ち、高梁川に面した席だった。

祐二は、青年が何となく人目を避けているように感じたので、出来るだけ青年を見ないようにと目を閉じた。

閉じた祐二の目に、親子三人で楽しげに会話する少女の顔が浮かぶと同時に、涙に濡れた岡本の顔と少女の写真が現れ、祐二の胸が詰まる。

(僕の命ある限り、君のことは決して忘れないからね)
改めて、少女に誓った。

電車は倉敷を通過し、総社駅に来た頃には、家並みも疎らになり、高梁川との出会いが予感させられる。

やがて、予感道理、忘れ得ぬ心の故郷でもある高梁川が現れた。

祐二は、高梁川に目を向け、彩世に慎吾との婚約解消を進言したり、結婚を申し込んだりする練習をしながら、希望に胸を熱くしていた。

やがて、電車は彩世が写生している河原が見える所へきた。

祐二は、彩世の姿がよく見えるようにと席を立ち、慎吾の頭上越しに河原を見た。河原には、彩世がパラソルを背にし、電車に向かって立っていた。

祐二は、彩世に向かって。

(今日、僕は、あなたに結婚を申し込みます)

心の中で彩世に告げていたとき、祐二の目の隅で激しく揺れる白い物が見えた。

祐二がよく見ると、身体の不自由なあの青年が、彩世の母親から

見えない、窓際の陰で、真っ白なハンカチを力一杯、振っていた。

祐二の顔が蒼白になった。

（慎吾、君が慎吾くんなのか！）

彩世から慎吾についての経緯を聞いていた祐二には、彩世に向かってハンカチを振る者が誰なのかすぐ分かった。

（あの時、ハンカチを大切にしていた意味が分かった。可哀相な慎吾君）

祐二の顔が悲しみに歪む。

（彩世さんに分かるようハンカチを振れ、勇気を出して振れ、振れ）

祐二は、思わず声のない声援を送らずには居られなかった。

だが、その時はすでに、彩世の姿は無かった。

慎吾の愛と悲しみを目の当たりにした祐二は、居たたまれなくなり、溢れる涙を拭きもせず、後方の電車の連結部へ駆けで行った。

（そうだったのか、彩世さんに会いたくても、その身体では会えないんだ。僕には、君の心が手に取るように分かるよ）

第110話

彩世は祐二にとって命より大切な人。彩世の幸せのためには何でもして上げたい、そして、どんなに苦しくても我慢ができる。だが、だが、今日は彩世に結婚を申し込む日だった。

だが、この現実を目のあたりにして、祐二は、目の前が真っ暗になった。

しかし、その恋敵の男が、不自由な身体と心を推して、愛する彩世に別れを陰ながら告げに来ているのだ。どうして、非難したり邪魔をしたりできようか。

まして、その恋敵が震えながら自分の胸と首に縛り付いてきたのだ。その時、祐二はどうか、この男に幸せが訪れますようにと念じたのだ。

祐二は、慎吾のひた向きで、純粋な愛と哀しみに苦悩する様を目のあたりにして、詫びずに居れなかった。

(慎吾君、僕は君を彩世さんの婚約者としての資格は無いと非難した。しかし、僕の過ちであった。許してくれ)

心で詫びてから誓った。

(僕は、君から彩世さんを奪わないよ)

誓った祐二の目から、再び大粒の涙が溢れた。

涙を拭き、気を取り直した祐二は、彩世に電話した。

「もしもし、彩世さん」

「はい、祐二さんね、もう、駅に付いたの？」

嬉しそうな彩世の声が聞こえてくる。

「着いたけど、残念なことに、実家の母親が急病になったので、河原へは行けなくなりました。悪いけど、逢うのは、四日の日に変更してくれませんか？」

慎吾の不幸とわが悲しみに泣いた祐二の声が、母親を心配する声に聞こえた。

「それは大変だわ、早く帰って上げてね。私も病気が早く治るよう祈ってます」

「有難う」

祐二は、嘘を付いた後ろめたさを感じながら電話を切った。

今日は彩世と慎吾君が初めて会った日であり、必ず、彩世が河原へ来ることを知っている慎吾は、果たそうとしても果たせなかった約束を詫びるため、悲しみに耐え、陰ながら約束を果たしたのだ。

そう思った祐二は、一層、慎吾を哀れに思う。

（慎吾君の旅は、彩世さんの姿を見、詫びる為の旅だろう。おそらく、明日の今頃、この場所を通る時、彩世さんに永遠の別れを告げて帰るつもりだろう。しかし、彩世さんの姿は見られないだろう。それを知っていても、そうするしかない慎吾君は哀れだ）

やくも号の線路は高倉山麓の両側で二股に別れ、下りの電車は、彩世の姿が見れる高梁川側を通るが、上がりの電車は通らないのだ。祐二は、人に泣き顔を見られないよう、鼻をハンカチで覆い、席へ戻り、慎吾の様子を見た。慎吾は身体を前に折り曲げ、背中が波打っていた。

その姿から、嗚咽を必死に耐えているのが、容易に察することができた。

（君の彩世さんへの愛の強さを見た。君なら彩世さんを幸せに出来る）

第111話

だが、慎吾の考えが分かる祐二には、彼を見付けたとしても、慎吾が彩世に会うと言わない限り会わせられない。しかし、このまま放置できる訳がない。

また、放置出来ないなら、自分と彩世の関係を慎吾に話す必要がある。だが、それは誤解の元になると考え、できる事なら、第三者に慎吾と彩世の仲介を頼むのが無難だ、などと考えている間に電車は松江駅に着いた。だが、祐二は電車から降りることが出来ない。(どうすればいいんだ。間もなく電車は玉造に着く、それまでに慎吾と付き合える仲になる必要がある。それも彩世さんとの関係を伏せて)

しかし、肩を落として悲しみに沈む慎吾に、無遠慮に話し掛けることは出来ない。

祐二があれやこれやと悩んでいる間に、電車は玉造駅に着いた。

「僕の背中に乗ってください」

以前祐二は、歩けない彩世の車の乗り降りの手助け、高山植物の花々の間を背負って歩いた背中の温もり、鳴き砂の鳴き声を聞くために、彩世の手を取り、鳴き砂の上を歩いたときの手の暖かさを何よりも大切にしていた。

だが、祐二は、その大切な温もりを消してしまう相手と知りながら、その相手の手を取り、身体を抱き、その上、背中まで差し向けた。

この苦渋の選択をしなければならぬ祐二の辛さは、如何ように察しても、察し切れないほど大きかった。

しかし、祐二はその哀しみを押し隠して慎吾に背を向けた。何も知らない慎吾は祐二の背中におぶさった。

(この僕を信じて助けを快く受け取る慎吾くん、君の幸せのためには何でもしてあげる。それが、彩世さんの幸せでもあるからだ。だ

から、僕は彩世さんを諦める)

心で誓った祐二は、慎吾を背負うと駅の外へ出た。

「僕は真竹慎吾です。度重なるお世話を頂きありがとうございます」
慎吾に付き添っていた女性が、祐二に縋るような眼差しを言
った。

「私は慎吾の母親です。昨年八月五日の朝早く、慎吾が大学のヨ
ット部員と一緒に、ヨットを操作している時、漁船と衝突し、慎吾
だけが負傷したのです。今は、お付き合いしてくださる友達が一人
もありません。どうか、慎吾の友達になってください」

言つと、母親は紙に住所と電話番号を書き祐二に渡した。

どうすれば、慎吾と付き合えるか探していた祐二だったが、その
心配が無くなった。

「こちらこそ」

祐二は、名刺入れから一枚の名刺を取り出して渡した。そして、
自己紹介をしようとしたとき、名刺の名前をすばやく見た慎吾の母
親が言った。

「鈴木肇さんとおっしゃるんですね」

言われて名刺を見ると、同僚の名前だった。

第112話

急いで訂正しようとしたが、訂正すれば、信用されなくなると考え、鈴木の名前を借りることにした。

「この名刺の電話番号は仕事専用なので、携帯電話の番号をお教えします」

祐二は手帳を破り、携帯番号を書いた紙を慎吾に渡した。

「分かりました。仕事の邪魔になるといけませんね。名刺の番号にはかけません」

「そんなに堅く考えないでください」

「いえ、僕の父や兄も個人的な用で社に電話すると怒ります」

「そうですね、社の電話では長く話してもできないからね、僕は慎吾君に会った瞬間から初めて会ったという気がしないんです。ご住所は姫路市ですか？もし、その方面へ行く時があったら、お伺いしてもいいですか」

「ぜひ来てください。それも出来れば早く来て欲しいです」

祐二には願ってもない誘いだった。

「分かりました。出来るだけ早く、お伺いします」

「本当に来てくださるんですね。その日を待っています」

慎吾が嬉しそうに言った。

祐二は慎吾をタクシー乗り場へ送り、タクシーに乗せた。

タクシーの窓から慎吾が淋しそうに手を振る。

祐二は、彩世を失う哀しみを隠し、去り行く慎吾親子に手を振っていた。

慎吾にしてみれば、もっと早く、いや、何度も彩世の姿を陰ながら見、その胸の苦しみを伝え、許しを乞いたかったに違いない。しかし、彩世の姿を陰ながら見られるのは、年に一度、それも、あの時間帯に限られているのだ。

この一年間、今日の、あの時間をどんなに辛い思いをしながら、

その時がくるのを待っていたかは、祐二にしても想像に難くない。だが、祐二にしてみれば、慎吾の出現は、まさに天国から地獄への坂道だった。

しかし、慎吾のあの苦しむ姿を目にした祐二は、彩世を諦めるしかなかったのだ。

祐二は、堪え難い哀しみを堪え、故郷の家に戻った。

そんな祐二の心もしらず、母親がしかり付けるように言った。

「遅かったわね。まさか、お見合いをわすれたんじゃないでしょ
うね」

「見合いなど、知らないよ」

「ええ？知らなかったの！」

「そっだよ」

「父さんから聞いてないの？」

「聞いてないよ」

「変ね、一週間も前に決まっていたのよ」

第113話

母親は頭を傾げていたが、父親がきたので尋ねた。

「祐二に話さなかったの？もし、見合いをしなかったら、保の面目が丸潰れになるところだったわよ」

「兄さんの面目って何？」

意味の分からない祐二が尋ねた。

「今度のお見合いは、保が選挙に出た時、絶大なる支援を頂いた家のお嬢さんとお見合いだから、絶対に断れないのよ。それなのに、お父さんは忘れていたなんて、無責任にも程がある。もし、祐二が帰ってこなかったら、どうするつもりなの！」

母親が父親を責めると、

「そのことなら心配無用。なぜなら、何の用もないから、必ず帰ってくる。もし、見合いがあると教えたら、帰って来ない恐れがあったからだ」

「そうだったの。でも、危ない賭けだったわね」

周りがいくら騒ごうと、今の祐二は、彩世や慎吾のことで頭が一杯のため、誰ともはなしたくない。

無関心な態度が気に入らない母親の怒りは納まらない。

「何よ、その無愛想な態度、お見合いするわよね！」
「するよ」

彩世を失った祐二に、両親と争う気力はないため、力なく答えた。

「何かあったの？」

急に、母親が心配そうに尋ねた。

「乗り物疲れたと思う」

まさか、真実を話す訳にもいかず、旅のせいにした。

「疲れていてはお見合いに支障をきたすわ。元気を取り戻すのには、食事が一番よ。用意をしてあるから食べなさい」

食卓の前に座った祐二だが、とても、食事をする気にならない。

そこで、前の席から監視するように見ている母親に。

「母さんが僕の大好きな食事をせっかく作ってくれたのに、今は疲れていて食べられないんだ。だから、少し休んでから食べるよ」

祐二が、すまなそうに言々と母親が

「そんなに疲れているの？よほど仕事が忙しいのね。じゃあ、お見合いまで、まだ少しの時間があるから、一眠りしなさい」

言われるままに、祐二はベットに寝転んだ。

(慎吾くんに会わなかったら良かった)

そう思うと、哀しくて、自然と涙が出てくる。その涙が出るがままだ、祐二は、今日の出来事が走馬灯のように頭の中を駆け巡っていたが、河原で写生する悲しげな彩世の顔が現れると急に停止した。

(今も慎吾くんを待っているんだね。慎吾くんには会わせられないけど、必ず、会わせてあげるから、しばらくの間、我慢してください)

祐二は、慎吾と彩世の悲しみや苦しみを思い、自分の哀しみを忘れようとした。

一時間ほど経った時、突然部屋のドアが開いて父親が入ってきた、祐二、起きているか」

眠っている振りをしている祐二の顔を見て言った。

「よほど疲れているんだな、可哀相に涙を流して眠っているよ」
父親は、身体を揺すり。

「祐二、起きて見合いの用意をしろ」

今、目が醒めたと言わんばかりに、祐二は大袈裟に目を擦りながら起きた。

「すぐ理髪店に行つて、その汚れた髪を洗い、髭を剃ってこい。そして、ちゃんとした身なりで行かないと相手に対して失礼だろうが」
慎吾に出会わなかったら、祐二は、絶対に見合いをしなかっただろう。しかし、彩世を失った今は、もし、相手の女性が結婚をしたというなら、それでもいいと思ったので、理髪店へ出掛けた。

祐二が、理髪店の前に来た時、後から来た車が急停止した。祐二が振り向くと、幼なじみの英樹が車の窓から顔を出し

「帰っていたんだな」

「すまん、急に思い立って帰ったものだから、知らせる暇がなかったんだ」

「また、あれか？」

「そうだ、毎年、夏になると、蝉が合唱するよつに、喧しく言われるんだ。だが、見事に振られるがね」

「らしいね」

一応、同情する。

「横の女性は優子さんでしょう」

祐二が言つと。

「そうだよ。去年の夏、古浦の海水浴場で会った優子さんだよ」

「よく知っているよ、あの時はお世話になりました」

「こちらこそ」

優子が礼をすると、英樹が

「祐二、驚くなよ。僕と優子さんは婚約したんだ」

嬉しそうに言つた。

「それは良かった。お目出度う」

「結婚式の日は？」

「今年の十月、日時はあとで知らせるよ。来てくれるだろうな」

懇願するように言った。

「無論だ、よろこんで出席させてもらおうよ」

優子は嬉しそうに、祐二に向かってお辞儀をした。

「所で、明日の予定は？」

英樹が尋ねた。

「何も無いよ」

祐二が言つと、英樹は、また、明日、泳ぎに行こうと言つて、車を発車した。

祐二が、理髪店へ入ると、店主が誰にでも聞こえないように小声で言う。

「祐二くん、これで何回目の見合いかね」

言つて、くすりと笑つた。それを無視するように、祐二が恍ける。

「何のこと」

この店主は、祐二が生まれた時から高校まで祐二の頭を刈つていたのだ。

店主はそれ以上追求せず、話を変えた。

「お前の兄、保君は偉いね」

「どこが」

「また恍ける。兄貴は、若いのに国会議員に当選したもんなあ」

言つた店主は、一人でうんうんと独り合点していた。

「僕は僕ですよ」

店主は、また忠告した。

「兄貴に心配をかけないよう、早く結婚しろよ」

「おじさんは、兄貴が来ると、必ず、早く結婚しろと言つていたんだつてね。他府県に住む僕には通用しないよ」

「そう言つて強情は張つていと、必ず後悔するぞ」

この店主は、兎に角お説教が好きだった。それを知つてる祐二は、

何を言われても気にならない。と言っより慣れていた。

「忠告ありがとう」

一応、礼を言っと、店主が。

「さあ出来たぞ、兄貴も男前だが、祐二はそれ以上だあ」

祐二を持ち上げた。

「おじさんは、何時、見ても元気そうですね」

「見かけただけだよ。間もなく七十だから、先が短いよ」

言って、禿げた頭を撫でた。

祐二は、店主に礼をして理髪店を出た。

家への帰り道、祐二の脳裏には、英樹と優子の幸せそつな顔が浮かぶ。

（みんな幸せなんだ）

116話 お見合い

自分だけが、幸せから見離されていると思うと、哀しくてならない。その上、したくもないお見合いが控えているのだ。祐二は何も考えたくない心境になるのだ。

傷心の祐二が帰ると、部屋の外から母親が急き立てた。

「早く服を着替えなさい」

「着替える？この暑いのにスーツに？」

「当然だわ」

そこへ父親がきて、

「スーツでなくてもいいんだよ」

「なぜ？」

母親が聞く。

「相手のお嬢さんが、格式張るのが嫌と言っているんだ」

母親が不服そうに言う。

「神聖な見合いなのに仕方ないわね。じゃあ、お父さんの車に乗っ

ていきなさいよ」

「父親同伴、そんなの嫌だよ」

祐二が必死に言うと、母親が、ばか、と言うような顔をして言った。

「父さんは行かないわ」

「ええー、じゃあ、運転は誰がするの？」

「祐二が運転するのに決まっているでしょう。今回の運転は、見合いにいくんでしょう。故郷へ帰ってくるのとは訳が違っわ」

祐二が、呆れたように言う。

「母さんは勝手だなあ」

「つまらんことを言っていないで早く行け」

と父親が急かす。

「行け行けと急かされても、何時、何処で見合いするのか聞かされ

ていないのに、行くに行けないよ」

そうだったと言って父親は、照れ臭そうに説明した。

「時刻は午後七時。場所は日御岬灯台下の潮騒という喫茶店。夕焼けと日本海に沈む美しい夕日が見られることで有名だよ。知っているか？」

「うん、知っているよ。日御岬には漁師の友達が居て、一度、その喫茶店へ行ったことがあるんだ。ところで、時刻と場所はお父さんが決めたの？」

「いや、相手のお嬢さんが、人目の多い所での見合いは嫌と言って、場所と時間を指定してきたんだ」

「じゃあ、今回の見合いだけは、全て、相手の言いなりになんたんだね」

「そうだ、仕方ないだろう」

自分の親が決めたお見合いでないと知り、祐二は少し気分が楽になった。

祐二は気分は晴らしも兼ね、車を宍道湖畔沿いの道を出雲大社方面に向かって走らせ、日本海に面した県道二十九号線を北に向かった。

祐二は美しい日本海を左手に見ながら、見合い時間より早めに喫茶店、潮騒に着いた。

喫茶店の中から、コーヒーを飲み、波穏やかな日本海を眺めていると、

「榎山祐二さんでしょうか」

と、尋ねられた。祐二が振り向くと、二十三、四の美しい女性が立っていた。

「小野めぐみさんですね。お待ちしていました」

祐二が丁寧に挨拶する。

見合い相手の写真を、祐二とめぐみは予め見ていたので、相手が誰かすぐ分かる。

「はい」

祐二に正面から見られたので、めぐみが恥ずかしそうに小声で答えた。

「どうぞ、お座りください」

めぐみは祐二の勧めで椅子に座った。

祐二が尋ねる。

「何をお飲みになりますか」

「アイスコーヒーをお願いします」

祐二は来たウエイトレスに注文した。

待つほどの時間もかけず、ウエイトレスはコーヒーをめぐみの前に置いて、立ち去った。

それを見届けた後で、めぐみが恐縮した態度で言う。

「榎山さん、私は最初にお詫びを申し上げねばなりません」

「詫びるって？」

突然、言われた祐二は、驚いて尋ねた。

「私はお見合いをする資格が無い者なんです。なのに、無理に両親が見合いを決めて来てしまつて、どうか、許してください」
言つて恵みが深く頭を下げた。

祐二は、突然、予想もしなかったことを言われ、どう答えればよいのか分からず、思わず聞き直した。

「資格がないとは、どういうことですか？」

めぐみが申し訳なさそうに言つた。

「私には恋人がいるんです。でも、そのことを両親に言えないために、あなたにご迷惑をかけてしまうことになつて、申し訳ありません」

祐二は、想像もしていない成り行きに、驚くと同時に、どう言つて断ろうかと考えていた矢先に、めぐみの方から断られたので、急に気分が晴れ晴れしてきた。

「そうでしたか、どうか気にしないでください」

祐二の反応があつさりしていたので、めぐみが拍子抜けしたように

「いいんですか？」

と念を押す。

「いいんです。誰にでも好かれるほど美しいあなたが、なぜ、お見合いをするのかと、不審に思つていましたが、その理由がわかり納得しました。詫びなんかいいですよ」

「いい方なんですネ、どうか叱ってください。貴方の優しい思いやりが心苦しいです」

めぐみは、祐二の思いやりに、一層、罪悪感を感じた。

「貴女を叱る。そんなことは出来ません。それより、お願いがあります」

「何でしょうか？」

めぐみが不安そうな表情を浮かべる。

「貴女と僕が出会いました。どうして出会ったのでしょうか。今、僕は不思議な気持ちで一杯です。僕たちは出会う運命、その運命は、貴女と僕にどんな運命を命じたのだろう。それは神様しかご存知ない。ただ僕に分かっていることは、全然知らない者同士が会ったのです。今日と言っても後、五時間しかありませんが、その一時を僕に頂きたいと思っています。そして、その僅かな時間を、僕は貴女と旧知の友か、久しぶりに出会った同窓生のように楽しく過ごしたいと思っています、暗黒が訪れるまで」

祐二は、何故か、これで最後になると思えずに言ったのだ。

どんな難題を言われるのかと心配していたためぐみだが、祐二が考えていることと同じようなことを考えていたので

「お付き合いさせて頂きます」

と嬉しそうに言った。

「その言葉が、謝罪の気持ちなら無用ですよ」

「いえ、私もそう思っていたからです」

「ありがとう」

めぐみが恐る恐る言う。

「もし、異存が無かったから店を出ません。間もなく太陽が海に沈みます。そして、夕焼け雲が輝き、やがて、消えます。その美しさは筆舌で表せないほどです。その美しさを独り占めに出来る場所があります。これから、そこへご案内しますわ」

「いいですね。貴女と過ごす最初で最後の時間です。大切に過ごしましょう」

祐二が提案を断らなかったので、めぐみは、ほっとしながら喫茶店を出た。

二人は、各自の車に乗り、祐二はめぐみの車に従った。めぐみは日本海に面した断崖絶壁上の道路、即ち、祐二が来た道を後戻りする。

わずか数分で展望台に着いた。展望台は、断崖絶壁の上に張り出した岩石の上に作られた小さな展望台であった。

「私が幼いころ、よく両親に連れられてきた大切な思い出の場所です。展望台が家族だけで一杯になるので、両親は、この展望台を「家族の展望台」と呼んでいます」

「なるほどね」

祐二は、命名に感心しながら、木で作られた椅子に腰掛けて西を見た。

空には、ばら色の夕焼けが広がり、波一つない日本海は、その夕焼けからの淡い光が射し、その中へ夕日が沈み始めていた。

祐二は、待つて来たアイスコーヒ―缶をめぐみ渡して言った。

「美しい日本海、沈む夕日、そして夕焼けに乾杯」

「夕暮は人生の終わりとされているけれど、そんなふうには見え

ないわ。目に見える全ての現象に乾杯」

二人は喉の渴きを癒した。

「そうだね。仮にそうだったとしても、人生の終わりを、こんな美しい夕暮と一緒に終わられたら最高の幸せだね」

二人は同じ島根県生まれだ。話は尽きない。

やがて、太陽は海に沈んだ。間もなく祐二とめぐみに別れがくる。

祐二は、自分が今、一番気になっていることを解決するために、めぐみの知恵を拝借したいと考えていたので、思い切って尋ねた。

「めぐみさん、僕は女性の考えが分かりません。今から尋ねますが、その答えを教えてください。出来れば、人前で話す優しい答え方ではなく、冷徹、冷静、真実の答えが頂きたいのです、答えを頂けませんか？」

「なんだか難しそうね」

「そうです、二人の人間の幸不幸がかかっているのです」

「責任重大ですわね」

「いえ、思った事を言ってくればいいんです」

めぐみは、一層、深刻な顔をして考えていたが、決心したように。「分かったわ、どんな答えを出せるか分からないけど、私なりの答えをお答えします」

めぐみが、深刻な顔をするので祐二は、気持ちを楽しませて上げたいと考え、

「驚かせてすみません。実は、その人間とは架空の人物なんです」と、笑いながら言った。

「そうだったの」

祐二が説明する。

「その二人は、僕が書いている小説の主人公なんです。僕は小説家ではないのですが、ある雑誌社が小説を応募しているので、一度、投稿をしようと思いい小説を書いています。しかし、どうしても書けない箇所が出来たのです」

「もしかすると、私の答えが採用を左右するかも知れないのでしよう」

「そんなに心配しなくてもいいですよ。なぜなら、初めて書いた小説、決して採用されることはありません。それよりか今後の参考資料にあなたの考えが役立つと思うんです」

「そう聞いて気が楽になりました。どうぞ質問なさって」

祐二は、考えを整理してから話した。

「若い二人がある場所で出会い、すぐ恋に陥った。そして男は一週間後、女性の家へ結婚を申し込みに行く約束して帰った。その途中事故で片足を失ったばかりでなく、残りの足までも動かなくなり、女性に会いに来れなかった」

話した後、祐二はめぐみの視線を避けるように、顔を沈み行く夕日に向けた。

めぐみは、黙って祐二がはなしだすのを待つ。

「その事情を知らない女性は、自分から男に会いに行きたいと思っただが、生憎と、男の住所を知らなかったのです。それから女性は毎日、涙と共に暮らしている。男はどうしていたかといえば、事故に遭い病院で意識を取り戻した日が女性と合う約束の日だった。男は急いで女性に連絡をしようと、女性の電話番号がある携帯電話を探したが無い。そして身体を動かした時、自分の身体に起こっている異変に気付いた男は驚愕しました。その時から、青年は人目を忍んで泣いているんです」

感情の昂りを押さえられなくなった祐二は、一息ついてから話す。「男女が出会った日から丁度一年が経った日、女性は男と初めて会った場所へ来て、男が来るのを待っていた。その様子を男は電車の窓から見て、女性に分からないよう、ハンカチを振り、別れを告げた。何故別れを告げたかといえば、こんな身体になった自分を女性には絶対に見られたくない。いや、それ以上に、この世で一番愛する人の幸せを考えてのことだった。男の考えとは別に僕はこの男女を会わせたいと思っっている。しかし、男の気持ちを無視してまでも二人を会わせるべきだろうか。僕が聞きたいのは、女性は、変わり果てた男性を愛せますか？愛せるなら会わせたいと思っっているのです」

「酷な質問ね。だって、その答えが私の人格を表すもの」

「だから言ったでしょう。これは小説だと。貴女は、お友達など多くの女性と付き合っているんだから、女性の気持ちや女性側からどうなのか知っているでしょう。貴女の考えでなく、女性全般の考え方を教えて下さい」

「そうね、男性が破産したために、恋が醒めた話は聞いたことがあるけど、身体に障害が生じたから別れた話は聞いたことがないわ」

彩世が幸せになる条件は、まず、慎吾に会うことである。だが、慎吾は絶対に会う気持ちがない。また、社会では、親や子供の介護疲れで心中する事件が多発している。

今、彩世に慎吾に会わしたら、彩世は慎吾を愛で介護すると言うだろう。だが、彩世に介護が出来るだろうかと考えると不安になって、めぐみに尋ねたのだ。

「他に人のことは知らないけれど、私なら愛せるわ」

「本当ですか、有難う」

「二人を会わすのね」

「今は言えません。もし小説が本屋さんに出ることがあれば読んでください」

空は、夕焼けの明るさを失い、海は夕霧が架かり暗さを増してきた。それは、祐二とめぐみの時間が終わったことを告げているのだ。「めぐみさん、今日はありがとう、そして、楽しい時間を過ごさせてくれたことを感謝しています」

「私こそ、あなたを騙したりして御免なさい。私には大切な恋人がいるけれど、今日の楽しさを忘れるためには、多くの年月がいりません」

「僕は、今、書いている小説の原稿を見るたびに、今日を思い出してほしい。あなたの幸せを祈っています」

二人は、日本海に別れを告げ、展望台から下りた。

めぐめは、自分の車に乗ると、見送る祐二に軽く会釈してから車を発進させた。

祐二は、再び展望台に上がり、暗い海と、星々の輝く夜空を見て哀しげに言った。

「僕は彩世さんを死ぬほど愛している。出来ることなら彩世さんを誰にも渡したくない。しかし、慎吾くんの心を考えると、その思いも萎えてしまう。僕は、どうすればいいのか教えてください」

すると、心の声が聞こえた。

（彩世と慎吾を会わせるしかない。もし、会わさなかったら、お前は、一生涯、心に大きな傷を残し、苦しみ続けるだろう）

しかし、彩世と慎吾を会わせれば、そこで、自分を彩世との関係が終わると思うと悲しくなり、思わず自嘲気味に言う。

「僕が愚かで、忘れやすい性格なら、今日も上司のゴルフの話を聴かされ、電車に乗り遅れ、今頃は、彩世さんと結婚することを両親に報告しているだろう。だが、少しだけ、まじめだったために、同じことを繰り返さず、慎吾くんに出会ってしまった。そして僕の夢は破れた。これが僕の運命なのか」

祐二は哀しげに肩を落として車に乗ると家路についた。

翌日、気乗りはしないが、英樹と数人の幼友達と古浦海水浴で泳ぎ、穴道湖湖畔で会食をして家に戻ると、彩世から電話がかかってきた。

「彩世さんですね」

「はい」

祐二は、彩世の声を聞いて慎吾に会ったことを告げそうになったが、辛うじて堪えた。

「何か急用でも」

と祐二が尋ねた。

「いえ、お母様のご容態を聞きたくて」

祐二は

(母の容態ってなんだろう?)と考えた。

祐二の脳裏に、遅かったと、怒る元気な母親の顔が浮かんだ。

一瞬、彩世の言う意味が分からなかったが、やっと思いだした。

(そうだ、あの時、咄嗟に母が病気などと嘘を付いていた)

彩世は、祐二がすぐに答えられないのは、よほど病気が悪いと思っただのか、

「やっぱり、ずいぶん悪いのね」

祐二は慌てて否定する。

「一時は心配しましたが、もう元気になりました」

「そうなの、それを聞いて安心しました」

彩世が疑っている様子がないので祐二はほっとした。

「祐二さんは、お母様の病気が治らないのに京都へ戻れます?」

彩世が気兼ねして尋ねた。

「戻りますよ。そして、彩世さんに逢いに行きます」

「よかった」

彩世は心底嬉しそうに言った。

「じゃあ、明日の十三時ごろ、高梁駅に着きます」

彩世と打ち合わせを終えた所へ父親が来た。

「昨夜の様子から、聴いても無駄と思うが、見合いの結果はどうだった」

「どうやら、両親は、祐二の心情（断られた）を察して、祐二が冷静になるまで、結果を聴かないようにしていたのだ。」

祐二はとぼけて言った。

「何が」

「振られたのか、やっぱりな、あの娘は美人だし、親がいくら結婚を勧めても。今日まで、うん、と言わなかったのた。それを心配した親が俺に、お前の息子、祐二なら結婚したいというかもしれないから、見合いをさせてくれと何度も頼まれ、無駄と分かっていても断れなかったんだ。と人の所為にしているが、実は、祐二とめぐみさんの結婚をわしと母さんは願い、万が一の可能性に賭けていたのだが、残念なことになったな」

祐二にすれば、残念でもなんでもない。

「振られて辛かったでしょう。祐二が女性にもてるには、女性の心理を勉強する必要があるわね」

残念そうに母親が言った。

「僕は辛いよ、だから、もう、軽々しく見合いをさせないでくださいよ」

祐二は、わざと哀しそうに振る舞い、それ以後は、誰とも話さなかった。

両親は、よほど祐二が苦しい思いをしたのだと、勝手に推理し、翌日、祐二が帰る時などは、腫れ物を触るように祐二を送り出した。

(よし、これで、見合いの話は当分の間はない)

安心して、祐二は、故郷を後にした。

祐二が備中高梁駅の改札口を出ると、彩世が迎えにきていた。

「来てくれたのね」

彩世が嬉しそうに近寄ってきた。

「迎えにきてくれて有難う」

彩世の顔を見て、祐二は誰にも渡したくない、無論、慎吾でも、と言いつ思いが頭の中を駆け巡った。

「祐二さんの顔が優れないのは、お母様のご容態が芳しくないのね」

彩世は心配げに尋ねた。

祐二は、彩世に自分の苦悩を悟られないように、出来るだけ平静を装っていたのだが、彩世を騙せなかった。

だが、彩世には真実を話せないため、仕方なく母親のせいにした。「心配してくれてありがとう。母の病気は軽い食中毒だったんで、すぐに治ると言うことで、安心したよ」

「命に関わるものでなくて良かったわ」
我が事のように彩世は喜んだ。

彩世に逢ってから、何度も嘘を付いてきた。しかし、その度に良心が疼き、二度と嘘を付かないと誓いながらも、嘘の連続だった。これからも、嘘を付き続けなければならないと思うと、祐二の心は一層、暗くなる。

母親の話題を避けたい祐二は明るい声で尋ねた。

「彩世さん、写生は終わりましたか？」

「はい」

「ユリさんを思う彩世さんの優しさに、僕は感服しました」

「そんな大袈裟に言わないください。ユリと河原とカワラナデシ
この花は私の心も支えなんです」

「そうでしたね」

「もしかしたら。優しいユリが、私と祐二さんを出逢わせてくれた
んだわ」

と顔を赤らめて言った。

慎吾との婚約を解消するつもりで彩世は慎吾を省いた。もし、慎
吾に出会わなかったら、今の言葉で、祐二は、即座に、愛を告白し
ただろうが、今は苦痛だ。

「河原へ行きます?」

と彩世が聞いた。

「行きたいが止そう。何故なら、高梁川の上流の新見市では、豪雨
が降っていたから、もしかすると、洪水が発生して、河原が水没す
るかもしれないのです」

「じゃあ、どこえ行きましょう?」

と、彩世は恋人に甘えるような口調で尋ねる。

だが、慎吾に出会った祐二は、彩世とこれ以上親しくしてはいけ
ないと思い。

「以前に見物できなかった高梁市の名所旧跡巡りをしたいですね」
名所巡りをしている間。祐二は彩世との関係を他人に見られても、
恋人関係と見れないようにしていたので、彩世には急に人が変わっ
たように感じたのだ。

「私はまた病気になったのかしら?」

彩世は哀しげに祐二を見る。

「病気、どうして?」

「だって、急に祐二さんが遠くへ行ってしまったような気がしてな
らないの」

彩世を不安にさせてのは、自分にあると気付いた祐二は、
「そつだ、展望台へ行つて、町をみましよう、きつと、気分が晴れる筈です」

祐二と彩世にとって、ループ橋の展望台は、二人だけの世界になれる場所であり、今回は、祐二が彩世と慎吾の婚約解消を奨め、彩世は、婚約を解消したいと、祐二に告げる場所となり、同時に、互いに愛を告白する場所でもあった。

だが、慎吾が現れたために、祐二には、別れの場所となつてしまつたのだ。

哀しみを隠し、祐二が、展望台から景色を眺めていると、

「祐二さんは、この展望台がお好きなのね」

「大好きです。高梁川とこの町、そして、この展望台は僕の愛哀の故郷でしたからね」

聞いた彩世の顔が曇つた。

「愛の故郷でした、と言つたけど、でしたからね、つてもう来ないと言つ意味ですか」

と不安そうに尋ねた。

「ごめん。いい間違いです」

祐二は、苦しい言い訳をした。

「もう、哀しいことは言わないでね」

言つた彩世の目に涙があつた。

「分かりました。僕は、彩世さんに誓います。来年、カワハラナデシコの花が咲いている頃までには、彩世さんに慎吾くんを会わせることを誓います」

祐二の言葉が彩世の幸せを完全に奪った。

「もう、諦めていたのに、そんなこと誓っていいの？」

彩世は、反対出来ず、哀しげに言った。

「大丈夫、絶対に見付だしますから」

見付ださないで下さいとも言えず

「はい」

と、短く答えるしかない彩世だった。

「良かった。これで安心して京都に帰れます」

「もう、帰れるの？」

彩世が悲しそうにそう尋ねた。

「彩世さんも、二、三日中には、京都へ戻るでしょう、だから、す

ぐ逢えますよ」

「そうだったわね」

彩世は、無理に顔を明るくした後で

「今日の私はどうかしているわ。祐二さんが話す一言一言が私には、祐二さんの別れの言葉に聞こえるのです。ごめんなさいね」

「何だ、そんなことを心配していたんですか。ここで、彩世さんに約束します。僕は、彩世さんからどんなに遠く離れた所に居ても、

何時も彩世さんを見守っていますと、約束をしたでしょう」

「そうだったわ。私、どうかしているわ」

彩世は涙を浮かべる。

「彩世さんを心配させないためにも、京都へ戻ったら、すぐ、逢いましょう」

「すぐ、逢えるのね。そのことを忘れていたわ」

彩世は急に明るくなった。

彩世が祐二を駅へ送り届けると、すぐ、やくも号は入ってきた。祐二は彩世に挨拶もそこそこにして、電車は祐二が乗った。電車は、すぐ、暗いトンネル内に入った。

「高梁川よ、教えてくれ。僕が子供の目を気にせず、彩世さんに逢っていたら、僕が彩世さんの恋人になれましたか？」

答えを探す祐二の目に映ったのは、希望を失った祐二の心のようなトンネルの暗さだ。

（愚かな質問だった）

その時、電車はトンネルを抜け出し、高梁川の横を走っていた。

高梁川に目を向けた。

（さよなら）

愛を失い、哀だけが残った故郷に万感の思いを込め、永遠の別れを告げる祐二だった。

125話二者択一

祐二の夢と希望が叶いそうになったとき、慎吾が現れ、その夢は儚く消え、その哀しみを癒す間もなく、次の試練が待ち受けていた。

「榎山」

会社に出勤した祐二は同僚の鈴木に呼び止められた。

「おお、鈴木か、丁度よかった、山陰名物のアゴの蒲鉾だ」

祐二が土産物を渡した。

「有難う、妻は、島根へ旅行に行った時、飛び魚の蒲鉾を初めて食べてから、その美味しさを忘れないと言っていたから、きつと大喜びするよ」

「そうか、持って帰ってきた甲斐がある」

「ところで、結婚してから、何時も遅刻寸前に出社するお前が、こんな早い時間に出勤していたとは驚きだ。なにかあったのか？」

「就業前に、お前と話をしたくて、待っていたんだ」

「僕と？」

そこへ、社員が続々を出社してきた。

「そうだ、しかし、お前の出勤が遅いので、話す時間がなくなってしまう。だから、昼食時、何時もの喫茶店へ来てくれ」

「分かった。だが、その顔から判断すると深刻な話のようだな」

頷いて、鈴木は立ち去った。

昼食時、祐二が急いで喫茶店へ行くと、鈴木が来ていた。

「もう来ていたのか」

「昨夜から、じっとして居られない心境なんだ」

「じゃあ、話を聞こうか」

「困ったことになったよ」

鈴木は言ってから、しばらく沈黙した。

「お前、もしかすると離婚するのか？」

鈴木があまりにも深刻な顔をしたので言った。

「馬鹿、間もなく子供が生まれるんだぞ、縁起でもないことを言っ
な」

鈴木が顔を真っ赤にして怒った。

「すまん。だが、他にそれ以上の重大なことがあるのか？」

すると、鈴木が声を潜めて言った。

「知っているか」

「なにを？」

「我が社は、間もなく倒産するらしいよ」

「ええ、本当！」

確かめる祐二の顔から血の気が退いた。

祐二は、失恋の哀しみから逃れるためには、仕事に熱中するしかないと考えていた矢先に、その仕事もなくなると知らされたのだ。

「本当だ。俺は昨日、上司が話しているのを聞いて、目の前が真っ暗になったよ」

「僕も辛いけど、お前は結婚しているし、お子さんが生まれるからなあ」

「そうなんだ。この十月には子供が生まれるんだ。俺はこれからどうすればよいかわからなくなったよ」

「大変なことになった」

「でも、まだお前は良いよな。独身だから」

と、鈴木が祐二を見る目の奥には、助けてくれ、という悲鳴に似た悲しみがあつた。

「話が本当なら、僕は明日から新しい職場を探してみるよ。もし、良い情報があれば、まず、君に紹介するからな」

祐二は鈴木を勇気づけた。

「頼むよ」

鈴木の声は必死だった。

「任せておけ」

言つて、祐二は自分の胸を叩いた。

「有難う、その言葉を聞いて、気持ちが楽になったよ」

「それは良かった」

と言つと、祐二が立ち上がり、鈴木に深々とお辞儀をして言った。

「有難う」

「何の礼だ？」

鈴木が驚いて尋ねた。

「君に慎吾と言う学生が居たら教えてくれと頼んでいた件だが、あの学生を見付けだすことが出来たんだ。一年間も協力してくれた礼だよ」

「そうか、それは良かった」

「全てが良いことはなかったのだ。彼に会ったとき、名刺を渡したんだが、迂闊にも、お前の名刺を渡してしまったんだ。その場の空気が訂正できないと考え、慎吾くんには鈴木で通すことにした。適当な時期を見計らって訂正しようと考えているんだが、無断で、お前の名前を使ってすまないことをした」

「なんだ、そんなことが、気のすむまで使っていていいよ」

今の鈴木的心境なら、取るに足らないことだった。

「許してくれて有難う」

一時間ほど、祐二と鈴木は今後について話合った。

「じゃあ、妻が待っているから帰るよ」

「それがいい。奥さんは、きつと、心細い思いをしながら、お前が帰るのを、今か今かと待っているだろう。今後、用があれば僕を呼びつけてくれ」

鈴木は、幾分晴れた顔して帰っていった。

二日後、祐二が会社へ出勤した時、退職を募る用紙が届いた。

どうせ倒産するなら、身軽な独身の者が先に辞めるほうが良いと考えての決心だった。

祐二は翌日、出社すると、さっそく退職願いを提出して会社を辞め、職探しを始めた。

在職中は、何時でも就職出来ると多寡を括っていた祐二も、いざ、職探そうとするとその困難さを思い知らされた。

失恋と失業は、共に人生を託した相手から必要とされなくなったことである。その二つを同時に無くした祐二の心は虚しさで一杯だった。

そんな時、彩世から、逢いたいとのメールが携帯に届いていた。

慎吾の所在を伏せ、その上、失業している身、まして、慎吾の悲壮で苦しげな姿を見た時、思わず、彩世を諦めると慎吾に誓った祐二としては、いくら彩世に逢いたいを思っても、逢うというメールを送れなかった。

だが、彩世は、祐二が退社する時間を見計らって、電話をかけてきた。

愛する彩世の声を聞いた祐二は断ることが出来ず、逢う場所を指定した。

「三十分後、彩世さんのマンション近くにある、追憶という喫茶店で逢いましょう」

祐二は喫茶店へ車は走らせた。

彩世は祐二が来るのを待ちわびていたのか、祐二が店に入ると、今

にも泣き出しそうな顔をして、手を振って自分の居場所を示した。

その顔を見て、祐二の決心が崩れそうになる。

「待っていてくれたんだね」

さり気なく言って、祐二は席に着いた。

「待ち切れず早くから来ていたのよ」

その言葉に、祐二は思わず、愛していると言いつづけたが堪えて言った。

「コーヒーください」

と、ウエイトレスに注文した。

そして、彩世に尋ねた。

「スケートの練習をしましたか？」

「中止したのよ」

彩世があまりにも簡単に応えたので、驚いた祐二が尋ねた。

「また、どうして？」

「練習をしていると、損傷した箇所痛みが走ったので、お医者さんに行ったら、まだ完全に治っていないと言われたの。だから、今後のことを考え、今年中は練習を休むことにしたのよ」

「将来のことを考えると、それが最善の方法かもしれないね」

「この間、何もすることが無いので、慎吾さんを捜したいと思っています」

「それは、いい考えだ」

信吾の所在を知る佑二としては、そう言うしかなかった。

「そこで、大学やフィギュアの友人知人、全ての人たちに信吾さん探しを頼みたいを考えているの。だから、もし、友人知人から信吾さんの情報を得た時は、捜しだしてくれた人と一緒にいくことになりませんが、それでいいですか？」

彩世は佑二に、それとなく同伴を断った。

「大賛成です。まさか、あなたの友達を差し置いて、僕がいくのは僭越ですからね。どうか、早く捜しだせるように祈ってます」

と言ったが、心の中を冷たい風が吹き抜けた。

（彩世さんが僕に好意を抱いていることは分かっていた。しかし、その好意は信吾君に対する愛とは違っていったのだ。だから、一年以上も経っても捜しだせない僕には任せず、自分で探し出そうと考えたのだ）

佑二は彩世との終わりを感じた。

その時、身体の不自由な中年男性を支えて、妻らしき女性が店へ入ってきた。

女性は、自分の肩を男性の脇に入れ、周りのテーブルや椅子に注意を払いながらゆっくりと歩いてくると、彩世に挨拶をしてから、一番奥の席についた。

「知り合いですか」

佑二が尋ねた。

「ええ、祖父母の知人で、時々、お手伝いするのよ」

「身体の不自由な男性をお世話するのは大変なことでしょう。奥さんは、大変な思いをしているでしょうね」

「あのご夫婦は、互いに好き合って結婚したのよ。何時も奥さんは言っているわ。私は愛する人の世話が出来て嬉しいと」

「優しい奥さんですね」

「女性として、愛する人の世話が出来るのは嬉しいことよ」

彩世は当然のように言った。

「彩世さんも」

聞くのは失礼と思ったが、思わず質問した。

「はい、私も女性ですから」

彩世は気を悪くせずに答えてくれた。

(彩世さんが慎吾くんを捜し当てたら、あの女性のように、慎吾くんを愛し

労つても見捨てることはないと、彩世さんが言葉で示した。僕は慎吾くんのひた向きな愛と、その苦しむ姿をみて、思わず彩世さんの心を見無視し、諦めると誓ったが、心のどこかで、彩世さんが選ぶのはどちらかと、少しの希望を持っていた。しかし、それも消えてしまった。だが、その答えが正確に分かるのは、彩世さんが僕に慎吾さんを見つけたと言わず、慎吾くんを捜すのを止してと言ったときである)

絶望の中、まだ少しでも希望を残したい佑二である。

「お食事、まだ、なんでしょう」

佑二の心を知らない彩世が明るく言った。

「その時間が無かったものでね」

「じゃあ、私がお料理するから食べてくださる？」

彩世は、佑二が失業や慎吾の消息を隠していることに気づかず、無邪気に、佑二を自室へ招こうとした。

「ありがとう。彩世さんにお弁当は美味しかったね、あんな美味しい食事を断るのは勇気がいりますが、それ以上に女性のマンションへ入るのはもつと勇気が入ります」

彩世の好意は絶対に受けられないため、それとなく断り、ウエイトレスを呼んだ。

「僕はサンドイッチ、彩世さんは？」

彩世に尋ねる。

「じゃあ、同じものを」

彩世は、失望を隠し、明るく言った。

二人の簡単な食事が終わった。佑二が何気なく腕時計を見ると、その様子を見ていた彩世が、気をきかせてくれた。

「お仕事で疲れているんでしょう」

「そうなんだ」

「じゃあ、引き止めるのも悪いわね」

彩世は、寂しげに言った。

「今度は、ゆっくりと逢いましょう」

佑二は、身を切るような切なさを抑え、さり気なく言った。

「きつとよ」

彩世は、嬉しさを顔をいっぱい表し念を押す。

頷いた佑二は立ち上がり、彩世の目を見ると、別れが哀しいのか、

もう、帰るといふ目で見返す。

(この悲しげな顔も、友人としての別れの辛さなのか)

辛い心を抑え、車に乗った祐二は、彩世に手を振り、車を発車させた。

彩世は、その日から人が変わったように、祐二に逢ってくれとは言わなくなった。

祐二は、彩世が慎吾を探し出す前に、慎吾との縁を断つことが必要だと考え、慎吾に会いにいった。

慎吾は祐二の顔を見ると、感激したのか、恥ずかしさも忘れ、涙を流していた。

祐二は、慎吾を抱いたり、背負ったりする時、両足の筋肉が微妙に動いたのを感じたため、リハビリをすれば歩けると慎吾に教えた。聞いた慎吾の顔が急に生き生きと輝き

「僕は、一人で歩けるんだ！」

と嬉しそうに両手を上げた。

祐二は、考えていたことを実行するために言った。

「これからドライブに行かないか」

祐二は、慎吾を高梁川へ連れて行きかけたが、意図を感付かれる恐れがあると考え、加古川へ連れていった。

川は、慎吾を一年前の高梁川へ誘い、彩世にどうしても会いたいと思わせたのか、祐二に彩世との経緯を話した。

「君が男なら、いや、人間なら、自尊心より、彩世さんの心を安らかにしてあげるために、一日も早く会って、今日までの無礼を謝ることだ」

慎吾は祐二の叱りを愛の忠告と受け取り、リハビリに励んだ。祐二は慎吾が挫折しないように、十日に一度は見舞いに行った。

やがて、十二月が間近に迫ったある日、慎吾は動く足を祐二に見せた。

「よかったね、半年もすると一人で歩けるよになるね」

「これも、鈴木さんの励ましがあつたからです。これからも、長く付き合ってください」

「そつしたいが、出来なくなつたんだ」

「何故ですか」

慎吾が不安そうに聞く。

「実は会社が倒産寸前で、慎吾くんと会ったり電話したりする余裕がなくなつたんだ」

「大変な事態が起きていますね。もし、良かったら、僕の父が経営している会社に就職してください」

「嬉しいね、どんな、仕事をしている会社ですか？」

「インターネット関連です」

「いい仕事ですね。でも、お誘いを受けることが出来ません」
何故かと慎吾が悲しそうな顔をして聞いた。

「僕は商社勤務を一生の仕事と考えているからです」

祐二に仕事を選択するほどの余裕はない。だが、慎吾が関係する会社には、例え、飢え死にしようとも就職できないのだ。

「このまま、会えないばかりか、電話もできないのは辛いです。どうか、電話くらいさせてください」

慎吾は必死になって言った。

「だめだ。歩く努力は並大抵でない。人に頼る心は禁物だ。僕も慎吾くんに会えないのは悲しい。そこで、提案したい。互いに年を取り、現役を退いたとき、君は僕を、僕は君に出会うための旅に出るもし、捜し当てたら、楽しく過去を語り合いましょう」

「淋しいけど、僕は鈴木さんに胸を張って会えるよう、これからの人生をがんばります」

慎吾は、祐二の真意を知らず、祐二の意に従うことにした。

祐二の望みどおり、彩世が慎吾を捜し出す前に慎吾との縁が切れた。

十二月下旬。

祐二は、寒い夜間の道路補修工事作業から帰り、一眠りしようとしとき、早起きの母親が電話をかけてきた。

「元気にしている？」

「なんだ、母さんか」

祐二は、何時ものように、無愛想に答えた。

「母さんで悪かったわね。所で、良い仕事見つかったの？」

「まだ」

両親には、夜間工事の作業をしていることを伏せていた。

「不貞腐れているような態度だわね。もし、仕事が見つからないのなら、すぐ、帰ってきて、父さんの手伝いをしなさい」

「帰らないよ」

「なぜ？」

「皆に迷惑をかけるから」

「誰に？父さんや保は、ぜひ帰ってこいと言っているわ。それでも、帰らないというのなら、訳を話なさい」

祐二は、家族の暖かい思いやりに涙が出そうになる。

「他にも良い職があるのよ。すぐ、帰ってきなさい。でないと、その職は他の人に奪われるわよ」

寒い夜間作業に従事し、その仕事も今日で終わり、また、失業した祐二には、飛び付きたいほどの嬉しい話だが、それを素直に受けられない訳があった。

島根県の就職難は子供の時から知っていた。そのため、高価な車に乗って帰ると決心したのは、設立した会社を故郷へ移転し、出来るだけ多くの人たちを雇用し、経済の発展を促し、やがては、失業者ゼロになるような貢献をしたいと考えていたからだ。

（僕が実家へ帰ったら、兄さんの帰る場所が無くなってしまふ。国

会議員は何時落選するのか分からない。落選すれば帰る場所も職も無くなる。兄が、そんな不安な気持ちを抱いては、国の安全や国民の幸せを守るための思い切った政治行動が出来なくなり、汚職に関わる恐れもあるのだ。兄をそんな議員にしたくない。また、僕が故郷で職に就けば、故郷の人が一人失業することになるのだ。僕の望みは、故郷の人たちに、良い職場を提供をするだった。だから、今の僕では、例え飢え死にしようとも帰れないんだ」

「母さんごめんよ。父さんや兄さんの優しい思いやりを背いて悪いけど、僕は、もう、田舎で暮らせない人間になってしまったんです」
祐二は心で嬉し泣きをしながら断った。

「仕方ないわね。でも、気が変わったら何時でも帰ってきなさい」

祐二は、礼を言ってから、住まいを伏見区に変えたことを報告した。「そう」

母親は祐二の苦境を感じたのか、言葉少なく言っただけで電話切った。

（ありがとう、母さん、そして、父さんや兄さん妹も）

祐二が夜間作業に就いたのは、彩世と慎吾との付き合いと、職探しのためには、夜間の仕事が便利だと考えたからだ。

住所を変えたのは、収入が少ないためであった。

母親が電話を切ると、祐二は一眠りしようとしたが、親兄弟の心配顔が目に見えて眠れなくなり、職探しに出かけずにはいられなかった。

そこで大阪へ行った。だが、年の瀬も迫った今日、社員を採用する企業はないと考えた祐二は、年末年始だけでも働けるアルバイトを捜したが、住所が遠いからと断られた。

やがて、昼飯時になった。そこで、梅田の地下食堂に行ったが、どの店も幸せそうな人たちが楽しそうに食事しているのを目にし、自分が食事するのは場違いのように思えたために、地上へ上がり、静かな喫茶店を見つけた。

店内に入った祐二が、着く席を捜していると、一人の男が席に座り新聞を読んでいた。

驚いた祐二は駆け寄り挨拶した。

「岡本さん、榎山祐二です」

男も祐二の声に驚いたように、顔を上に上げた。

「やあ、君だったか、久しぶりだね。元気にしていたんだね」

「はい、身体だけは」

岡本は、祐二を労るように言った。

「君が勤めていた商社は倒産したんだね」

「ええ、残念ですが」

「失礼だが、新しい職は見つかったかね」

岡本に嘘をつく必要もないので、素直に答えた。

「まだなんです」

恥ずかしそうに祐二が言う。と。

「それは良かった」

と、岡本が嬉しそうに言った。

「良かった？」

祐二が悲しそうに言った。

「すまん、実は、我が社の社員が一人退職したので、経験者を捜していたんだ。もし、良かったら、我が社に就職してくれないか」

「それは本当ですか！」

祐二が悲鳴にも似た喜びの声をあげた。

「君に嘘などつかないよ。すぐ、我が社に行こう」

「でも、採用されるかどうか心配です」

「大丈夫。なぜなら、採用は私に一任されているんだよ」

「そうですか。それは有り難うございます」

と、言った祐二の脳裏に、生まれたばかりの赤ちゃんをかなしげな顔をして抱く、鈴木顔が現れた。

（良い職が見つかったら、まず、君に紹介すると約束したけど、僕は岡本さんと一緒に仕事がしたい。だから、今回は我慢してく）

と心の中で鈴木に謝った。しかし、また、悲しそうな鈴木顔が現れた。

祐二は耐えられなくなって言った。

「岡本さんの好意は、死ぬほど嬉しいです。でも、僕は、常々、消防士になりたいと考えているので、その道に進むため、次の消防士の試験を受けたいと思っています。そこで、身勝手ながら、お願いがあります。僕の同僚は、生まれたばかりの赤ちゃんが居ながら、今、失業しています。彼も商社経験者です。お願いですから、彼を雇っていただけませんか、いや、ぜひ、雇っていただきたいと願っています」

自分の幸せを捨てても、友を助ける祐二の優しさに岡本の顔は歪み、目から涙が出た。

「分かった。君の願いを聞いて上げるから、明日、私の所へくるように伝えてくれたまえ。そうだ、名前は？」

「はい、鈴木と申します」

「じゃあ、鈴木君に、この名刺を渡してくれたまえ。君も困ったことがあれば、私に相談してくれよ」

岡本は祐二にも名刺を渡した。

「よろしくお願いいたします」

頷いた岡本は腕時計を見て言った。

「勤務があるので帰るけど、ゆっくりしたまえ」

言っと、岡本は立ち上がり、祐二の飲食代金を払ったのち、祐二の所へ戻り、「二者択一は悲しいね」

と、淋しそうに言って、喫茶店を出ていった。

その姿に、祐二は立ち上がると、深くお辞儀をして見送った。

数日後の十二月二十六日

祐二は年の瀬の賑わいを別の世界のことのように思いながらいると、電話が鳴った。

（彩世さんだ）

久しぶりに、彩世の声が聞こえると期待して電話に出た。

「榎山です」

彩世に対して、恋をしないと心に誓いながら、彩世からの電話を待つ祐二。

だが、期待した人からのものではなかった。

「天見です。永らくご無沙汰いたしておりました」

第134話 お伽話はお仕舞い

「あつ、彩世さんのお父さんですか」

「はい。今日は、急に色々と相談したいことがございましたので、今、京都駅に來ています。差し支えがなかったら、少しの間、会って頂けませんか」

「いいですよ。すぐ、行きます」

祐二は車を走らせる。車のフロントガラスに、今年、初めての雪が当たって散る。

彩世の父親は、改札口で待っていた。

「忙しい所、ご無理を言つてすみません」

父親は恐縮して言った。

「いえ、今日は日曜日なので、何の予告もありませんから、どんなことでも相談してください。そうだ、駅の外へでると、雪が降っているのでも寒いんです。だから、この駅ビルの中でお話を伺いたいと思っています」

「ご配慮ありがとうございます」

祐二は駅ビルの中にある喫茶店へ案内した。

席に着くと、父親はますます恐縮した態度で話し出した。

「昨夜、彩世が私に言つたんです。もう、これ以上、櫻山さんに愼吾くん捜しをお願いするのは心苦しいと言つのです。その話を彩世は自分の口から直接、話したいと言つていたのですが、風邪で伏せていますので、私が代わりにきました」

(愼吾くんに会つたんだ)

祐二は自分の身体から血が抜けて行くのを感じた。

「よく分かりました」

「こんな時がくることも予想していたので、冷静に答えていた。

「分かつて頂き、有り難うございます」

父親の顔に安堵が広がった。

「お礼などいいんですよ」

祐二は、いつの日か、この日がくるのを覚悟していたとはいえ、涙が出そうになる。

父親は、祐二の心情に気付かずと言った。

「今、彩世は家で、樫山さんを巻き込んだのを後悔しているんだと思います。どうか、許してやってください」

父親は平謝りに謝った。

「許すも許さないもないです。これは、僕が言い出したことですから」

「有り難うございます」

礼を言った後、父親は何かを言おうか言うまいか迷っているようだったが、結局、何も言わなかった。

その様子を見て、祐二は、慎吾を捜し出したことを話すか話さないか迷っているのだと思ったので、彩世と祐二の触れないように世間話をすることにした。

彩世の父親は、祐二の哀しみが分からないのか、楽しそうに祐二と会話していたが、ふと気付いたように言った。

「彩世が待つているので帰ります」

祐二は、改札口で彩世の父親を見送ったが、今日から、彩世や天見家の人たちと無縁になると思うと、急に切なくなり、急いでプラットフォームに駆け上がった。

祐二がホームに上がると、幸いにも彩世の父親を簡単に見付け出すことができた。

「こちらに居られたんですね」

彩世の父親は驚いて振り返って尋ねた。

「どこへ行かれるんですか？」

「いえ、お見送りに来ました」

祐二の顔を見た父親は、喜びの表情を表し、目を潤ませ、感謝の言葉を述べた。

「有り難うございます」

二人は電車が来るまで、別れを惜しむように話し合っていた。

周りでは、はや、帰省する家族の姿が沢山あり、子供たちがホーム上で追い駆けっこしていた。

突然、祐二の携帯電話が鳴った。

祐二は、彩世の父親から、少し離れた所へ行き、携帯電話を取り出し、誰かを確認しようとした時、携帯電話が祐二の手からはじき飛ばされ、ホームに落ちると、勢い良く滑り線路内に落ちた。

携帯電話が落ちた原因は、帰省客が連れていた二人の子供が追っ掛けっこしていて、逃げる子供が祐二の腕に激しく当たったためだった。

祐二が携帯電話を拾おうとして、線路内を覗いた時、博多行、のぞみ号が入ってきた。

「携帯電話、大丈夫でしょうか」

彩世の父親が心配そうに尋ねた。

「小さいから電車に轢かれる心配は無いし、最近の携帯電話は頑丈だから、落ちたくらいで壊れたりしませんよ」

「それもそうだね」

と、彩世の父親は納得していた。

携帯電話は、あの程度の衝撃では壊れない。まして、細いつるつるの滑るレールの上に乗るのは非常に難しい。

のぞみ号が停車し、ドアが開くと、下車客が続々とホームへ下りた。終わると、一列に並んでいた乗車客が乗り始めた。

祐二が名残惜しげに、

「今度は、ゆっくり遊びに来てください」

淋しそうに祐二がいった。

「榎山さんもお元気で」

彩世の父親は、なぜか、笑顔でのぞみに乗った。

(彩世さんは、大学の友人知人に慎吾捜しを依頼したと言っていた。男の人脈は少ないが、女性の人脈は多いだけでなく、噂さえ味方にし、多くの人達に知れ渡るため、捜し出せたんだ。だから、彩世さんは僕に直接、話さず、父親を介して伝えてきたんだ。その理由は慎吾くんを選んだからだ)

すると、慎吾の嬉しそうな顔が現れた。その顔は祐二が「君の足は歩けるよ」と言った時の顔だった。

そして、慎吾を初めて背負った時の感覚が蘇ってきた。その時、慎吾は緊張のあまり、身体を極端に固くしたが、運動神経が発達している祐二には、慎吾の足が瞬間だが微妙に動いたことを感じとっていたのだ。

(仕方ない。慎吾くんは、彩世さんの初恋の人だもの)

祐二は気を取り直し、駅員に携帯電話のことを話すと、快く捜してくれたが、粉々に壊れていた。

その破片を目にした祐二は、彩世との仲が終わったことを再認識した。

(彩世さん、慎吾くんに会えて良かったね。僕は慎吾くんが彩世さんに、何の連絡もしないことを責めたが、僕も、貴女に連絡せず姿を消します)

祐二は、哀しみを堪え、プラットホームを駆け降り、車に飛び乗った。

粉雪舞う中を当てもな車を走らせていた祐二だが、何時の間にか彩世と逢っていた、追憶という喫茶店の前へ来ていた。祐二は車を止め、車内から喫茶店内を見る。だが、彩世と逢っていた席には若い男女の姿があった。

もし、その席が空いていたら、祐二はその席に着き、彩世と過ごした楽しかった日々を思い出し、今の苦しみから逃れようとしただろ

うが、現実には、それさえも許されなかった。祐二の胸を千切れるほどの切ない思いが襲う、堪らず祐二は、また車を走らせる。着いた所は彩世に初めて逢った桂川。だが、今日はリセットしにきたのではない。運命を受け入れるために来たのだ。

祐二は車から降りると、彩世と初めて逢った河川敷へ下り、川へ向かった。辿り着いた川の川面には、降る雪により出来た無数の小さな丸い波紋を作って消えていた。

祐二は、その波紋の中に、彩世と過ごした愛哀の一年半がお伽噺の絵本を一枚一枚めくるように現れて消えるのが見えた。

「悲しい思いをしたこともあったが、今に比べれば、本当に幸せな日々だった」

呟いた祐二の目に涙が光る。

祐二は、しばらくの間、過去の思い出を追いかけていたが、過去を忘れるため、降る雪の一つ一つに、過去の一つ一つを託し始めた。（お伽話を聞いた僕は、八つの雲に乗ってお伽話の国へ行った。お伽の国は、僕を夢の世界へ誘ってくれた）

雪は祐二の過去を包み込み、川面に落ちては消えて行った。

流し終わった後で祐二が哀しげに呟いた。

「この一年半の間、僕はお伽話の国を彷徨っていたんだ。それも、彩世さんと慎吾くんのお伽話の国を」

過去を川を流し終わった祐二は空を見上げた。その目に降った雪が一瞬、涙を隠す。

祐二が気を取る直すように言った。

「お伽話の主人公は一人か二人、三人目の僕は道化師」

呟いた祐二の脳裏に、一年以上前ファミリーストランで相席になった。お伽話を語る祖母と、一心に聞く少女の姿が現れた。

「お伽話はこれでお仕舞い」

祐二は祖母の言葉を借りて自分に言い聞かせた。すると、祐二の耳に、祖母の言葉が聞こえてくる。

「子供は未来に生き、若者は今を生き、年老いた者は過去に生き、お伽話は人の心に生きると思うわ。さあ、元気をだして帰りなさい」と祐二を励ました。

「有り難う、僕は、これから、今を生きます」

祖母の言葉に励まされ、祐二は踵を翻したが、彩世への未練が残るのか、そのままの姿勢で動かなくなった。

「お伽の国で言いたかった言葉はただ一つ、それは、貴女を愛しています、でした。でも言えなかった、そこが、僕のお伽の国ではなかったからです」

哀しげに叫ぶと、未練を断ち切るように、河川敷を駆け抜け、車に飛び乗り、雪の中へ消えて行った。

今朝、彩世の父親が家を出たとき、高梁市には小雪が舞っていた。彩世は、数日前から風邪により床に伏せていたが、どうしても今年中、祐二に逢い、慎吾捜しの中止を要請したかった。

そこで、風邪の苦しみに堪えながら出掛けようとしたとき、両親の強い反対により断念した。しかし、彩世の悲しみを見た父親が、その役目を買ってでたのだ。

父親が出掛けた後、彩世は風邪の症状が少し良くなったので、床

から出ると、部屋の窓を開けた。

その途端、部屋へ冷たい風と、粉雪が舞い込んできた。彩世は、寒さを感じないのか、小雪が舞うのを見ていたが、時々、携帯電話を開いてメールがきているか見ていた。

しかし、時が経つに従い、その表情が曇ってくる。だが、哀しみはない。

やがて、彩世は、待つことに堪えられなくなったのか、部屋から玄関に行くと、ドアを開けて、雪が積もった庭に出て粉雪が舞落ちる様を見ていた。

しばらくして、彩世は、微かな声で歌を唄いながら、自分が演技したフィギアスケートの中でも、最も得意とした演目を粉雪の舞に合わせるように舞踊っていた。

無論、氷上でないため、軽やかさはないが、誰の目にも美しく見えた。

やがて、演技を終えた彩世は、頬をピンク色に染めて自室へ戻った。

「まだ、話は終わっていないのかしら」

呟いて時計を見る。

「もう、終わっている筈なのに、なぜ、祐二さんから連絡がないの」
彩世が不安げに呟いた。

祐二の会社が倒産した数日後、彩世は倒産を知っていたが、祐二が失業を隠しているため、知らない振りをし、いくら逢いたくても出来るだけ、就職活動の邪魔にならないように我慢しようと決めていた。

そして、慎吾との婚約を解消しなければ、祐二の愛を得られないと考えた彩世は、慎吾捜しに全力を注いだ。

また、捜し出した時、祐二が居る前で、慎吾に婚約破棄を言い渡すのは、余にも無情過ぎるを考え、祐二の同行を拒むことにしたのだ。

しかし、探し出せる保障がないため、探す期限を決めた。その期限が昨日だった。

昨夜、彩世は両親に慎吾捜しを中止することだけを話すと、両親は祐二の失業を知っていたので、ぜひ、祐二を天見酒造に雇いたい、そして、行く末は彩世の婿にと考えていたために、天の恵みとばかりに、彩世に代わって祐二に会いに行つたのだ。

だが、父親は、祐二の失業に付け込むようなに思えて言えなかったのだ。それを祐二は、慎吾を捜しあてたと考え、彩世が慎吾を選んだと解釈してしまったのだ。

そんなことを知らない彩世は、慎吾捜しを中止すれば、祐二が何故だと、電話をしてくる、その時、慎吾との婚約を解消すると伝えようとしていたのだ。

しかし、正午を過ぎても祐二から電話が来ない。彩世は待ちきれず、祐二に電話した。

「もしもし、祐二さん、彩世…」

言いかけた途端、彩世の顔が急に蒼白に変わり、待っていた携帯電話を落とすと、その目から涙が溢れ出た。

「祐二さんは、電話の相手が私と知って電源を切った！」

だが、すぐ、思いなおして、何度も電話をかけ直した、しかし、電源が切られていた。

彩世は床に倒れこみ泣いた。

祐二の携帯電話が切れたのは、携帯電話が電車で押しつぶされたからだ。

だが、それも知らない彩世は泣きながら言う。

「祐二さんが怒っている、あの優しい祐二さんを私は怒らせてしまった」

取り返しができない失敗をしたと、彩世の心は千々に引き裂かれた。

「父さんに頼んだから、祐二さんが怒ったんだわ、私が直接話すべきだった。今更気付いても遅い。私は、一番大切な人を失った。それも、私の不注意から」

堪えられなくなった彩世は、粉雪の降る中、祐二と一緒にいったループ橋の展望台方面へ、さ迷うような足取りで歩き出した。

彩世がループ橋の展望台に辿り着いたころ、祐二は桂川の河川敷に居た。

展望台に立った彩世は、祐二に語りかける。

「ここは、祐二さんと私だけの大切な場所」
言って彩世は泣く。

「もう、二度と祐二さんに逢えない私、でも、逢いたい」

彩世が流す涙が、積もった雪の上に落ち、米粒ほどの小さい穴を作る。

「本当に、もう、逢えないの」

雪は本降りになった。

「私は祐二さんに愛されていると思っていたから、慎吾さんを忘れ、祐二さんとの愛を育てようとしたの。でも、それは私の自惚れだったのね。教えて、今日まで私を支えてくれたのは、恋愛の愛でなく、人間愛だったの。私は人間愛でもいいから、私を見捨てないでください」

彩世の頭に粉雪が積もり始めた。

「いくら冷たい雪が積もっても、私には暖炉の前より暖かい。それは、ここが祐二さんの暖かい心が残っている見晴らし台だから」

やがて、彩世の身体が寒さでかじかんでくる。

「展望台に抱かれて、このまま、死んでしまいたい」

愛する祐二を失った彩世に生きる気力はなかった。

雪が彩世の体温を下げて行く。このままの状態が続けば、やがて、彩世は死ぬ、そして積もった雪の上に倒れるだろう。

その時、下方から電車が鳴らす警笛の音が届いた。

「祐二さんが、あの電車に乗って、私に逢いにくる」

嬉しそうに呟くと、閉じていた目をゆっくり開けた。

「幻だったのね」

彩世は、悲しそうに呟くと、目を閉じかけたが、急に目を開くと、あの警笛は、祐二さんが死ぬなど鳴らしたんだわ、今、死んだら、

私がこの世で、一番愛している祐二さんが、私にしてくれた全てを無にしてしまうことになる」

彩世は、悲しいが生きて、また、祐二にめぐり逢える日を待つことにした。

父親は帰ってくるなり、床に伏せている彩世に言った。

「喜べ、祐二くんは彩世の考えを分かってくれたと思う、だから、皆で遊びに来てくれと言っていたよ」

「ありがとう」

彩世は父親を苦しませたくないため、自分の苦しみを話さなかった。

「苦しそうだな」

父親は彩世の額に手を当てた。

「すごい熱だ。さあ、病院へ行こう」

言っと、父親は彩世を病院へ連れて行った。

彩世が治療を終え、家に帰ると母親が仕事を済ませて帰ってきた。

父親が説明すると、母親が心配そうな顔で聞いた。

「それで、容態は？」

「医者は、安静にしていれば、一週間ほどで治ると言っていたよ」
聞いて母親は安心しきれない様子で彩世に尋ねた。

「彩世、苦しい？」

「いえ、もう大丈夫よ、心配しないでね」

父親は、残念そうに言った。

「祐二さんに、天見酒造に就職をして頂こうと思ひ、彩世に代わって、会いに行つたんだが。失業と言う弱みに付け込むように思えて言えなかつたよ」

「私なら、正直に話し、今頃、祐二さんは彩世を見舞いにきていたわ」

母親が残念そうに言った。

「そうだね」

と、父親が言つて、部屋を出ていった。

「風邪が治つた、改めて祐二さんに逢つて話すんですよ」

言つと、母親も部屋を出て行つた。

彩世は、両親の話の聞いているうちに、自分の取り越し苦労のように思えてきた。

風邪をこじらせた彩世は、正月の三が日は寢床に伏せていたが、五日になつて、ようやく床から出られるようになった。

そこで、二日後、彩世は祐二に逢うために、祐二のマンションへ行つたが、引越しをした後だった。

（やつぱり、祐二さんは怒っている。もし、怒っていないのなら電話を掛けて来るはずだわ。そして、住所変更も告げないのが証拠だわ）

生きる気力も失せた彩世は、溢れる涙を拭きもせず、京都の町を

さ迷った挙げ句、死に場所を求めて桂川へきていた。

突然、携帯電話が鳴った。

（祐二さんだ）

そう思った彩世は、急いで電話を耳に当てた。

期待に興奮する彩世の耳に、父親の切迫した声が聞こえた。

「何かあったの！」

彩世が思わず聞き直すと、父親は心を沈めるように一息ついてから、

「母さんが脳梗塞で倒れたんだ。すぐ帰ってきてくれ」

父親の悲惨な声を聞いた彩世は、急いで帰っていった。

死んだような母親の姿を見た彩世は、母親が可哀相になり、何が何でも助けたいとの思いが祐二を忘れさせた。

母親の病気が治るのは三ヶ月ほどだが、後遺症による歩行困難が半年以上も続くだろうと、医師から聞いた彩世は、大学に休学届けを出し母親の看護に専念した。

第141部故郷へ

祐二が車で雪の中へ消えてから、八ヶ月が過ぎた八月二日。

一台の車が朝日を右後方に受けながら、高梁川に沿った道路を岡山方面から、高橋市へ向かって疾走していた。

やがて、その車は彩世の河原の横を通りすぎると急にスピードを落とし、ループ橋に通ずる道へ入りループ橋の登り口に着いた。

ループ橋の下には、木々が青々と生い茂り、小鳥が飛び交っていた。

そのループ橋を登った車は、無人の展望台に入ると、車のドアが開き、中から、消息を断っていた榎山祐二が出てきた。

祐二はゆつくりとした足取りで、展望台に先端に立って言った。

「高梁市へは、二度と来ないと誓いました、でも、私は、愛哀の故郷が忘れられず、また来ました」

八月二日は彩世が高梁川でカワラナデシコの花を写生し、百合の魂を慰める日である。

彩世の幸せを確かめるために、この展望台からそつと、彩世の姿を見に来たのだ。

祐二を歓迎するかのように、草木の香りを含んだ涼しい風が、祐二を優しく包む。しかし、今の祐二には、その歓迎を受ける余裕はない。

一心に彩世の姿を求め河原を捜した。

彩世ならどんなに遠くても見つける自信があったのだ。

しかしそこには彩世の姿は無かった。

「少し早かったか」

時を刻むごとに、展望台にも夏の暑い日差しが降り注いでくる。

どのくらいの時間がたっただろう、彩世の河原に米粒ほどの小さい人影が現れた。

祐二は、急いで、車から望遠鏡を取り出し、その人影を見た。

「彩世さん」

祐二は万感の思いを込めて名を呼んだ。

彩世の顔は以前と変わりなく美しいが、心労によるやつれは、祐二の心を締め付けた。

「一人で来たのは、慎吾くんを捜し出していなかったんだね」

祐二は沈んだ声で呟いた。

彩世のヘヤーバンドは、祐二を待っている印である。だが祐二は知らない。彩世を見る望遠鏡が涙で曇る。

曇ったレンズをハンカチで拭き、また望遠鏡を目に当てる。

河原には、祐二と彩世が種蒔きをしたカワラナデシコが美しく咲き乱れ、河原全体がピンク色に染められていた。

彩世は、カワラナデシコ群から離れた所で、一本だけ咲く花の前にパラソルを立て写生を始めた。

「はずかしいから見ないで」

聞こえる筈のない彩世の声が祐二に聞こえて来た。

(ごめん)

第142部

寂しそうに望遠鏡から目を離す。

「望遠鏡なしでは、彩世さんの姿が米粒程度しか見えないから悲しいです。でも、彩世さんがそう言うなら」

祐二は彩世が目の前にいるかのように言った。

見られているとも知らず、彩世は電車の音が聞こえてくるたび、写生を中止し、電車の方を見る。

慎吾が消えてから早、二年、祐二とは八ヶ月が過ぎ去った。この間、彩世の愛は慎吾と祐二の間で揺れ動いた。

だが、慎吾が消息をたつて二年は長すぎた。そして、祐二への愛は初恋より強い、真実の愛になっていた。

今、この河原で待っているのは慎吾でなく祐二であった。

その祐二に、二度と逢うことが出来ないと思う心が、彩世を一層辛くさせた。

彩世の心の支えは、この河原で待っていれば、何時の日か、必ず祐二が、川を渡って逢いにくるといふ希望だった。

急に空が曇ったと思う間もなく雨が降ってきた。彩世は絵が濡れないよう画用紙に急いでカバーを掛けた。

雨は通り雨らしく、しばらくすると止み、東の方へ移っていった。彩世は、祐二の話进行い出し、虹がどこかに出ていないかと探した。

しかし、その期待は外れた。

彩世は、通り過ぎてゆく雨に。

「祐二さんに逢わせてください」

祐二に見られているとも知らず、祈った。そして、彩世は写生を続けた。

悲しむ彩世の姿を見ても、祐二は動かなかった。

どのくらいの時間が経っただろう、彩世は突然、川下から騒めきを聞いた。

一瞬、彩世は祐二のお伽話が蘇り、通り雨による洪水が襲って来たと勘違いし、反射的に逃げようとしたが、昨日のことを思い出した。(アユ釣りのおじさんだわ)

と、彩世は無視しようとしたが、やっぱり見られずにはいられないため、音がした方へ顔を向けて驚きの声を上げた。

「あつ！」

川の中を慎吾が松葉杖を使いながら歩いてくる

「慎吾さん！」

思わず、彩世は感動の叫びを上げ、パラソルを倒しながら慎吾に向かって走った。

「彩世さん！」

慎吾も叫びながら急いで歩こうとしたが、義足の足では思うように歩けないが、懸命に彩世の方へと来る。

松葉杖で支えた川底に深い穴が開いたために、姿勢を崩した慎吾が川に倒れた。

駆け寄った彩世は慎吾を抱き起こした。

「慎吾さん」

「彩世さん」

互いの名を呼び合った。

第143部

望遠鏡でその様子を見ていた祐二は、予想していたかのように言った。

「慎吾くんに会えてよかったね」

しばらくの間、祐二は、彩世と種まきしたカワラナデシコの花の河原を見ていたが、呟くように、彩世に言った。

「彩世さん、僕は命あるかぎり毎年この展望台へ来ます。そして、彩世さんが一人で居たら、堤防へ行き、彩世さんから見えない草木の隙間から、そっと、貴女の顔を見ます。もし、彩世さんの顔が悲しんでいたら、河原へ降りて行き、何気なく『愛する高梁川に逢いに来ました』と言います。そして、彩世さんの心が癒えるまで、お伽話を聞かせてあげます」

言って、祐二は車に乗った。

祐二が展望台を出ようとしてとき、上から数代の車が下りてくるのが見えた。祐二は急停車し、車が通りすぎるのを待った。

先頭車の助手に乗っていた、色白の美しい少女が、祐二に手を振ると同時に、

「兄さん、車を停めて！」

と叫ぶように言った。

少女は、二年前、祐二の観光案内をした、頭から手足の先まで真っ黒だった可愛い少女。高梁すみれが、美しく成長した姿だった。

「駄目だ」

「どうして」

悲しそうにすみれが聞いた。

「ループ橋の道が狭いから、停車したら後続車に危険が及ぶからだ。よく後ろを見る」

すみれの目に数台の車が見えた。

「やっと会えたのに」

すみれが悲しげに言った。

「誰と？」

「私の自転車を治してくれた人よ」

「そのお礼に、観光案内をして上げた人だな」

「そうよ」

「その時、その人に恋をしたのか？」

すみれは、顔を真っ赤にした。

「中三の日の初恋か」

第144部

兄のからかいを気にせず、

「もう、会えなくなつた」

すみれが泣き出した。

「二年も経つたのに、まだ忘れられないのか」

「違つわ、私はただ、観光案内の続きをしたいだけよ」

言い当てられたすみれは、言い訳をする。

「良く聞け。あの人のことを彩世さんの恋人だと言つたのはお前だろ。既婚者や他人の恋人に恋することはいけないことだよ。でも、仕方ないか、初恋だもな。すみれの願いを聞いてやる」

「有り難う、お兄ちゃん」

「だが、観光案内だけだぞ」

「はい、サヨ姉さんには、とても勝てないと分かっているから諦めているわ」

ユリの弟の卓哉は今年高校を卒業し、岡山市の会社に就職し、買った中古車で妹とドライブしていたのだ。

車が通り過ぎたのを確認した祐二は、すみれや卓哉が待つ、ループ橋下出口へ行かず、進路を上を取った、涙が目を塞がないように、河原では、

「私に会いに来てくれたのね」

と、彩世が歓喜を爆発させるように言った。

感動で急に声がでないのか、慎吾がうん、と頷く。

「今日は、慎吾さんと初めて会つた日、また、会えて嬉しいわ」

「僕は今日まで彩世さんを一時も忘れたことが無かつた。でも、会いにこれなかつた理由はこれです」

言つて、義足の足を示し

「彩世さん、僕の身体を見てください。僕は以前の僕ではないのです」

慎吾はこれまで会いに来れなかった理由を説明した。

勿論、鈴木（祐二）とのことも語った。

彩世は、慎吾を探したことを話したが、祐二のことは話せなかった。なぜなら、祐二の名前を口にするだけで、胸が潰れそうになるからだ。

「そんな苦しい事があったのね。何故、連絡してくれなかったの。もし、報せてくれたら私は飛んで行ったのに」

彩世が悲しそうに言った。

「僕は、彩世さんが、どんなに苦しんでいるかも考えずに、何の連絡もしなかった僕を叱ってください。どんな罰でも受けます」

「罰するなんて、慎吾さんの受けた苦しみを考えると、とても、出来ないわ」

「じゃあ、僕を許してくれるんですね」

第145部

「はい」

「じゃあ、婚約は？」

慎吾が不安そうに尋ねた。

「婚約は破棄してないわ」

「じゃあ、結婚してくれませんか」

「その返答は、少し待ってくださいね」

「分かりました。どうか、一ヶ月でも二ヶ月でも、いや、何年でも待ちます」

慎吾が二年間も苦しみながら自分のことを思い、今日、この身体で会いに来てくれたことを思うと婚約解消を告げられなかった。

「彩世さんのご両親に非礼をお詫びしたいです。どうか、ご両親に会わせてください」

「父と母は、慎吾さんの元気な姿を見たら、きっと、喜びます」

慎吾の顔は喜びに溢れた。

「ユリにあげる絵が出来上がるまで、少しの間、待っていてくださいね」

「いいですよ。僕のことを忘れて写生してください」

写生した絵を百合に捧げた彩世は、慎吾を我が家へ案内した。

彩世の両親は、慎吾を暖かく迎えた。

しかし、彩世と結婚するためには、一つの条件をだした。

条件とは、彩世と慎吾が結婚を前提とした付き合いを一ヶ月以上した上で、彩世に結婚を申し込むであった。

慎吾が彩世に対して、正式に結婚を申し込む日は九月十日と決めた。

しかし、その日が近づくに従い、彩世の苦しみは、日を追うように大きくなった。

苦しみの原因は、いかに慎吾との再会が感動的だったにしろ、慎吾との結婚を承諾したかのような返答をしたことである。

そして、すみれの話が一層、彩世を苦しめた。

すみれの話とは、八月三十日、彩世が家の前を掃除していると、すみれが通り掛かり、真剣な眼差しで言った。

「サヨ姉さんは、樫山祐二と結婚するんでしょう。おめでとございます」

突然、知らない筈のすみれから愛する人の名を言われ、彩世は飛び上がるほど驚いた。

「どうして、祐二さんの名前を知っているの？」

すみれは、観光案内をしたことや、展望台から車で出てくることを見たことを話した。

「そうだったの、でも祐二さんは婚約者でなく知人なのよ」

「じゃあ、結婚しないのね」

すみれは急に明るい顔をした。

（祐二さんを、すみれが観光案内したのは何時の日だろう、そうかわ、きつと、私と初めて逢った時に歩いて帰ると言っていたから、その時と思って間違いないわ。でも分からないのは、車で展望台から出てきたことよ）

第146部

彩世の胸は、祐二恋しさで、胸が張り裂けそうになる。

また、慎吾との結婚は、祐二との愛が完全に断たれたのだ。

そう、思うだけで、彩世は死にたくなるほど辛い。

(これでいいの?)

我が心に問い掛ける彩世。

(今更、どうにもならないわ)

諦めきれず。

「祐二さん、助けて」

思わず助けを求めている。

彩世がいくら悩んでも、日時は待ってくれず、結婚を承諾する日が後五日に迫った、九月五日の夜。仕事から帰ってきた父親が彩世を応接間へ呼んだ。

行くと、すでに母親が来ていて、立っている彩世に自分の隣の席を示して言った。

「ここへ座りなさい」

彩世が座ると、父親が尋ねた。

「慎吾くんの結婚申し込みを受ける覚悟は出来たかな」

「はい」

断りたかったが、慎吾に申し込まれると断れない自分の心を知っている彩世だった。

翌日の夜、沈む彩世の姿を見た父親を見た父親が心配げに尋ねた。

「気分が優れないようだね。何か心配なことでもあるのか?」

彩世が黙っていると母親が

「訳を隠さずに言いなさいよ」

優しく諭した。

すると、父親も

「彩世の苦しむ姿を見ていると捨てておけないんだよ。一人で苦し

まず、私や母さんに話してくれないか」

そう、言われても、天見家では、祐二のことは禁句になっているため、彩世は答えられないのだ。

尚もいい洪る彩世に、助け舟をだすように母親が、

「父さんや母さんは、彩世が苦悩する原因を知らない振りをしているけど、本当は知っているのよ。苦しみの原因は祐二さんのことですよ」

母親が同情するように言った。

彩世が驚いたような顔をして頷くと。

「やっぱりね」

第147部

母親が悲しそうに言った。

父親が、祐二の話題を禁句にしたのは、祐二に慎吾探しを中止するように言ったらその日から彩世との連絡を断ったことを、彩世の母親が闘病中に彩世から聞かされた。

そこで、父親は、祐二が彩世を助けていたのは、彩世への愛でなく、悲しみから救うために、優しくしていたのだと解釈し、彩世の心から祐二を消すために取った処置だった。

禁句だった祐二の名を父親から言われ、彩世は気持ちが悪くなった話した。

「祐二さんにお逢いしたい、そして、お詫びがしたい、でもお逢いできないから、苦しくてならないの」

言くと、彩世は泣き出した。

「じゃあ、慎吾くんとの婚約を破棄し、祐二くんを待つか」

「今更、約束を破れないわ」

すると、母親が、

「じゃあ、どうしたら、その苦しみから抜け出ることができるのと尋ねる。」

彩世は何も思いつかない。

「私は、祐二くんを探し出し、お礼とお詫びをしたいと考えていた。どうだ、彩世も一緒に行こう、そして、祐二さんに逢った上で、今後の進路を決めるのが良いと思うよ」

父親が言くと彩世が、

「でも、祐二さんが許してくださるかしら」

彩世が哀しげに言った。

そんな彩世を、母親は叱る。

「馬鹿な彩世、許してくれるかの問題ではないのよ。ちゃんと、お礼とお詫びをするのが人間の道なのよ。許してくれなかったら、何

度でも謝ればいいわ」

「母さんの言うとおりだよ」

父親が同調する。

「有難う、父さん母さん」

彩世の顔が明るくなった。

「そうと決まったら、明日、祐二君を捜しに行こう」

「行くつて、何処へ？」

「祐二君の実家だよ」

「じゃあ、島根県の」

「そうだよ、ご両親なら祐二君の居所を教えてくれるからね」

「島根県と簡単にいっても、広いでしょう。一日や二日で捜せるの？」

彩世が不安そうに尋ねた。

「電話帳に載っている檜山さんを、一軒一軒、訪問すれば、必ず、探し出せるよ」

第148部

「でも、母さんを一人にするのは不安だわ」

「明日、私の妹が見舞いにきてくれるから大丈夫よ」

母親の言葉で、彩世は捜しに行く決心がついた。

翌日、彩世は父親が運転する車の助手席に乗って島根県へ向かった。

車が高梁市と新見市に中間に差し掛かったとき、川の浅瀬を一人の男が水飛沫を上げながら、川下に向かって渡って行く姿を彩世は見た。

「馬鹿な私！」

と、言って泣いた。

「彩世、どうした？」

驚いた父親は、車を急停車させて尋ねた。

それに応えず、彩世はドアを開けると、後部座席へ移り、座席に泣き伏せると、哀しげに言った。

「私は大切なことを見逃していた」

今、彩世の目に映っているのは、彩世が車で送るといふ申し出を祐二が断り、歩いて帰る姿と、子供にストーカーと言われた男の姿が一致したのだ。

「あの時、私は祐二さんから愛されていないと思ったけど、祐二さんは私を愛し、逢いにきてくれたんだわ。その証拠に私の髪型とヘアバンドを覚えていたくれたこと。もしストーカーを追いかけ、顔を確かめていたら、今の苦しみは無かった」

激しく彩世は泣いた。

「でも、祐二さんは諦めずに、川を渡って私に逢いに来てくれたわ。その時、祐二さんは、僕の大好きな高梁川を見に来たと言っていたけど、その真の意味を知ったのは、ループ橋の展望台へ行ったとき、祐二さんが高梁川は彩世さん、彩世さんは高梁川と言った時だった。

私も祐二さんが慎吾さんより好きだった。でも、いくら好きでも、婚約している私が、祐二さんに好きです、とは言えなかった。だから、私は卑怯にも運を天にまかせてしまった」

彩世は愚かな自分に気づき、尚も泣いた。

（今、すみれさんが言った意味が分かったわ。祐二さんとすみれさんが会ったのは、祐二さんが子供にストーカーと言われた日や、私と初めて逢った日でなく、その中の日に違くないわ。祐二さんは、何度も私に逢いにきてくれたのね。帰ったら、すみれさんに、何時だったか確かめます。祐二さんが展望台から出てきたのは、きつと私が慎吾さんと再会した日だったのね。祐二さんは、何時も私も見守っていてくれたんだわ。祐二さんの愛に答えられなかった私を許して）

父親は、彩世の悲しみが祐二と分かっているが、今は声を掛けるべきでないと思い、無関心を装い、運転に専念した。

しばらく泣いた彩世は、また、助手席に戻った。

第149部

「車を出していいかい？」

父親が優しく尋ねた。

彩世が頷くと、父親は車を発車させた。

その頃、出社した祐二が仕事していると

「榎山くん、相談がある」

上司が緊張した顔で言った。

「何でしょうか？」

祐二が課長の前に行くと、

「君の生家は、たしか島根県の松江市だったね」

突然の問いに祐二は緊張して答えた。

「はい」

課長が続ける。

「担当者のミスで、得意先から注文された商品を送っていないかったんだ。その商品は開店日に売り出すもので、新聞の折り込み広告にも載せている」

そこで課長は言葉を切った。

開店日に会社の商品が店頭になれば、買い物客からのクレームは必死だろう。店は会社への信用を失うことは祐二にも理解出来た。「開店日は九月八日、明日なんだ。すぐ商品を送りたいが、急なことで配送の手配がつかない、そこで、山陰地方に詳しい君にその役目してもらいたいと思っっている。引き受けてくれないか？場所は島根の太田市なんだが」

どんな事かと緊張していた祐二だったが、話を聞いて安心した。

「はい、お受けいたします」

「そうか、有り難う。先方は、品物を今日の午後六時までに届けてくれと言っているんだが、今からでも間に合うかね？」

「大丈夫です」

「そうか、じゃあ頼むよ。あつ、そつだ、肝心なことを言い忘れていた」

「何でしょうか？」

「今、全ての車が出払っていて、運ぶ車がないんだ。そこで、悪いが君の車で運んでくれないか？」

「いいですよ」

言ったものの、一瞬母親の顔が浮かんだ。

(これは仕事だからね母さん)

内心で母親に言い訳をしていた。

確かに、この状況下では、夢の話を持ち出して断れない。

「ところで、太田市まで何時間で行けるのかね」

「正確な時間は分かりませんが、五時までにはお届けできます」

「そうか、しかし、確実に商品をお届けしなくてはならないという使命があるから、決して無理な運転はせず、多少遅れてもいいから、制限速度は絶対に厳守してくれたまえ」

「はい、気をつけます」

「まして、今回の業務は君の仕事ではない。もし、事故があれば会社の責任を問われることになる。くれぐれも慎重にな」

「はい」

「じゃあ、午後五時ごろにお届けすると、先方様には連絡しておくからね」

祐二が席に戻りかけると課長が

「待ちたまえ、まだ、話は終わってない」

「何か他にも？」

課長は卓上カレンダーを見ながら

「今日は九月七日の木曜日だ。配送の専門家でない君を、今夜中京都へ戻らし、明日通常どおりの業務に付かせる訳にはいかない。そうだ、今夜は実家で泊まり明日帰って来てくれればいい。いや待てよ、君が会社へ戻ってきてても、仕事をする時間がない。まして明後日は土曜日、社は休みだから、日曜日まで実家で休養を取ったらいい」

祐二が半信半疑で尋ねる。

「そんなにして頂いていいんですか？」

「勿論だよ。それほど、今回の任務は重要なんだ」

「分かりました。慎重にお届けいたします」

課長に挨拶をして祐二は職場を出た。

祐二が、自分の車を商品倉庫の前に停車させると、商品管理担当者、課長からの指示があったのか、商品を祐二の車に積載する。

やがて、商品の積載が終わり、祐二が車を発車させた。

運転しながら祐二は謝る。

（まだ、母さんの許しが出ていないのに、車に乗って帰ることを許してください。そうだ、謝ることはないね、帰るのではなく、仕事で太田市へ行くんだから）

仕事の所為に行っているが、実の所、内心では嬉しくて堪らないだ。何故なら、車は中古になったものの、二年前の目的が果たせるからだ。

国道九号線に入ってから、祐二の脳裏に切ない過去が浮かぶ。

二年前の夕暮時、少女と一緒に美しいお伽話を聞きそのお伽話の世界へ行きたくなり、やくもという電車に乗って、お伽の世界へ行った、

そこには、河原に立ち上る陽炎みたいな美しい女性がいた。

その彩世に恋をし、捕まえようと手をのばしたが、すでに恋人がいた。諦めた心算数でいたが、あきらめ切れずに日々、哀しみの中にも幸せを感じ、生きていることの素晴らしさに酔っていた。しかしそれも、粉雪の降る日に終わった。

しかし、彩世と慎吾の幸せが気になって、永遠に別れを告げた高梁市を訪れたのだ。

第151部

辛い思い出が祐二の目を濡らす。涙に曇る目にサービスエリアが入る。祐二は予定どおり休憩を取った。

止まらない涙に、二年前の家路雲が映り、耳に母の声が聞こえてくる。

「車に乗って帰省しないでね」

同時に、疑惑が湧いた。

（もし、二年前、この道を車で帰省していたら、僕はどうなっていただろう）

それを知るすべもないが、ただ、分かっていることは、彩世に逢えなかったことは確実である。

今、母親が禁じた車に乗って故郷へ行かなくてもよい運命に変えられたのは、彩世の愛を得た時と、鈴木に職を譲らないことだった。だが、祐二には、どちらも出来なかったため、今、このサービスエリアにいるのだ。

（僕は、どっちにしても、通る道はこの道しかなかったんだ。夢は逆夢が多いというから、母さんの心配は、僕を死から守る為でなく、彩世さんと逢わず為の禁止だったんだ。それなのに、僕は母さんとの約束を破った。ごめんよ、母さん。帰ったら、有り難うと、心を込めてお礼を言います。そして、死なないうよう、安全運転に徹することを約束して帰ります）

祐二は、切ない思いを胸に仕舞い、車を国道二十九号線に乗り入れた。やがて、島根県の安木市に入ると、路肩に停めていた車が急発進して、祐二の車に並びかけた。

祐二がその運転者を見ると、高校時代の友人、市田良夫だった。懐かしそうに祐二が手を振り、車を路肩に停めると、良夫も、祐二の車の後ろに停車した。

二人は歩道に上がり再会を喜んだ。

「良夫と会うのは高校生以来だな、車を路肩に停めて何をしていたんだ」

祐二が言うと

「妻が来るのを待っていたんだ。所で、沢山の荷物を積んでるが、実家の商品？」

「違ふよ、社用で浜田市へ行く途中なんだ」

「京都からなら、高速道路が早く付けるだろう」

「走り慣れた九号線が安心だから、この道を選んだんだ」

「そうか、じゃあ、長話しも出来ないだろう。そうだ、今朝の漁で鯛を釣ったから、生け簀に入れて生かしてるんだ。仕事の帰りに俺の家へ寄って、鯛を持って帰ってくれ」

良夫の実家は日御崎で漁師をしている。

「駄目なんだ、仕事からだ」

「じゃあ、今日中に京都へ戻るのか」

「違ふよ、仕事は商品を届けたら終わりだ」

「じゃあ、なんの支障もないじゃないか」

会社の車で、友人の家に行くのは駄目だが、自分の車で行くのだから問題ないと考えた。

「それもそうだな。生きた新鮮な魚を食べるのは、高校時代、君の家へ旅の家へ遊びに行ったときに、君のお父さんから頂いたブリ以来だな」

第152部

「そんな昔のことを覚えていたのか」

「忘れるはずがない。僕が故郷を思い出す時には必ず、あの日の君のお父さんの優しい顔と、ブリの美味しさを思いだしていたよ」

「俺の顔は？」

「すまん」

「薄情な奴だ」

真顔で言う良夫に、祐二が真剣に反省していると

「馬鹿、本気にするな」

良夫が豪快に笑った。祐二は故郷に帰ってきたことを実感した。

「お前がきたら、俺の両親は大喜びをするから、必ず来てくれよ。」

「そうだ、何時頃来れるかな？」

「そうだな、午後七時前になるだろう」

「分かった、ところで、お前が帰っていることを、実家の人は知っているのか？」

「仕事だから報せてないよ」

「じゃあ、家族の人たちも驚くだろうな」

「新鮮な真鯛と同伴だから、きつと、腰を抜かすなよ」

「大袈裟だな」

言った後、良夫が尋ねる。

「時間の余裕があるのか、あれば、コーヒーでも」

祐二が時計を見て

「悪い」

「そうか。それなら早く行けよ。積もる話は、俺の家で」

頷いた祐二は、車を発車させながら思っていた。

（会社の車で来ていたら、商品を届けると、真つすぐ実家へ直行するしかないのだが、自分の車だから、良夫の家へ行ける）

と納得していた。

祐二が進む前方の交差点では、信号が赤になり反対車線には、彩世と父親が乗った車が停止車していた。祐二か車を発進させると同時に、前方の信号が青に変わった。

その時、彩世を乗せた車は左折して、祐二が交差点に来たときには、彩世を乗せた車は遙か向こうに行っていた。

もし、良夫に会わなかったら、祐二の車は信号で、彩世が乗った車を鉢合わせ状態になり、互いの存在を見つけただろう。

太田市は出雲市の西側に隣接する市である。

彩世と逢える機会を逃したことも気付かず、国道九号線を太田市へ向かって走った。

直進すれば、祐二に逢えたことも知らず、彩世が父親に尋ねた。

「もう、三時を過ぎているわ。今日中に祐二さんに逢えるかしら」

「そうだな。まだ、三日あるが、今日は暗くなっても、捜すからね」

第153部

「はい」

「もし、今日、捜し出せなかったら、予定どおりホテルに宿泊して、明日は早朝から始めよう」

「そうね」

二時間後、父親の携帯電話が鳴る。父親は車を路肩に停車して携帯電話を見る。

「母さんからだよ。きっと、結果が知りたいんだ」

聞いている父親の顔が見る見る喜びに変わると、すぐさま、メモにペンを走らせた。

父親は書き終わると、電話を切った。

「何なの？」

彩世がメモを覗き込んだ。

「喜べ、祐二くんの実家の住所と電話番号が分かったよ」

「本当？」

「かあさんが妹に事情を話すと、偶然、妹が榎山さんという若い国会議員を知っていて、その議員の弟さんの名前が祐二さんと聞いたことがあるそうだよ」

「そう、分かったのね」

彩世の脳裏に、お伽話を語る声、桂川の出会い、皇居の鬼ごっこ、ループ橋での話、ドライブ、背負われて登った山、そして、高原、海辺、楽しかった日々が蘇り、知らず知らずに泣いていた。

「泣くな、泣くのは、祐二くんに逢ってからなければいい」

頷く彩世だが、心の中では、様々な葛藤が繰り広げられているのだ。

父親が言う。

「祐二くんが家に居ればいいんだがね」

彩世の心臓がどきっと波打つ。

「居るの？」

反射的に、彩世が尋ねる。

「それは、行ってみないと分からないよ」

彩世は祐二が実家に居るなど考えもしていなかったのだ。

（祐二さんと逢ったとき、私はどんな態度をとればいいのか。もしかすると、祐二さんに抱きついて行くかもしれないわ）

彩世は自分の行動に自信が持てなくなり、逢うのが恐くなってきた。

「祐二くんの実家を教えてくれた人の話では、祐二くんの住所は知らないが、京都で勤務していると言ってたから、平日の今日、実家に居ないだろう」

父親の言葉を聞いて、失望すると同時に、胸を締め付けられるような切なさが入み上げてくる。

「祐二さんのご両親にお会いしたときには、父さんが訳を話してくれるの？」

心配する彩世に父親が言った。

第154部

「彩世が話すんだ」

「わたしが！」

「そうだ」

「わたし恐いの、ご両親に会うのが」

「勇気を出すんだ、彩世」

彩世は、しばらく考えていたが、縋るような目をした言う。

「すぐ、父さんが祐二さんの実家へ電話をして、祐二さんの電話番号を尋ねて下さい」

「それは駄目だ」

「何故？」

「今時、見ず知らずの者から電話番号を尋ねられても、教える人は誰もいないよ」

「そうね」

「恐いからといって、尻込み出来るほど小さな問題でない。祐二くんがくれた真心には真心で返さないとね」

「そうね、わたし間違ってるわ」

「よし。父さんも手助けをするからね」

「でも、どう話せばいいの？」

「全てを正直に話す、そう、愛していたことも彩世が恥ずかしそうに俯いて言う。

「知っていたの」

「親だからね」

「母さんも」

「ええ」

「私一人の秘密でなかったのね」

両親が頷く。

「事情を話したら、ご両親は、祐二さん呼び出してくださいわね」
「そうとも限らないよ」

「なぜ？」

「もし、祐二さんの父親なら、これは二人の問題だから、おまえが電話するようにと、彩世に電話を教えしてくれるんじゃないかな」

「じゃあ、祐二さんのお母さんなら？」

「私が呼び出しますと、言う筈だよ」

「なぜ分かるの？」

「単純だが、我が家がそうだから」

「そうね、でも、電話では思っていることが十分に伝えられなかったら、父さんも一緒に、祐二さんの居る所へ行ってくれて欲しいよ」
「勿論、行くよ」

第155部

「早く、お声が聞きたいわ」

そして、時計を見て尋ねる。

「後、どのくらいで祐二さんの実家へ着くの？」

「そうだなあ、約一時間ぐらいかな」

一時間後、松江駅近くへ来た時、父親がファミレスを見つけて言った。

「そうだ、樫山家のように、園芸業を営んでいる人達は、夜明けから日暮れまで働くことがあるから、今、行っても居ないかもしれないから、夕暮れ時に伺うことにしよう」

だが、祐二の両親は家に居た。

車がファミレスの駐車場へ入った時、彩世が言った。

「間もなく祐二さんの声が聞けるのね」

「うん、開けるよ」

「嬉しい。わたし、祐二さんの声を聞いたら、何も話せず、きつと泣き出すわ」

「泣けばいい。今日は自分の心に嘘をついてはいけないよ。でないと、将来に大きな悔いを残すことになるかな」

父親が励ました。

「有り難う、父さん」

車から出た父親と娘はファミリーストランへ入っていった。

その頃、祐二は愛する彩世と逢えることも知らず、車を走らせていた。

小野めぐみが勤務先を退社し、帰宅しようとしたとき、携帯電話が鳴った。

「はい、めぐみ」

めぐみが甘えた声で答えた。

めぐみは相手がいっその場所で会おうと言ってくれるものと思っ

ていた。

しかし、その期待は外れた。

「困った問題が起きたよ」

「何？困ったことって？」

めぐみが驚いて尋ねた。

「実は、妻が、僕と君の関係を知り、どうしても君と会って話したいと言って聞かないんだよ。会ってくれるかな？」

「嫌よ！断って」

「僕が引き止めたが聞かずに、もし、会ってくれないなら、君の実家へ行って、君の両親に会つと言うんだ」

めぐみの顔がみるみる蒼白になった。そして、抗議するようにつづった。

「それは駄目よ」

「僕もそう言ったんだが、聞かないんだ。だから、僕と君と妻の三人で会うしかない」

第156部

「会ってどうするの?」

「僕はそこで妻にはつきり言つよ」

めぐみは、期待して尋ねる。

「奥さんと離婚するの?」

「そつだ、君と結婚するとね」

「本当に?」

「嘘は言わないよ」

「嬉しい」

めぐみの目から涙が流れ出した。

「じゃあ、会つてくれるんだね」

「はい」

「じゃあ、君の大切な場所である、日本海に美しい夕日が沈むところが見られる小さな展望台で待つていてくれないか」

美しい夕日が沈む海は、誰にも見せたくない。

まして、今回のような争いの為に使う場所に相応しくないと、思いが強く働き、めぐみは、他の場所を指定した。

「分かった。じゃあ、待ち合わせ時間は午後七時でいいね」

「ええ」

「じゃあ、待つているから、間違いなく来るんだよ」

「ええ」

携帯電話をバックにいれながら、めぐみは、待ちに待った時がやっと来たと、嬉しそうに言った。

「今日で不倫は終わり、明日からは私は彼のもの」

言ったものの、間もなく始まる修羅場を考えると不安でたまらない。

(何事もなく終わるのだろうか?)

待ち合わせの時間まで一時間以上ある。レストランへは先に行きた

くないため、時間つぶしを兼ねたドライブをすることにした。
（そうだわ。私の大好きな展望台へ行き、夕日に私の幸せを報告するわ）

思いついたためぐみは、車を県道二十九号線に乗り入れ、日御岬に向かつて走る。そのめぐみの顔に夕日が射した。

車は断崖絶壁に作られた曲がりくねった道から、日本海を左側に見て走る。断崖絶壁下には大小。様々な形態をした磯が、カーブを曲がるたびに現れる。その磯や海岸は、今は穏やかだが、冬になると、荒々しく景色を一変させる。

夏休みの間中、この道路は、海水浴や 日御岬灯台見物の車が多く通っていたが、夏休みが終わった今、夕暮れも重なり、めぐみの車に続く車もなく、また、対向車には一度も出会っていないかった。

第157部 家路雲

やがて、右側の断崖絶壁上に小さな展望台が現れてきた。めぐみは車を降りると、祐二と語り合った展望台へ上がったといった。

その時、夕日は日本海に沈み始めた。同時に、青い海と空の白い雲が黄金色に変わっていき、地上の全てを明るく染めた。その美しい景色を見ためぐみは、祐二を思い出した。

その時、他府県のナンバーを付けた二台の車が急停車すると、車の中から髪を金髪に染めた、見るからに恐ろしい形相の男が三人が降りて来た。

一人の男が、めぐみに向かって馬鹿丁寧に、

「その美しいお嬢さん、何をしているんですか」と言いながら、辺りを見渡す。

本能的に危険を感じたためぐみは、何も言わずに自分の車へ逃げ込み、車のエンジンをかけ発車させようとしたが、男たちは、自分達の車でめぐみの行く手を塞いだ上、車を動かさないようにタイヤをパンクさせた。

めぐみは恐怖から、携帯電話で警察を呼ぶ事もできず、車内で震えていた。

三人の若者は悪魔の様な形相で車を取り巻くと、出てこいと大声で怒鳴り、車を叩いたり、蹴ったりしたが、めぐみがドアを開けなため、自分達の車からバットを持ち出し、車の窓を打ち続けた。

やがて、ドアのガラスが破れ、男達は車のロックを外し、めぐみの腕をとり、車外へ引っぱりだした。

「助けて！」

めぐみは必死に抵抗しながら助けを呼んだ。しかし、人影一つない断崖道。

そのことを男達は知っているのか、悠々とした態度で、めぐみを自分の車へ乗せようとした。

乗せれば、何処か人気のない淋しい場所へ連れていき、三人で代わる代わる陵辱したあとで、犯行がばれないように殺し、海か川へ捨てる心算なのだ。

今まさに、めぐみが車に押し込められようとしたとき、一台の車が急停車し、一人の男が飛び出してくると、一気にめぐみを取り返して言った。

「乱暴なことはするな」

男は祐二だった。

めぐみを拉致し強姦しよとしていた男達は、急に現れた祐二に対して、一瞬たじろいだだが、すぐ、一人だと知ると、何も言わず、二人が同時に襲い、一人が祐二の車にタイヤもパンクさせた。

タイヤをパンクさせるのは、襲った者を絶対に逃さない、そして、悪事がばれないために行っているのだ。

この手慣れた動作から、今日まで、数えきれないほどの悪事を働いていることが予想され、祐二は油断ならない相手だと思った。

三人の男達は、祐二を取り囲むように襲ってくる。

祐二の力なら、本気をださなくても、攻撃すれば、即座に暴漢たちの腕や肋骨を折り、戦意を喪失させることくらい簡単なことだった。

だが、躊躇した、中学の時、暴力を振るって暴れ回る少年を、なげとばし、大怪我をさせたことを思い出したのだ。

まして、今は、柔道、空手の高段者である。

もしあたりどころが悪ければ、相手が死ぬのは確実だ。

いくら正当防衛とはいえども、思い切った攻撃ができない。

この難関を最小限の被害で終わらすためには、防御しながら、他車を通るのを待つ作戦を選ぶしか無かった。

男達は、祐二の思惑に関係なく襲いかかってくる。いつしか祐二は男達の車を背にして、我が身を防御していた。

だが、その車の中には他の三人を手足に使う狡賢い男達のリーダーが隠れていた。

首領は車から、そっと出ると、祐二の背中にナイフを一気に突き刺した。

瞬間、血が辺りを真っ赤に染めた。その血を見た若者達は、狂ったように、祐二に飛びかかり、殴る蹴るの暴行を働く。

めぐみ、その様子を目のあたりにしても、恐怖で心体が氷のように固まり、警察に助けを求めることも思いつかなかった。

祐二は致命傷を負いながらも、二人を立ち上がれないほどの攻撃を加えた。

その時祐二の上着から携帯電話が路上に落ちた。

そして、痛みに堪えられなくなった祐二の身体は、朽ち木を倒すように倒れた。

携帯電話を見ためぐみは、自分が何をすべきか気づき、恐怖で震える手で、携帯電話を操作した。

仲間を二人倒され、警察に通報されては我が身が危ないと思った男達は、やばい、と叫びながら、立ち上がれない仲間を車に押し込み、猛スピードで逃げていった。

真っ赤な血で染まり、路上に倒れた祐二に駆け寄っためぐみは、祐二に覆いかぶさりながら叫ぶ。

「祐二さん、しっかりして！」

めぐみは。血が溢れでる箇所を手で押さえ、

「私のために、こんなことになって、ごめんなさい」

めぐみの目から、大粒の涙が流れる。

「大丈夫だよ」

祐二はめぐみを安心させようと微笑んだ。

「なぜ、自分の命を掛けて、私を助けてくれたの？」

「貴女に、自由な明日をあげたかった」

「私は、貴女と結婚したくないと言った女なのに、、私が殺されればよかったんだわ」

めぐみはまた涙を流した。

「自分を責めないでください」

「いえ、私が殺されていたら、祐二さんがこんな目に遭わずにすんだわ」

第159部分

「違う、例え、僕が死んでも、あの男達はきつと逮捕される。逮捕されれば、もう、被害に遇う女性がなくなるんです。その為には、僕の命をいくら犠牲にしてもいいと思っっています。だから、めぐみさんには何の落ち度も責任もありません。絶対に死ぬなど考えないでください」

祐二がめぐみの苦しい心情を察して言うと、めぐみは、こんな酷いめにあわされても、まだ、私のことを考えてくれるのかと泣き崩れた。

祐二は、意識が朦朧としていて、めぐみの顔がはつきり見えない。その見えない目を大きく開いて聞く。

「怪我、ないですか」

祐二がめぐみに尋ねた。

「ええ、祐二さんのお陰よ」

苦しさに堪えながら、めぐみの身を案じてくれる祐二の優しさに、めぐみは胸が張り裂けるような悲しみに襲われた。

祐二が苦しい息遣いで言った。

「めぐみさんに、お礼を言いたいと、思っていました」

「なんででしょう？」

「小説のことです」

「あの小説、書けましたの」

「ええ、二人は巡り会い結婚します」

「この私が祐二さんのお役に立てたのね、嬉しい」

そして、めぐみは祐二の顔を胸に抱き、神に祈るように言った。

「死なないでお願い！」

「僕は死なないよ」

言つと、最後の力を振り絞って起き上がると、展望台へ上がって行くこととする。

「動いたら駄目、病院へ行きましょう」

めぐみは、祐二を自分の車に乗せようとした。

「車はパンクされているから走れないよ。救急車が来るまで夕日を見たい」

言って、祐二は展望台へ向かおうとする。

展望台までの距離は二十歩に満たないが、祐二一人では到底、到達できないだろう。

めぐみは、祐二が自分の人生を確かめようとしていると気づき、

祐二の身体を後ろから支え展望台へ向かった。

着くと同時に祐二は力つきたのか身体が倒れ始める。

めぐみの力ではそれを防げず、崩れるように二人は倒れた。

めぐみは、祐二が夕日をよく見えるように、祐二の上半身を起こし、背を自分の胸で抱くように座らせた。

祐二の目に、日本海に沈む夕日が見えた。

「帰ろう」

第160部

祐二が呟いた。

意識が朦朧としていた祐二は、一瞬、子供の頃に戻っていたのだ。

「すぐ帰れるわ、だから、死んじやあ嫌よ」

めぐみの悲痛な声に我に帰った祐二が

「また、めぐみさんと、一緒に沈む夕日を見られましたね」

「明日も明後日も一緒に見たい。だから、救急車が来るから頑張つてね」

めぐみは、救急車のサイレン音に聞き耳をたてるが、何の音も聞こえてこなかった。

「頑張る、から、泣かないで」

めぐみを安心させるように祐二が言った。

「祐二さんが死んだら、私は生きて行けない！」

めぐみは祐二の耳に口を寄せて言った。

「ご両親に連絡するから電話番号を教えてください」

祐二は、めぐみに両親の電話番号を聞かれるまで、まだ、暴漢達と戦っていた。

しかし、めぐみの言葉で、涙を流す母親の顔が浮かんだのだ。

（ごめんよ母さん。家路雲が現れても、僕は家に帰れないかもしれない）

死を感じても涙さえ見せなかった祐二は、母を思いだし、涙が溢れ出て止まらなかった。

（父さん母さん、兄弟と話せるなら、話したい、何時までも）

祐二は心の中で叫んでいた。

（でも、僕の声聞けば、きっと母さんは泣き出すだろう、母さんだけには、僕の苦しみの声を聞かせたくない）

祐二は我慢しようと決意した。

そんな祐二の思いを知らないめぐみは

「もう、電話番号も思い出せないのね、」
めぐみはせつなさに、祐二を固く抱き締めていた。
しばらくそうしていためぐみだが

「ご家族にどう報告していいの？連絡をする方法がない、無いわ」
混乱しているめぐみは路上に落ちた祐二の携帯電話のことを忘れて泣いていた。

祐二は両親に心の中で感謝と親不孝を詫びた。

（父さん、母さん、そして兄さんに妹の美保、僕はめぐみさんが殺されたり、屈辱を与えられ、人間としての自由を奪われるのを、男として黙って見逃すことが出来なかったんだ。

だから命を失っても後悔はしていません、ですが、父さんや母さんの嘆きを思うと心が痛みます。どうかこんな僕を許してください。そして、父さんや母さんに感謝したいことがあります。それは、三人兄妹を生んでくれたことで、僕は自由気ままに生きることができたからです。どうか僕が居なくなっても悲しまないでください。僕に会いたかったら、兄さんや美保を見てください。僕はそこに居ます）

最終回

祐二の脳裏に家族と楽しく過ごした日々がよみがえった。

「めぐみさん、僕の、言葉を両親に伝えてください」

祐二の声が小さいので、めぐみは自分の耳を祐二の口元に近づけた。

「僕の人生は、優しい家族に恵まれて幸せでした。どうかめぐみさんの、力になってあげてください。それから、母さんは、僕が母さんの近くで死ぬのは耐えられないと言っていたのに、死ぬ僕を許してください。でも僕は母さんや父さんの近くで死ねたら幸せだと思っています。だから悲しまないで、と、伝えて、ください」

その言葉にめぐみは泣きながら応えた。

「伝えます！でも、それは祐二さんと一緒に伝えたいです！」

めぐみは、祐二の人間愛を知り、自分の犯した罪の深さを嘆く。「私は妻子にある男性と付き合い、あわよくば、その人の妻になるうとしていました、何の罪も無い奥さんや子供さんから幸せを奪い、不幸のどん底に陥れ、場合によっては自殺させていたかもしれないわ。祐二さんをみると、そんな自分が恥ずかしい。もう不倫は絶対にしません。この美しい日本海に夕日が沈む様子を、祐二さんと一緒に、いつまでも見ていたい。どうか、祐二さんを死なせないでください。それが叶わないなら私も一緒に死にます」

祐二は、父親が常日頃、人間が人間を助けなければ誰が助けるのか、と、哀しげに言っていたので、父親なら、めぐみの苦しみを取り除くことが出来ると思った。

「めぐみさんが死んだり、自分を責めていると、僕は死んでも死にきれないから、力強く生きてください。もし、辛さに堪えられなくなったら、、、僕の父に苦しみや悲しみの事情を話して、ください。きつと、父は、あなたの心を癒してくれるでしょう」

そう言うと、祐二は力尽きたように目を閉じた。同時に夕日は日本海に沈み、美しい夕焼け雲が現れた。

自分の命の火が消えかけても、めぐみを案じる祐二だった。

「そんなに私のことを、」

あとは言葉にならず、ただ、祐二を抱き締めるめぐみだった。その刺激で、祐二は消えかけた意識が戻ったのか、目を微かに開いた、その目に夕焼け雲、子供のころから家路雲、と呼んでいた雲が映った。

「帰れなくて、、ごめんよ、、母さん」

祐二が悲しそうに言った。

「嫌！悲しいことを言わないで」

めぐみが祐二の頬を伝う涙を拭った。

その時、祐二の携帯電話が鳴った。電話の主は彩世だった。

携帯電話をとれば、祐二が最も聞きたいと思っている彩世の声が聞こえたのだ。

だが、祐二はどこまでも不運なのか、祐二の携帯電話は、展望台から離れた道路にあり、祐二には聞こえなかった。

祐二が何か言いたそうにしていた、しかし、なかなか言葉にならない。

祐二は命と引き替えに全ての力を振り絞って言った。

「あ い し て い る た か は し が わ !」

めぐみには意味が分からなかったので、聞き直したが、祐二は応えなかった。

もし、祐二が同じ言葉を言ったとしても、めぐみには分からないだろう、この言葉の意味が分かるのは、この世にただ一人しか居ない。

だが、その人は他人の恋人だった、そして、今は親友の妻となる人。どうして愛していると言えるのか。

その切ない思いを、今生の別れに「愛している」と、ただ一度だけ言いたかったのだ。だが、愛する人の名を明かす訳にはいかない。

祐二が言えることは、愛する女性の代名である、高梁川に愛していることを告げることしかなかった。

めぐみが、また、祐二の言葉の意味を聞こうとした時、祐二の全身から力が抜けた。

「死んじやあ嫌！」

めぐみが絶叫し、泣きながら祐二の身体を揺らす、祐二の目は二度と開かなかった。

愛する彩世と最後まで愛の言葉を交わすこともなく、また、母の願いも虚しく、祐二は逝った。

祐二の死と共に、夕焼けも命が消えたように、その美しい光を失い、暗闇が祐二とめぐみの姿を包み込んだ。

その暗闇の中から、めぐみの啜り泣く声と、持ち主を失った携帯電話が愛哀の音を響かせながら鳴り続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4698e/>

高梁川愛哀情物語（たかはしがわあいじょうものがたり）

2010年10月8日13時31分発行